三重県埋蔵文化財調査報告１７６

一般地方道嬉野津線雲出橋国補橋梁整備工事にかかる

小野江甚目遺跡・小野江甚目古墳群
発掘調査報告書

── 三重県一志郡三雲町小野江・甚目所在 ──

１９９９．３

三重県埋蔵文化財センター

1号墳出土馬形埴輪

序

伊勢平野の中央部に位置する三雲町の一帯は、昭和46年に発掘調査された中ノ庄遺跡・中ノ庄古墳の存在が裏付けるとおり、三重県の古代文化揺籃の地であり、畿内中央部から伊勢へのルートが歴史の波に途切れることなく、人や物資、あるいは文化を運び続けてきました。また、近年の安濃津の発掘調査からも窺われるように、伊勢湾西岸のこの一帯の海岸には砂堆が発達し、天然の良港が形成され、東海地方のみならず、東日本一帯に向けてひらけた地であったことが次第に解明されてきております。

今回の小野江甚目遺跡・古墳群の発掘調査は、国の補助を受けた県道嬉野津線の雲出橋の整備工事に伴って新たに県道が敷設されるため、関係各位の事前の協議の上、やむを得ず発掘調査することとなったものですが、従来決して埋蔵文化財の調査事例が多くはなかった三雲町内にあっては５～６世紀の古墳が２基発見され、馬形埴輪など多数の遺物も出土し、地域の古代文化を語る上で貴重な資料を得る事が出来ました。今回刊行いたします本報告書が地元の歴史の解明や、文化財保護意識の高揚に役立てば幸甚です。

なお、文末となりましたが、今回の発掘調査にあたっては、三重県土木部道路建設課、同久居土木事務所、地元三雲町、また調査地に隣接する町立小野江小学校の皆様には多方面にわたってご協力を賜りました。ここに深く感謝を申しあげ、報告書刊行の挨拶とさせていただきます。

平成11年３月

三重県埋蔵文化財センター
所長　大　井　與　生

例　言

1　本書は、平成９年度一般地方道嬉野津線国補橋梁整備工事に伴う小野江甚目遺跡・小野江甚目古墳群（三重県一志郡三雲町小野江・甚目地内所在）の発掘調査報告書である。

2　本遺跡は、分布調査から試掘調査にいたるまで「小野江南浦遺跡」として登録・認知されてきたが、今回の調査地点が字南浦からはずれていることや、同じく平成９年度以降に三雲町教育委員会が実施している埋蔵文化財詳細分布調査でも大字小野江から大字甚目にかけて広範な遺跡の広がりが想定されたため、「小野江甚目遺跡・小野江甚目古墳群」と改称し、以後これに統一することとした。

3　本発掘調査は、費用を三重県土木部（平成10年度より県土整備部）が全額負担し、下記の体制により実施した。

調査主体　三重県教育委員会
調査担当　三重県埋蔵文化財センター　調査第一課
前川嘉宏（調査第一課主査兼第二係長：調整担当）
大川勝宏（調査第一課第一係技師）
古川　毅（調査第一課技術補助員）

4　本書の執筆及び収録した遺物の実測及び拓本・写真撮影は前川嘉宏（平成９年度）、森川常厚（平成10年度）の指導のもとに大川が行った。また、遺物の整理作業においては管理指導課（平成９年度）・資料普及グループ（平成10年度）の協力を得た。

5　本調査の図面・写真等の資料類、出土した遺物はすべて三重県埋蔵文化財センターにおいて保管している。

6　本報告掲載の遺構図面はすべて真北を用いている。当地の磁針方位は西偏で約６°20′である。

7　本報告書で使用した遺構略記号は次の通りである。
ＳＢ：掘立柱建物　ＳＤ：溝　ＳＥ：井戸　ＳＫ：土坑　ＳＲ：旧河道

8　本書で使用した都市計画図は三雲町、事業計画図は三重県土木部の提供による。

9　本書で記載した遺構・遺物の色は、農林水産技術会議事務局監修の『新版標準土色帖』（1997版）に拠った。

10　本調査にあたっては、三重県土木部道路建設課、久居土木事務所、中勢教育事務所ならびに地元各位の協力を得た。特に調査区に東接する三雲町立小野江小学校・同小野江幼稚園には通学・通園児童の安全面や、写真撮影などの多方面にわたり協力を受け、三雲町建設課には現場作業員の募集にあたり尽力いただいた。また、松阪高等学校磯部克氏には石製有孔円盤の材質鑑定の御指導をいただき、松阪市埋蔵文化財センター福田昭氏には資料の調査で便宜をはかっていただいた。
なお、現地調査に際しては、下記の方々の参加を得た。記して謝意を表したい。
伊豆川久美子　伊藤美哉　大井初代　金児栄夫　神戸節子　北浦重夫　田中久子　中島宣子
中島みちゑ　西勝　西川清一　平田敏之　本田喬　松井修　松島孝昭　松島広哲　水谷一郎
山際弘子　山本直美　山本優美子　米本清　（50音順）

11　スキャニングによるデーター取り込みのため若干のひずみが生じています。各図の縮尺率は、スケールバーを参照ください。

本　文　目　次

Ⅰ　前　　言 …… 1
Ⅱ　位置と歴史的環境 …… 2
Ⅲ　遺　　構 …… 7
Ⅳ　遺　　物 …… 21
Ⅴ　結　　語 …… 41

挿　図　目　次

第１図　小野江甚目遺跡・古墳群位置図（1：50,000） …… 3
第２図　小野江甚目遺跡・古墳群周辺地図（1：2,000） …… 4
第３図　調査区位置図（1：1,000） …… 5
第４図　小地区配置図（1：500） …… 5
第５図　Ａ地区東壁実測図（1：80） …… 8
第６図　Ｂ地区東壁実測図（1：80） …… 9
第７図　Ｂ地区西壁実測図（1：80） …… 10
第８図　Ａ地区遺構平面図（1：250） …… 12
第９図　小野江甚目１号墳実測図（1：100） …… 13
第10図　１号墳周溝内遺物出土状況図（1：10） …… 14
第11図　Ｂ地区遺構平面図（1：250） …… 16
第12図　小野江甚目２号墳実測図（1：100） …… 17
第13図　２号墳周溝内遺物出土状況図（1：20） …… 18
第14図　Ｂ地区遺構遺物出土状況図（1：20） …… 19
第15図　ＳＢ１遺構平面図（1：100） …… 20
第16図　出土遺物実測図１（1：4） …… 22
第17図　出土遺物実測図２（1：4） …… 24
第18図　出土遺物実測図３（1：4） …… 25
第19図　出土遺物実測図４（1：4） …… 26
第20図　出土遺物実測図５（1：4） …… 27
第21図　出土遺物実測図６（1：6） …… 29
第22図　出土遺物実測図７（1：4） …… 30
第23図　出土遺物実測図８（1：4） …… 32
第24図　出土遺物実測図９（1：4） …… 33
第25図　出土遺物実測図10（1：4） …… 34
第26図　出土遺物実測図11（1：1） …… 35

表　目　次

小野江甚目遺跡・古墳群出土遺物（土器類）観察表 …… 36

図　版　目　次

図版１　遺跡周辺航空写真（北東から），調査前風景（南から），ＳＤ１・ＳＥ１（東から），
１号墳南側周溝埋土（南東から），１号墳北側周溝（南西から）
図版２　１号墳全景（北から），１号墳全景（南から）
図版３　１号墳馬形埴輪出土状況（南から），１号墳墳丘肩部遺物出土状況（南から），
１号墳馬形埴輪出土状況（西から），１号墳周溝円筒埴輪出土状況（東から），
１号墳周溝円筒埴輪出土状況（西から）
図版４　２号墳全景（北から），２号墳全景（南東から）
図版５　２号墳周溝南半（北東から），２号墳周溝内遺物出土状況（北西から），
２号墳周溝内遺物出土状況（西から），ＳＫ３（北から），ＳＢ１（西から）
図版６　ＳＢ１（北から），Ｂ地区中世溝（北東から），Ｂ地区最下層確認トレンチ断面（西から
Ｂ地区噴砂検出状況（南東から），Ｂ地区噴砂断ち割り状況（南から）
図版７　出土遺物（Ａ地区１号墳・包含層出土埴輪類）
図版８　出土遺物（Ａ地区１号墳出土埴輪類）
図版９　出土遺物（Ａ地区１号墳・包含層出土埴輪類）
図版10　出土遺物（Ａ地区１号墳出土馬形埴輪）
図版11　出土遺物（Ｂ地区２号墳・包含層出土埴輪類）
図版12　出土遺物（Ａ地区１号墳出土土器・Ｂ地区包含層出土土器）
図版13　出土遺物（Ｂ地区２号墳・ＳＫ３・Ｂ地区包含層出土土器・石製品）
図版14　出土遺物（須恵器・弥生土器・古式土師器）

Ⅰ　前　　言

1　調査の契機と経過

現代の参宮街道ともいえる国道23号線は、車線の拡張後もモータリゼーションの発達によって慢性的な渋滞を惹起しており、特に一級河川雲出川付近はこの国道以外に高規格の橋梁が少ないため、本県の南北交通のネックのひとつとなっている。そのため現在軽自動車の通行が可能な程度の県道嬉野津線雲出橋を国庫補助事業として新規に架橋・整備し、交通環境の改善に資する事となった。

これを受けて、雲出橋以南の県道予定地内に所在する一志郡三雲町の「小野江南浦遺跡」の部分について、平成８年12月２日から12月３日にかけて試掘調査を実施し（調査担当は調査第１課木野本和之主事）、４ｍ×４ｍの試掘坑を計22箇所調査した。この結果、試掘坑№１～４，11～22にかけては遺構は無く、砂層が厚く堆積していたが、№５～10では円筒埴輪片や弥生土器片をはじめとする遺物が多量に出土し、埋蔵文化財が存在する事が判明したため、三重県埋蔵文化財センターは県土木部道路建設課、久居土木事務所と協議を行い、町立小野江小学校西側の1,800㎡について発掘調査を実施する事となった。調査は平成９年11月４日～平成10年２月６日にかけて行ない、調査終了間際の平成10年１月31日に三雲町中央公民館に於いて、同年度に県埋蔵文化財センターが三雲町内および周辺で調査した遺跡と合同で報告会を開催し、約150名の参加を得た。

2　遺跡の名称変更

本遺跡は、調査着手までの段階では、分布調査などにより、現在の小野江集落一帯の小字名で南浦を中心に範囲が考えられていたが、今回の調査区自体が大字小野江と甚目の境界に位置し、旧水田地下において古墳２基等の遺構が発見され、遺跡は現在の集落がある微高地を中心に広く展開し、集落跡などの存在も想定される事から、「小野江甚目遺跡」及びその古墳群の部分については「小野江甚目古墳群」と名称を変更し、現在三雲町教育委員会で行っている埋蔵文化財詳細分布調査でもこの名称を使い、統一する事とした。

3　調査の方法

今回の調査対象地は全長約170ｍ、幅約10ｍの細長い形状だが、南北のほぼ中程で東西に町道が横切っているため、ここを境に北をＡ地区、南をＢ地区と呼称した。

試掘調査では、Ａ地区の北端には現表土下に砂層が広がっており、この検出面までを第１遺構面、中世の遺構が検出できる面を第２遺構面、古墳時代遺構が検出される面を第３遺構面とし、その下部についてはＡ地区では重機掘削により、Ｂ地区については人力で下層確認トレンチを設定し、遺構・遺物の有無を確認した。それぞれの遺構検出面の間には各時期の遺物包含層があるが、状況に応じて機械掘削を行って調査の迅速化に努めた。

調査区全体の小地区割はＡ・Ｂ両地区にまたがって４ｍ×４ｍのグリッドを基準に、東西方向にアルファベットの小文字、南北に１～33の数字により小地区名を表示した。遺構図面は、遺構の性格や密度を考慮して平板による1:100測量と、手書きの1:20実測を併用した。

写真撮影は６×７版中型カメラによるモノクロネガとカラーポジを基本として、適宜35㎜小型カメラを併用した。

4　調査日誌抄

11/ 4　資材搬入・プレハブ事務所設置。

11/ 7　Ａ地区、第１遺構面まで重機掘削。

11/10　作業員による作業開始。Ａ地区試掘溝掘削。

11/11　Ａ地区北部の砂層から山茶椀が多量に出土し、砂堆ではなく、中世の堆積物と判明。

11/13　Ａ地区砂層上面の遺構を調査。試掘溝を延長して、砂層下の黄褐色土層の範囲を確認。馬形埴輪の脚部出土。

11/14　降雨により作業中止。調査区の排水不良。試掘溝の壁面の一部崩落。

11/18　Ａ地区第１遺構面の井戸の調査。Ｂ地区表土の重機掘削を開始。現地表面下2.6ｍで湧水。

11/19　Ａ地区北部の上層面上の遺構を平板測量。

11/20　Ｂ地区南端からの重機掘削継続。30列あたりから中世の遺構や遺物が散見される。
11/21　Ａ地区北部の砂層を調査。Ａ地区中央部で古墳周溝らしい粘質土部分を検出。
11/25　Ｂ地区にサブトレンチ掘削し、南端部で中世の溝検出。
11/27　Ａ地区の砂層下から自然流路ＳＲ１検出。
11/28　自然流路ＳＲ１撮影。
12/ 2　先週の降雨のため調査区水没。水抜きに苦慮。壁面の崩落も著しい。
12/ 4　自然流路の平板測量を行ない。１号墳周溝の埋土の掘削を開始。
12/ 8　降雨のため現場作業中止。
12/ 9　Ａ地区１号墳周溝掘削。北肩部と南周溝中央部で埴輪片の出土多い。
12/15　１号墳南周溝に試掘溝を設定。ほぼ完形の円筒埴輪出土。馬形埴輪の検出。
12/16　馬形埴輪出土状況撮影。１号墳北側精査。
12/17　馬形埴輪出土状況実測・取り上げ。
12/19　立命館大学青木哲哉先生来跡。
12/22　Ｂ地区、中世溝調査。
12/24　Ｂ地区試掘溝を再度掘削。
12/26　中世溝精査。緑泥片岩製有孔円盤出土。
1/ 6　Ａ地区古墳検出面遺構実測。
1/ 7　中世溝精査。
1/ 8　降雨のため調査区水没。
1/ 9　１号墳等高線図作製。
1/13　１号墳墳丘トレンチ。主体部確認できず。
1/16　降雨により調査区水没。
1/20　検出面が全面凍結。遺構検出困難。
1/21　Ｂ地区２号墳周溝の一部とＳＫ３検出。
1/23　２号墳周溝確認。また同一面で噴砂とみられる砂脈発見。
1/25　Ａ地区下層確認の試掘溝掘削。
1/26　２号墳周溝調査。南東部で須恵器広口壺等検出。
1/28　２号墳周溝内遺物出土状況撮影・実測。
1/29　Ｂ地区周溝掘削。掘立柱建物発見。
1/31　三雲町中央公民館で調査報告会。
2/ 2　２号墳周溝精査。遺構面出土土器の実測。
2/ 3　Ｂ地区古墳時代遺構面実測。２号墳等高線図作製。
2/ 4　Ｂ地区下層確認の試掘溝掘削。
2/ 5　Ｂ地区下層確認トレンチ、噴砂断面観察トレンチ掘削。
2/ 6　現場資材整理。作業員作業終了。
2/ 7　現場撤収。

5　文化財保護法等による諸通知

文化財保護法（以下、法）等にかかる諸通知は、以下により文化庁長官等に行なっている。

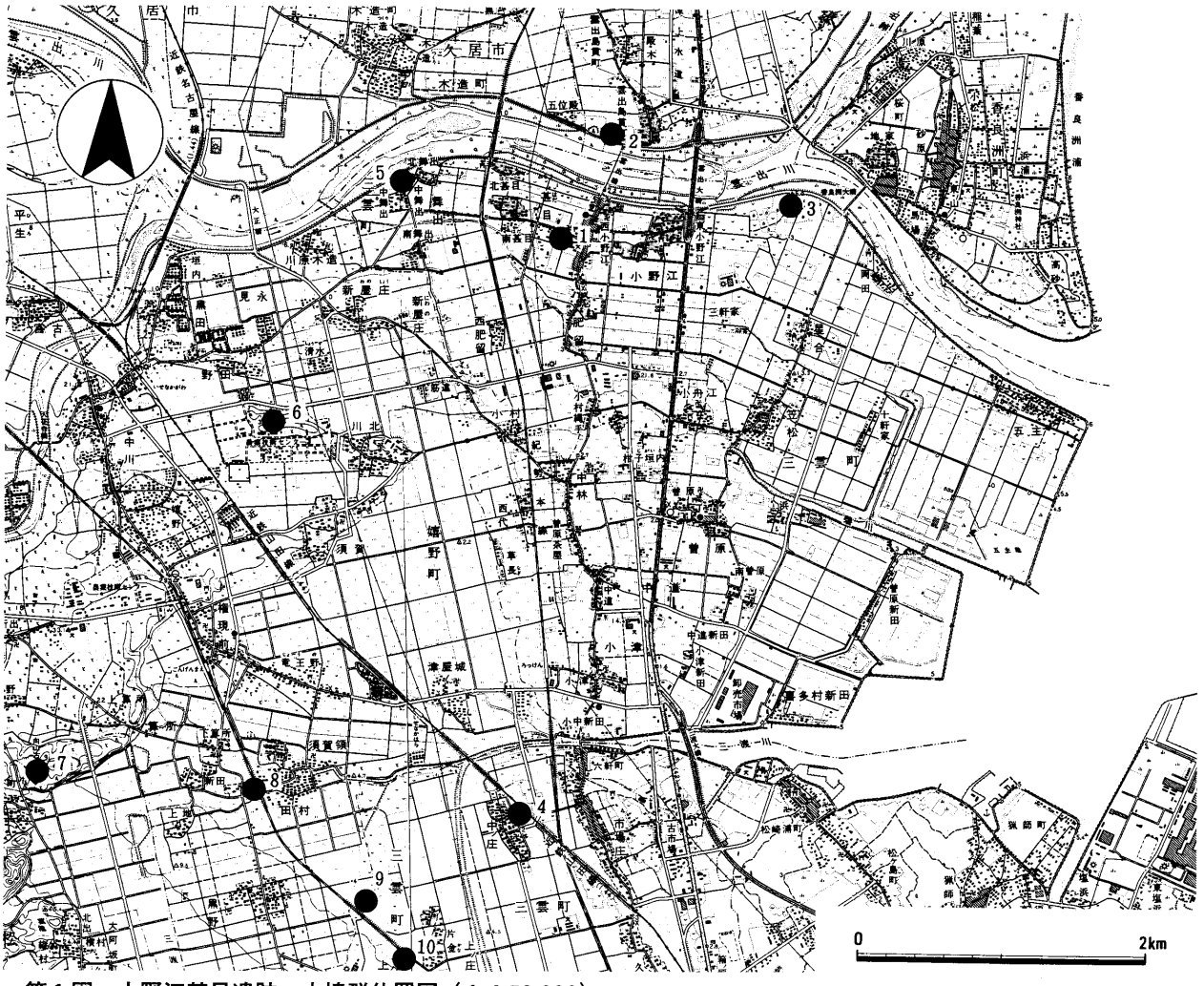
・法第57条の３第１項（文化庁長官あて）
　平成９年10月16日付教文第1636号（県教育長通知）
・法第98条の２第１項（文化庁長官あて）
　平成9年11月25日付教埋第1742号(県教育長通知)
・遺失物法による文化財発見・認定通知（久居警察署長あて）
　平成10年３月17日付教埋第11-54号（県教育長通知）

Ⅱ　位置と歴史的環境

小野江甚目遺跡は標高約３ｍ前後の沖積平野に立地し、調査地の北約500ｍには県下有数の大河、雲出川が東の伊勢湾へ向かって流れている。本遺跡の立地する沖積面もこの雲出川が運ぶ洪水堆積物によって形成されており、河道に沿って自然堤防や洪水時に形作られた旧河道が認められる。

また、現在の小野江集落から南に連続して肥留～中林～小津を経て三渡川を越える近世参宮街道が通る微高地が海岸線に平行して連続しており、旧浜堤であるとみられ、この東側、現在の国道23号線の以東にも自然堤防や三角州に起源をもつ微高地が点在しており、かつてはこれら浜堤や微高地の周辺にはバックマーシュが広がっていた。こうした湿地は現在水田となり、近世以降の新田開発による海岸部の陸化とともに開発されていった。

伊勢平野全体の中では、北からは平野の狭隘な津



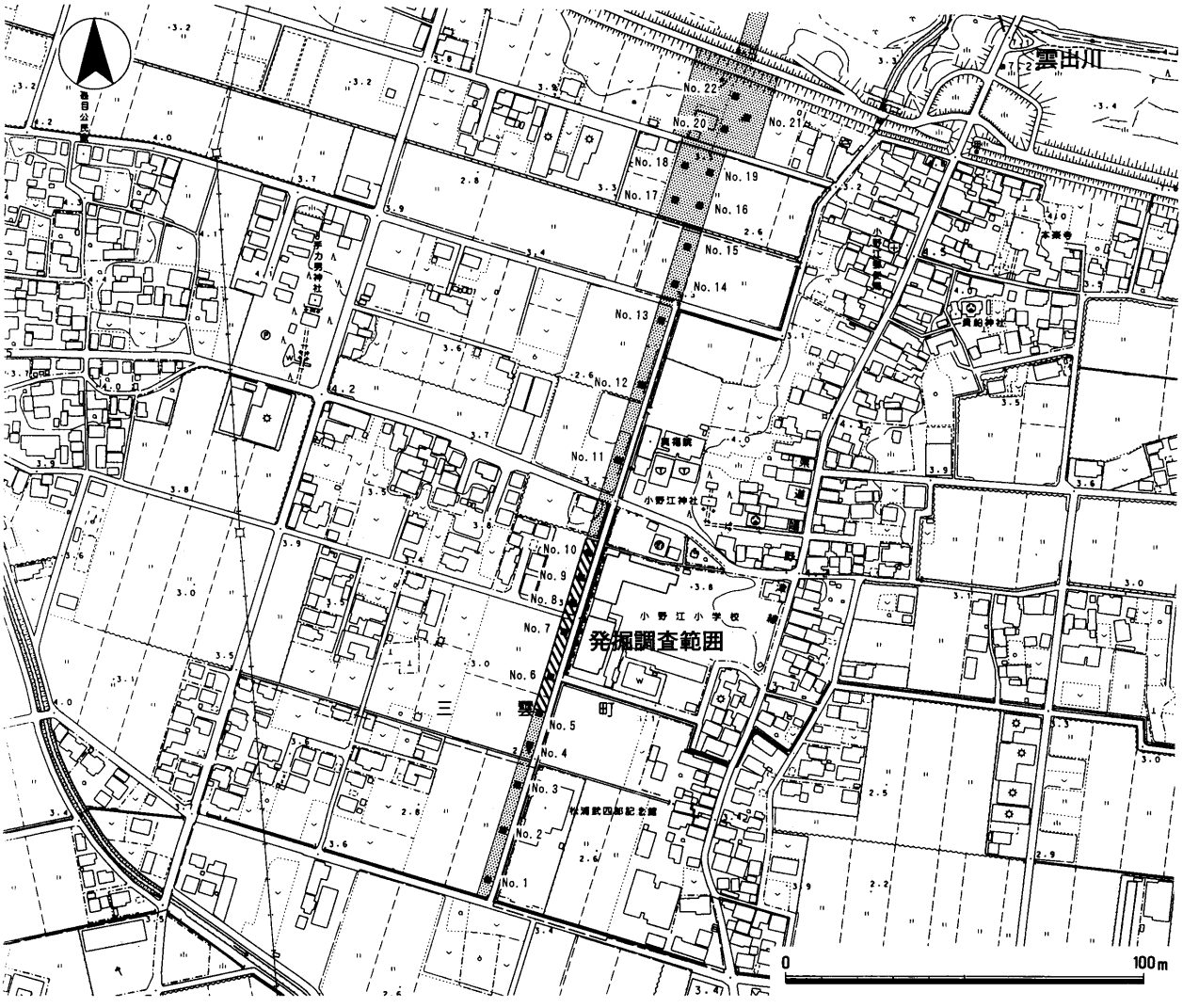
第１図　小野江甚目遺跡・古墳群位置図（１：50,000）

１：小野江甚目遺跡・古墳群　２：雲出島貫遺跡　３：前田町屋遺跡　４：中ノ庄遺跡　５：舞出北遺跡　６：西山古墳　７：向山古墳　８：田村西瀬古遺跡　９：上ノ庄北出遺跡　10：宮ノ腰遺跡

市・河芸郡から、西からは雲出川上流の丘陵・山岳地帯から開けた地形となっており、橋梁が整備されなかった雲出川の重要な渡河地点として、特に南北朝時代以降、坂士仏の『伊勢太神宮参詣記』に「雲出川のはやき波をしのぎ。小野のふるえわたりなど申す名所を過行にも。」とあるように[1]地名の由来となった小野古江渡として、舟による渡河のポイントであった。国道23号線やＪＲ紀勢線もここに集中し、近畿地方からの主要ルートである青山峠越えの国道165号線も雲出川に沿って通じている。当地は古来からの地域交通の要衝の地位を、現在まで失ってはいない。

小野江甚目遺跡は前言でもふれたとおり、かつては小野江南浦遺跡として小野江小学校周辺に範囲が限定されていたが、近年の三雲町教育委員会による詳細分布調査（担当は皇学館大學考古学研究会）の成果から、恐らく現在は埋没して隠れているとみられる小微高地の存在も含め、東は国道23号線近くの須賀神社、西は大字甚目の集落が乗る自然堤防と一部浜堤の微高地全体まで広がると考えられ、主に弥生時代の遺跡として周知されてきた高畑遺跡・観音寺遺跡・漁師田遺跡も含め東西約1.5km、南北約１km以上の範囲が想定されている。[2] 時期的には弥生時代から近世に至るまでの複合遺跡とみられている。

雲出川下流域を中心に、周辺の歴史的環境をみていくと、まず縄文時代では、平成９年度に実施した雲出川対岸、津市雲出島貫遺跡（２）の発掘調査で縄文時代晩期の馬見塚式の深鉢を使用した土器棺墓や、五貫森式の深鉢が、[3] さらに下流では右岸の自然堤防上で平成８・９年度に調査した前田町屋遺跡

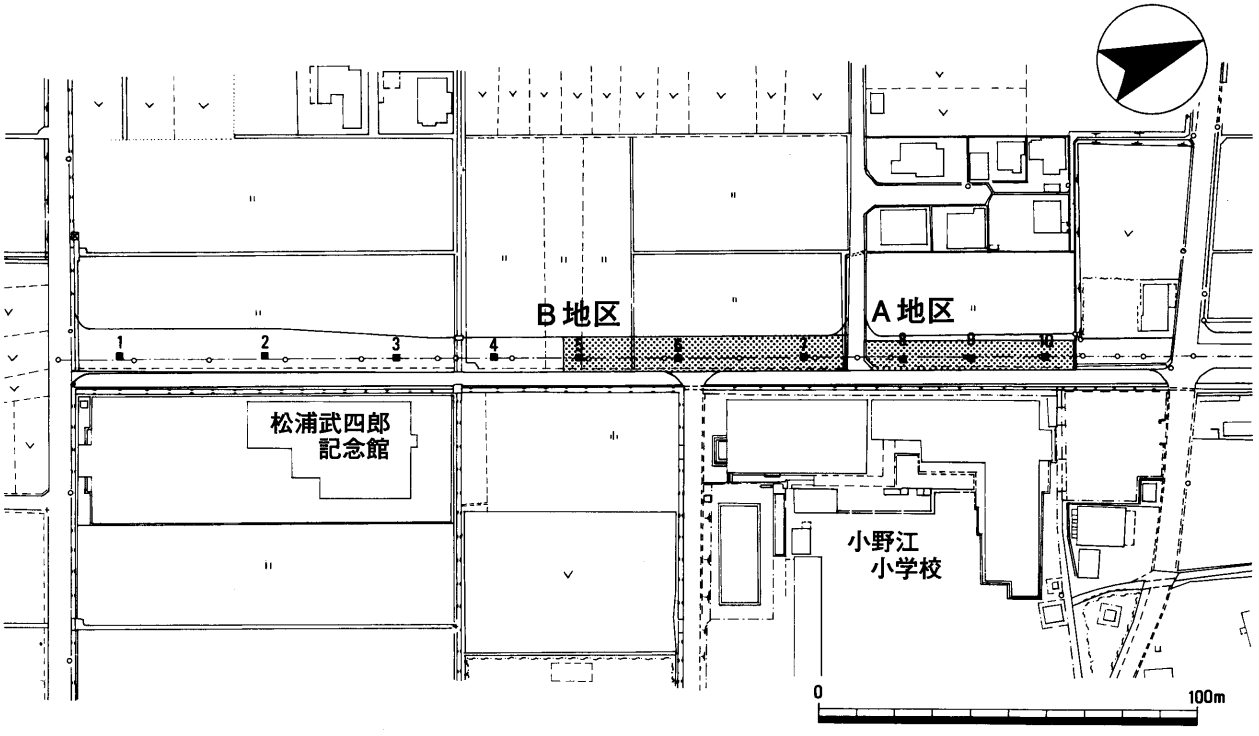


第２図　小野江甚目遺跡・古墳群周辺（No.は試掘坑を示す　１：2,000）

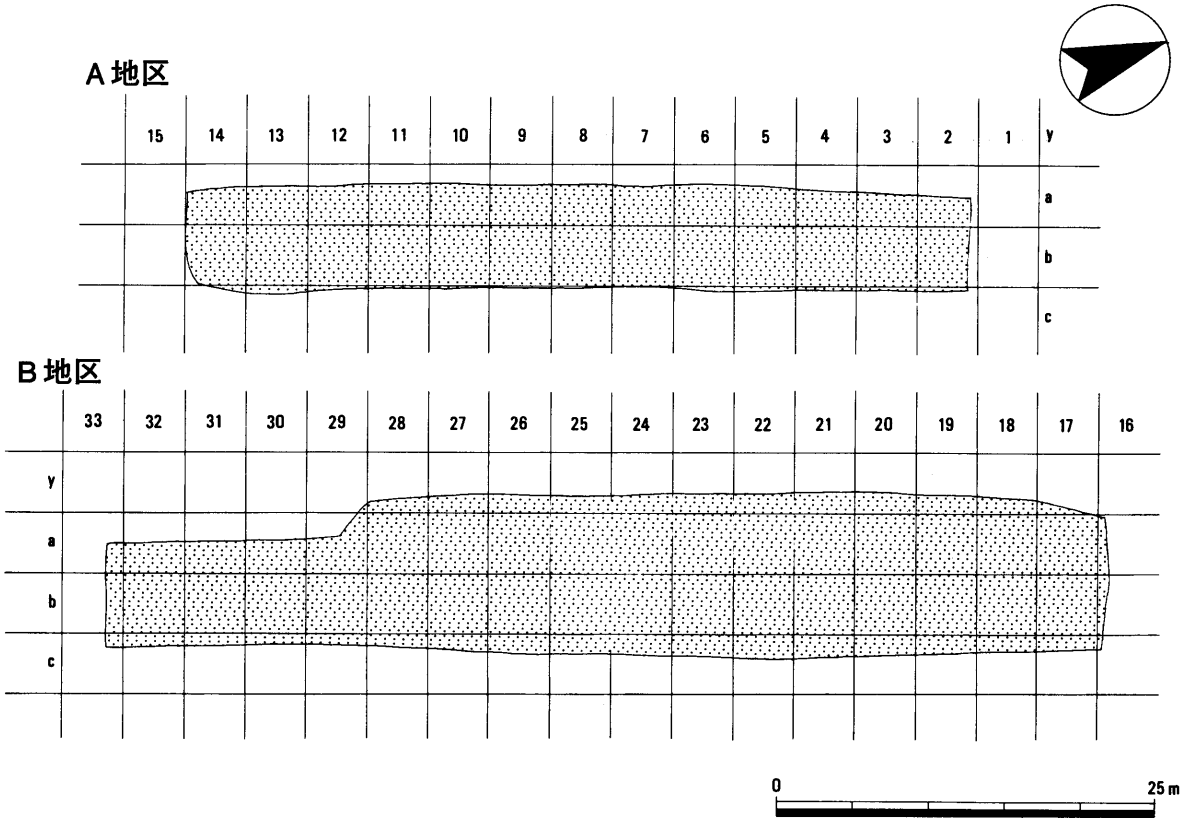
（３）で晩期の土器片が確認されている他は、[4] 周辺の低地部では確認例は現在のところない。

弥生時代では、三雲町内に県下でも最古式に属する弥生前期の土器群が出土した中ノ庄遺跡（４）が三渡川右岸にあり、雲出川をたどって東へ拡大して来た農耕文化の中心的な遺跡であったとされる。周辺一帯に多数形成されていた微高地とその後背地が農耕文化の定着に適したものであったとみられる。[5] これまでのところ、雲出川右岸下流域では弥生時代遺跡の良好な調査例はないが、今回小野江甚目遺跡に含めた旧高畑遺跡や旧漁師田遺跡では弥生土器が採取され、[6] また、町教育委員会の分布調査でも肥留地内で弥生土器が表面採取されている事から、[7] 付近で集落遺跡が存在する可能性は極めて高い。同様な立地条件である下流の星合地区でも弥生土器が採取されており、[8] 雲出川右岸や三渡川流域では、河川に沿った微高地上を中心に弥生時代遺跡が展開していた可能性がある。

弥生時代末～古墳時代にかけては、前田町屋遺跡において小規模ながら、古墳時代初頭に位置づけられる方墳４基が調査されている。[9] また、対岸の雲出島貫遺跡でも古墳の可能性もある弥生時代末～古墳時代初頭の方形（？）周溝が調査され、[10] こうした古墳・墳墓が沖積平野低地部でも確認されるようになった。中期以降の古墳や集落については、先述の中ノ庄遺跡で、５世紀後葉の円墳とみられる周溝から馬形・人物・家形・鶏形などの多彩な形象埴輪を伴って多量の円筒埴輪が出土している事はよく知られている。[11] これに対し、雲出川下流域での調査・資料は乏しいが、前田町屋遺跡で円筒埴輪片が出土し、[12]



第３図　調査位置図（数字は試掘坑No.　１：1,000）



第４図　小地区配置図（１：500）

周辺の星合地区で埴輪片が採取され、[13] 今回の小野江甚目古墳群の資料を得た。依然集落跡が未確認で実態は不明だが、こうした低地部での古墳の確認は、大きな意義を持つものと言えよう。

古代は、当地は一志郡に属する。この地域の問題としては、一志駅および斎王群行の際の一志頓宮の所在がある。一志駅は現在の三雲町曽原に比定する説の他、嬉野町内に比定する説もあるが明らかではない。近年の雲出島貫遺跡の調査では真北を主軸とする7世紀後半の大型掘立柱建物が検出され、調査者は交通上の要地として一志郡家との深い関わりを指摘しており、[14] また前田町屋遺跡でもほぼ同様な時期の掘立柱建物が調査されている。[15] また、町教育委員会の分布調査でも平野低地部の各地で緑釉陶器・灰釉陶器・暗文を施す土師器等を採取しており、[16] 平安時代以降平野部の各所に拓かれた荘園に関するものの他、一志郡に関連するものも含まれるであろう。

本地域では平安時代の立荘の記録は残されていないが、古代から中世にかけては、『神鳳抄』[17]・『神宮雑例集』[18] によると、大字甚目周辺推定される「甚目御園」があり、『神宮雑書』の瓜生御厨に比定される「小字瓜生」も甚目地内に所在するとおり、[19] 神領に属している。白鳳期の磚仏を出土したという観音寺跡も甚目地内に推定されているが、この本尊が雲出川の洪水で流出し、尾張国海東郡の甚目寺に漂着してかの地の本尊となったという伝承があり、[20] 事の真偽はともかく、伊勢湾の海上交通を媒介とした古代からの交流を窺わせるものである。

古代から中世にかけては、対岸の「嶋抜御厨」に自然入浜塩田と考えられる御塩田が開かれ、神宮に塩を貢納する御塩焼内人と呼ばれる専従集団がいたとされる。[21] 平成10年度の雲出島貫遺跡の第二次調査では、11～12世紀を中心とする、大規模な堀や運河状の水路を伴う館遺構が見つかっており、大量の京都系土師器や中国陶磁などの出土とあわせ、物流の拠点的な性格とともに当地の塩生産も含めた神領としての経済的基盤を窺わせている。[22]

条里制遺構は嬉野町域から痕跡が広がって来ており、甚目の西の舞出や南の肥留には小字名に「一ノ坪」がみられる。ただ今回の調査地付近では、現在も遺存する、以西のおよそN10°Wの向きに対してかなり南に振った地割りが残っており、航空写真では雲出川の氾濫により地割りが混乱しているとみられる箇所もあるため、条里制の施行については不分明な状況である。

中世には、先の坂士仏の紀行文のように南北朝時代、康永元（1342）年には小野古江渡として交通の拠点的な地位を得ており、同時に参宮路もここを通っていた事がわかる。小字名をみると、小野江には大垣内や荘場、甚目には北垣内・南垣内がみえ、中世における開発の一端が窺われる。

近世に入ると参宮街道が整備され、小野江にも寛政12（1800）年の紀年銘を持つ常夜灯がある。19世紀中頃には小野江出身の松浦武四郎が蝦夷地を始め全国で活躍するが、武四郎が産まれる素地として、参宮街道に象徴されるように、当地が原始古代より物流ばかりでなく、文化も伝える重要な幹線としての性格を持っていた事を忘れてはならない。

今回の発掘調査も、県土を貫ぬく新たなルートを拓くために実施されたが、従来考古学的な発掘調査が多くなかった三雲町周辺の文化の実像を探究する上でも期待が寄せられるものといえるだろう。

〔注〕

① 坂士仏「伊勢太神宮参詣記」『群書類従』神祇部二十七
② 皇學館大學考古学研究会『三雲町の遺跡』1998
③ 伊藤裕偉・川崎志乃『嶋抜第1次調査』1998
④ 新名　強『前田町屋遺跡第2次調査－前田地区・大明神地区』三重県埋蔵文化財センター』　1999
⑤ 谷本鋭次『中ノ庄遺跡』三重県教育委員会　1972
⑥ 前掲⑤
⑦ 前掲②
⑧ 前掲②
⑨ 前掲④
⑩ 前掲③
⑪ 前掲⑤
⑫ 前掲④
⑬ 前掲②
⑭ 前掲③
⑮ 前掲④
⑯ 前掲②
⑰ 「神鳳抄」『群書類従』神祇部九

⑱ 「神宮雑令集巻一」『群書類従』神祇部四
⑲ 「神宮雑書」『東京学芸大学付属高等学校研究紀要Ⅶ』 1969 他
⑳ 安岡親毅『勢陽五鈴遺響』三重県郷土資料刊行会 1975
㉑ 網野善彦「中世の製塩と塩の流通」『講座日本技術の社会史 塩業・漁業』日本評論社 1985
㉒ 三重県埋蔵文化財センター『雲出島貫遺跡 第２次調査現地説明会資料』 1998
㉓ 仲見秀雄「一志郡の条里制」『伊勢湾岸地域の古代条里制』東京堂出版 1979

Ⅲ 遺 構

1 調査区の基本層序

今回の調査地は、現在の小野江小学校の西側に位置し、現況面は北端で標高約3.0m、南端で約2.9mとなっており、ほぼ均平な状況である。また、東は砂堆の上に乗る小野江集落、西北に自然堤防上の甚目集落があり、調査地は間に挟まれたやや低地の部分になる。

今回の調査地は大きく分けて３つの遺構面が認められる。最上面は、中世に埋没したと考えられる自然流路埋積砂上の遺構面（第１遺構面）、次いで中世の溝等の遺構が検出される面（第２遺構面）、そして最下部が古墳周溝や土坑など古墳時代の遺構が検出される面（第３遺構面）である。第１面上には現代の耕作土や床土などが堆積し、第１面と第２面の間は、Ａ地区では明確に区別できなかったが、Ｂ地区では黄褐色の粘性のある細砂質壌土が第２面の上部包含層として認められ、埴輪片も含むものの、平安時代～鎌倉時代の遺物も含まれる。これをおおむね中世段階の包含層と認識した。第２面と第３面も基本的には黄褐色あるいは暗灰黄色の細砂質壌土層を挟むが、層位的に明確な分層は困難だった。しかしＡ地区での古墳検出面にあわせ、包含層部分に対してわずかに砂礫が多い部分まで掘り下げて、古墳周溝等を検出する事ができた。これを古墳時代以降の包含層として認識したが、第３面の検出の時点で本来の遺構面より下のレベルでしか遺構が検出できなかったのは残念である。なおＢ地区では、第１面上に近世・近代以降の遺構・遺物がわずかにみられるのみで、第２面まで掘り下げて検出している。

さらに第３面の下部には壌土分が少ない均質な中砂質～粗砂質の層があるが、Ａ地区では無遺物の粗砂層のみで、Ｂ地区でも標高１m前後まで掘り下げた段階で激しい湧水があった。サブトレンチの断面観察でも明確な遺構面は確認できず、Ｂ地区で弥生時代末～古墳時代初頭の遺物が散見されるのみだったため、より下層の調査は行なわなかった。

土層堆積上の特徴についてみると、Ｂ地区で顕著だが、これら遺構面を形成する各層は、多くが北から南に向かって傾斜しており、Ｂ地区の南端では分層が困難なほど各層を構成する基盤鉱物が細粒化している。これらの層の起源が北の雲出川の洪水堆積物にあり、河川から離れるにしたがって堆積物の粒子が細かくなるためとみられる。[①]

2 Ａ地区の遺構

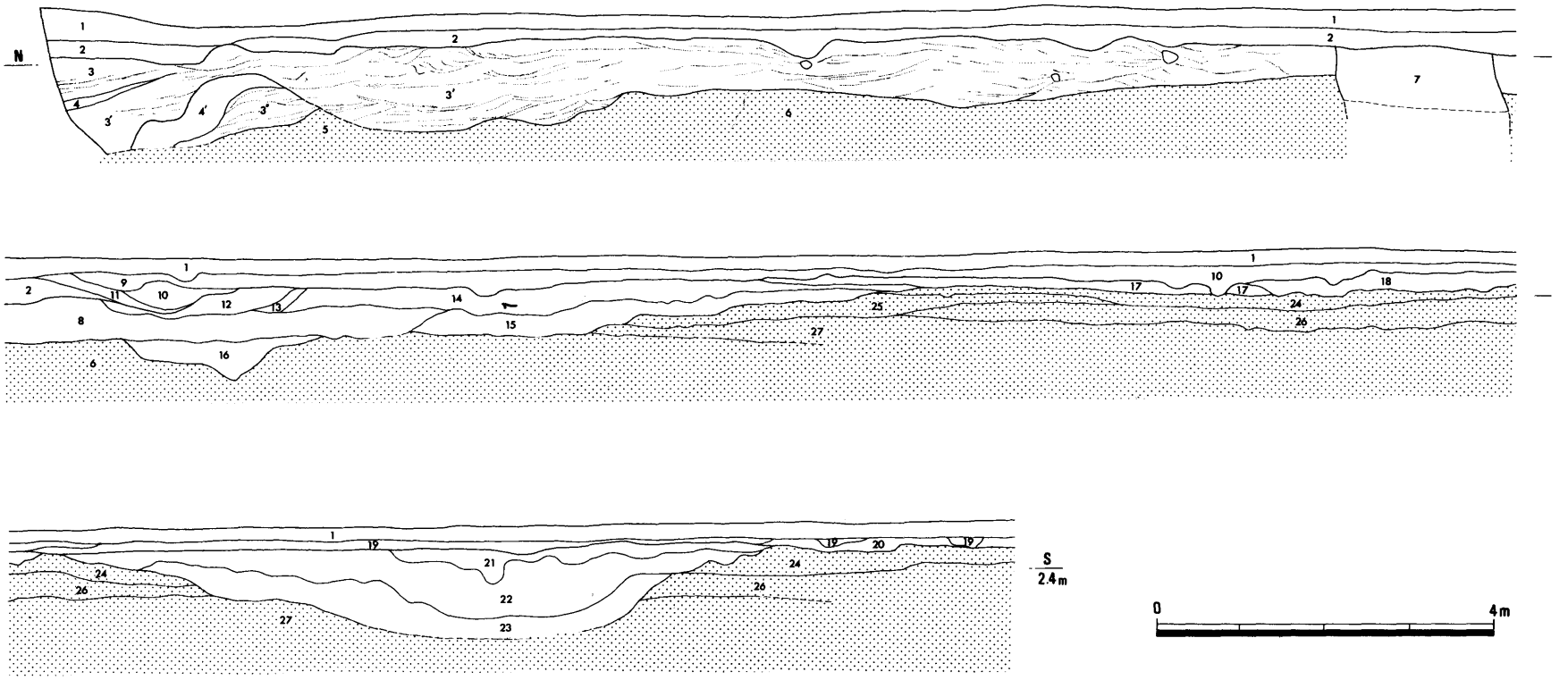
（１）第１遺構面の遺構

Ａ地区の北半でのみ明確にし得た。また、同時期のものとみられる小ピット群がＡ地区南端でも検出されている。

Ａ地区では、北端から約17m付近まで雲出川の洪水砂層とみられる灰白色粗砂の面が全面に広がっており、その上部から溝・井戸・ピットを検出した。

ＳＥ１ Ａ地区北の砂層面末端部付近で検出した、直径2.6mの円形の素掘りの井戸である。遺物はほとんどみられず、若干の近世土器片がみられたのみである。埋土は灰色の中～粗砂質壌土で、全体の約３分の１が調査区外へ伸びているため、壁面の崩落の危険があり、完掘せず、第１面から約１mまでで調査を中断した。

ＳＤ１ ＳＥ１に向かい北西方向から延びる溝で、幅1.2m、深さ0.9mの断面Ｖ字形を呈する。溝底の高低差は明瞭でないが、西に向かってわずかに下がっている様である。溝底部付近から包含層からの混入とみられる円筒埴輪片が出土した他は遺物は少ないが、ＳＥ１と同様、Ａ区北半の粗砂面上から掘削されており、ＳＥ１の手前で止まっているためほぼ同時期のものとみられる。ＳＤ３・４・５とほぼ平



1　やや粘性のある粗鬆な灰色中砂質壌土（表土）

2　黒褐色粗砂質壌土（水田床土）

3　わずかにラミナが形成される灰白色粗砂

3'　ラミナの発達する黄褐色粗砂

3''　鉄分を一部互層状に含む3'

4　粘性のある黄灰色細砂～シルト質壌土

4'　砂質分をラミナ状の間層に含む灰色シルト質壌土

5　鉄分が斑状に沈着する暗灰色シルト質壌土（最下層）

6　鉄分が斑状に沈着するシルト分の強い灰色壌土（最下層）

7　茶褐色壌土粒を含む灰色中～粗砂質壌土

8　わずかに粘性をもつ黄灰色中砂質壌土

9　わずかに黒褐色壌土ブロックを含む灰色中砂質壌土

10　粘性があり固結度の高い黒褐色細砂質壌土

11　わずかに粘性を含む灰色粗砂

12　φ3mm前後の小礫を含むやや粘性を帯びた黒褐色壌土

13　やや粘性を帯びた黒褐色細砂質壌土

14　固結度の高いにぶい黄褐色中砂質壌土

15　わずかに粘性をもつ固結度の低い灰黄褐色細砂質壌土

16　粘性があり固結度の高いオリーブ灰色シルト質壌土

17　均質でわずかに壌土分を含む暗褐色中～細砂

18　わずかに黒褐色壌土分を含むオリーブ黒色極細砂～シルト質壌土

19　鉄分が微細な斑状に沈着する灰色中砂質壌土

20　鉄分・マンガンが沈着するにぶい黄色中砂質壌土

21　わずかに黒褐色壌土ブロックを含む灰色中砂質壌土

22　やや粘性をもつ暗灰色中～細砂質壌土

23　わずかに粘性をもつオリーブ黒色中～細砂質壌土

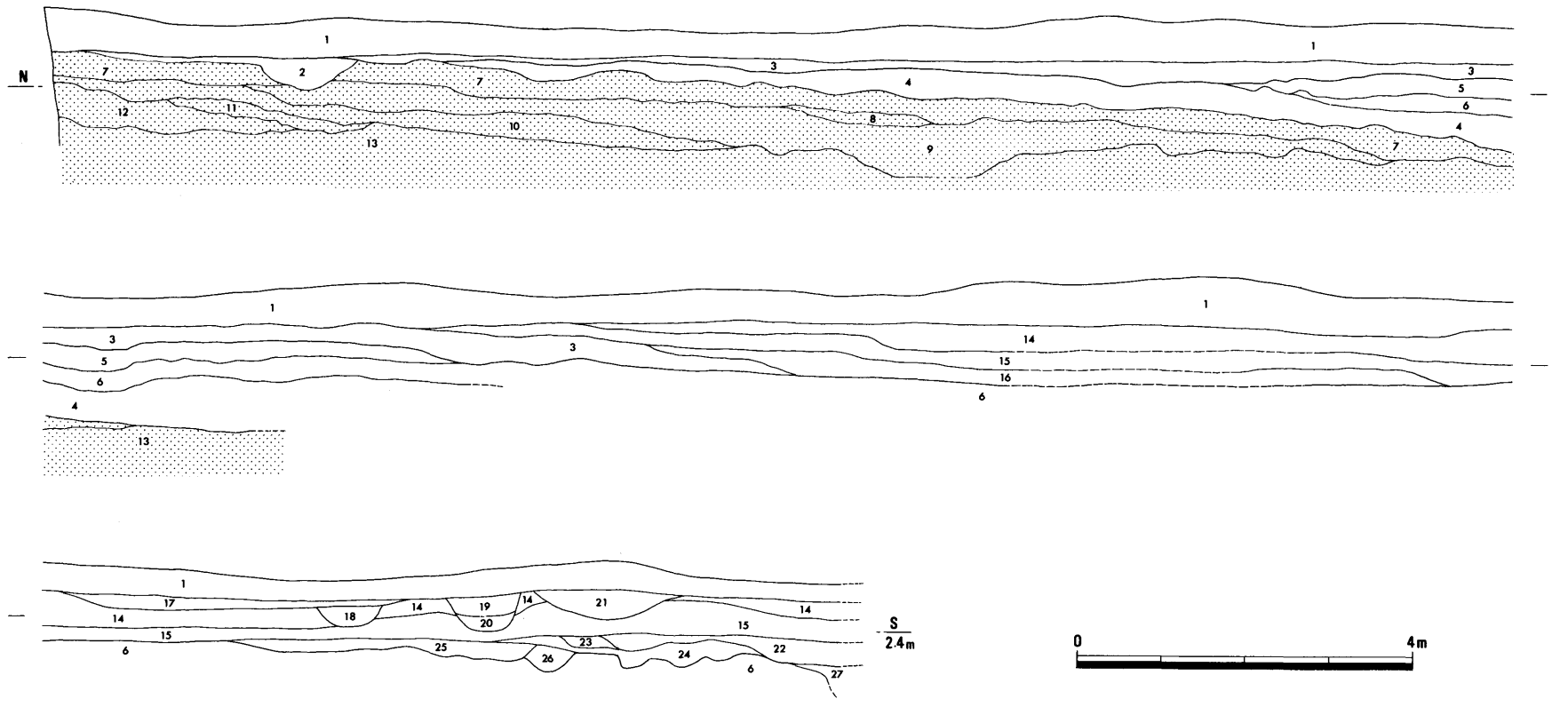
24　粘性をもつ暗灰黄色細～極細砂質壌土

25　やや粗鬆なにぶい黄褐色中砂質壌土

26　均質で粗鬆な灰黄褐色細砂

27　均質でわずかに暗色を帯びた灰黄褐色細砂

第5図　A地区東壁実測図（1：80）



1　やや粘性のある粗しょうな灰色中砂質壌土（表土）

2　砂質を多量に含んだ灰色中砂質壌土（水田床土）

3　マンガン粒を含み鉄分が沈着する黒褐色壌土（水田床土）

4　粘性があり、わずかにマンガン粒を含むにぶい黄褐色細砂質壌土

5　やや粘性があるにぶい黄褐色細砂質壌土

6　やや粘性がある褐色細砂質壌土

7　やや固結度の高い、にぶい黄褐色細砂質壌土

8　やや締まった灰黄褐色細砂質壌土

9　7よりわずかに粗鬆な灰黄褐色細砂質～極細砂質壌土

10　わずかに灰色粘土粒を含み、やや固結のすすんだにぶい黄褐色細砂質～極細砂質壌土

11　均質だがやや粗鬆な灰黄褐色極細砂質壌土

12　灰色粘土分を含み、均質で粗鬆な暗灰黄色極細砂質壌土

13　わずかに壌土分を含んだ黄灰色粗砂（最下層）

14　粘性強く鉄分が斑状に沈着したにぶい黄色細砂質壌土

15　やや粘性がよわく細砂質分の多い14

16　粘性つよく、固結度の高い褐色極細砂質～細砂質壌土

17　中砂質分多く、粗鬆な灰色壌土

18　下半部に灰白色砂がラミナ状に堆積する灰褐色細砂質壌土

24　粘性があり鉄分が斑状に沈着する灰オリーブ色中～細砂質壌土

25　鉄分・マンガンが細かい斑状に沈着するやや粗鬆な褐灰色中砂質壌土

26　最下部に鉄分が固結して沈着する灰色細砂質壌土

27　固結度がやや高い黄褐色極細砂質壌土

19　やや粘性もつが極めて粗鬆な灰オリーブ色粗～中砂

20　わずかに粘性をもつ灰色細砂質壌土

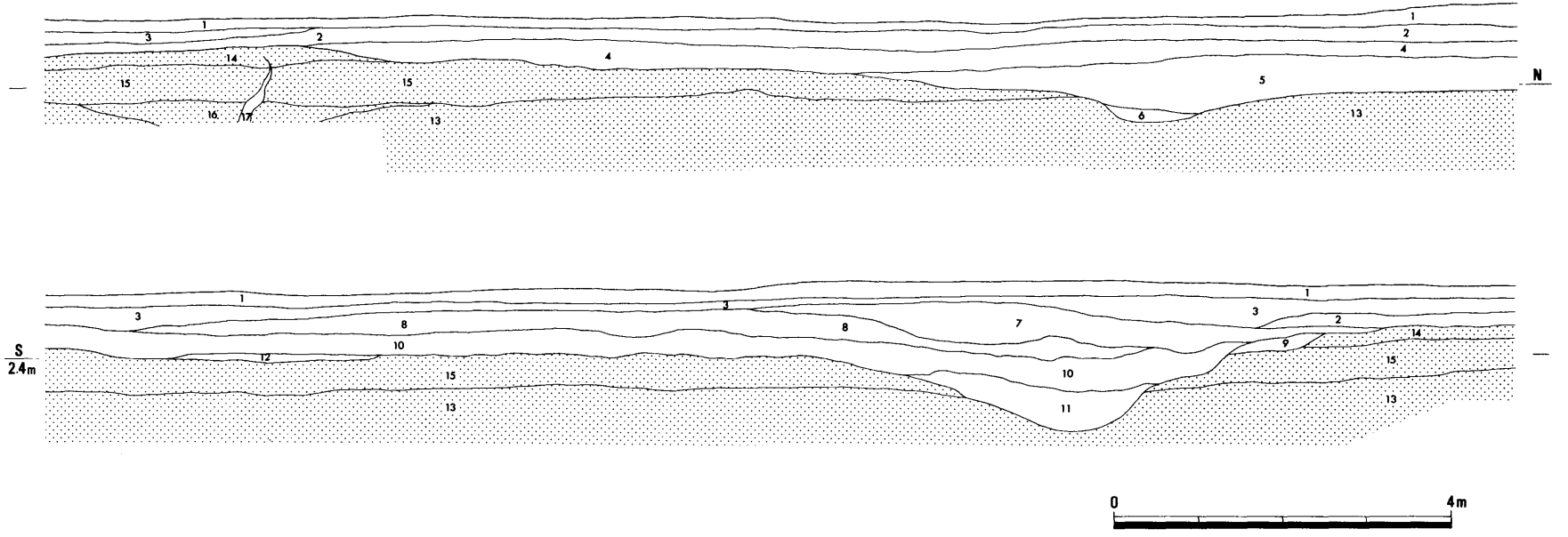
21　やや粘性もつが極めて粗鬆な灰オリーブ色粗～中砂

22　粘性があり鉄分がわずかに沈着する灰色中砂質壌土

23　鉄分が層理状に沈着する灰色中砂

第6図　B地区東壁実測図（1：80）

第7図　B地区西壁実測図（1：80）



1　やや粘性のある粗しょうな灰色中砂質壌土（表土）

2　マンガン粒を含み鉄分が沈着する黒褐色埴壌土（水田床土）

3　マンガン粒を含み粘性がつよく固結度の高い灰白色埴壌土（水田床土）

4　やや固結のすすんだ均質な黄褐色細砂質壌土

5　やや粘性のある固結のややすすんだにぶい黄褐色細砂質壌土

6　粘性つよくわずかに細砂質を含む灰黄褐色埴壌土

7　よわい粘性もつが、やや粗鬆な灰黄褐色細砂質壌土

8　やや暗色を帯び、固結度の高いにぶい黄褐色粘質壌土

9　わずかに粘性をもつ灰黄褐色細砂質壌土

10　やや粘性をもち、固結のすすんだ暗灰黄色細砂質壌土

11　粘性つよく、わずかに極細砂質を含む灰黄褐色埴壌土

12　やや粘性をもつ黒褐色細砂質壌土

13　わずかに粘性をもつ極細～細砂質壌土（最下層）

14　わずかに粘性を帯びる暗灰黄色細砂質壌土

15　やや粘性をもち、極微細な灰色粘土粒を含むにぶい黄褐色壌土

16　にぶい黄褐色砂をわずかに含むやや固結度の高い暗褐色細砂質壌土

17　16のブロックを含むにぶい黄褐色中～細砂（噴砂）

行しており、おおむねＥ40°Ｓの方向を向く。

ＳＤ２　Ａ地区北の砂層面上で検出された、幅0.4ｍ、深さ0.25ｍの細長い溝で、埋土は黒褐色の砂質壌土で、水田床土との区別はつかない。遺物は出土しなかった。

ＳＤ３　ＳＤ２と同様の埋土で幅0.8～1.4ｍ、深さ0.2ｍの浅い溝である。出土遺物は無い。

ＳＤ４　調査区北東隅にかかる溝で深さ0.3ｍを測る以外は規模は不明である。

以上の遺構の他に調査区北半部と南端部にピットが散在するが性格は不明である。

（２）第２遺構面の遺構

Ａ地区では第１遺構面との境界は明らかにできなかった。しかし、調査区北半の大量の粗砂層を除去した時点で現れた自然流路跡ＳＲ１を第２遺構面に該当するものとして報告する。

ＳＲ１　人工的な遺構ではないが、Ａ地区の北４分の１を占める自然流路の跡を検出した。調査区北端から17ｍの、南肩部にあたる地点で標高約2.4ｍ・調査区内で最下部のＡ地区北端で標高約1.4ｍ前後となり、北へ向かって落ち込んでいく。埋土である灰白色粗砂層は均質で、ほとんど夾雑物を含まないが、調査区の壁面を観察すると、よわい水平方向のラミナが多数見られる。北から３ｍのところで埋積物にも重複関係がみられ、堆積が単次のものではない事が窺われる。

遺物は、完形品も含めて山茶椀をはじめ土師器や陶器など多量の中世遺物が出土しているが、破断面はやや磨滅しているものが多い。

粗砂層の下には暗青灰色のシルト層があるが、標高約1.2ｍから下で激しい湧水をみたため、それ以下の掘削は止めた。

調査区内では、概算で45㎥ほどの砂があったことになるが、これと関連するとみられる砂層は平成８年度の試掘調査でも、Ａ地区の北から全ての試掘坑で地表面下40㎝～１ｍで同様のものが検出されており、トップレベルに波はあるものの、雲出川の洪水砂層が広範囲に広がっているものとみられる。

（３）第３遺構面の遺構

古墳時代の遺構面である。古墳１基を検出した。

小野江甚目１号墳　Ａ地区の中央付近の古墳で、周溝の北西部分と南西部分を検出した。墳丘の封土は洪水等のためほとんど流失したものとみられ、調査区壁面の観察や、周溝内側の断ち割り調査でも盛土は厚さ約40㎝しか確認できず、主体部は確認できなかった。

墳丘の基盤層は黄褐色～灰黄褐色の中細砂質壌土であり、周溝埋土はわずかに粘性をもった灰黄褐色～オリーブ黒色壌土で、主に粘性の違いにより埋土を判別した。

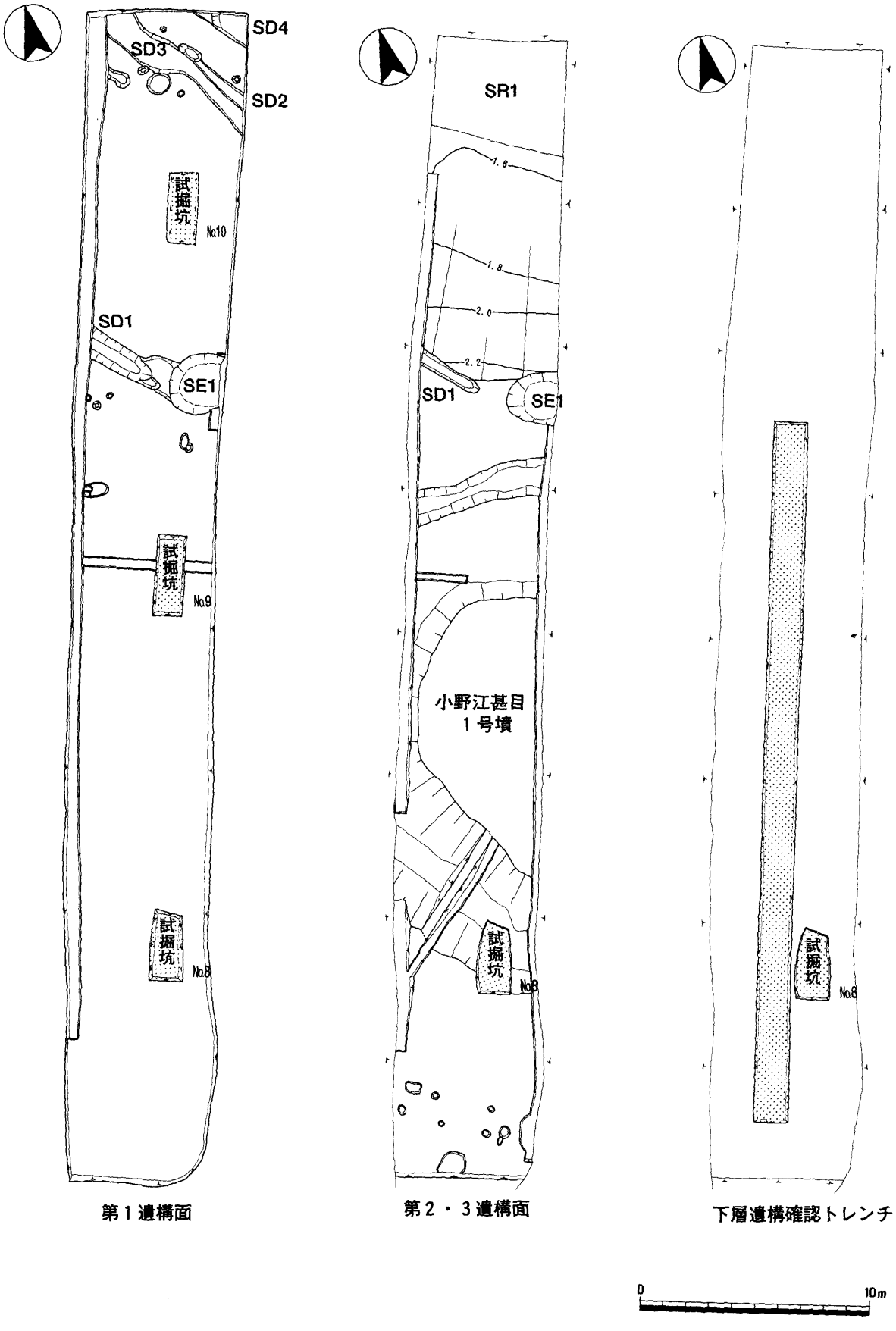
周溝の残存状況は墳丘の南側の方が良好で、幅約5.3ｍ、検出面からの最大深約0.7ｍを測る。断面も緩やかなＵ字形を呈する。それに対して墳丘北側は幅約４ｍに渡って墳丘肩部が流れており、この部分に、埴輪片を多量に含んだ灰黄褐色細砂質壌土が被っていた。この埋土下から幅約1.2ｍ、最大深約0.5ｍの残存する北側周溝の底部を確認する事ができた。底部の標高は北側周溝で約1.7ｍ、南側では約1.4ｍで、南側がやや深くなっている。

この周溝から復元できる墳丘の規模・形状は、周溝底部から測って直径約19ｍの円形と推定され、作り出し等の施設が想定できなくはないが、現状では規模を勘案して円墳として認識しておきたい。

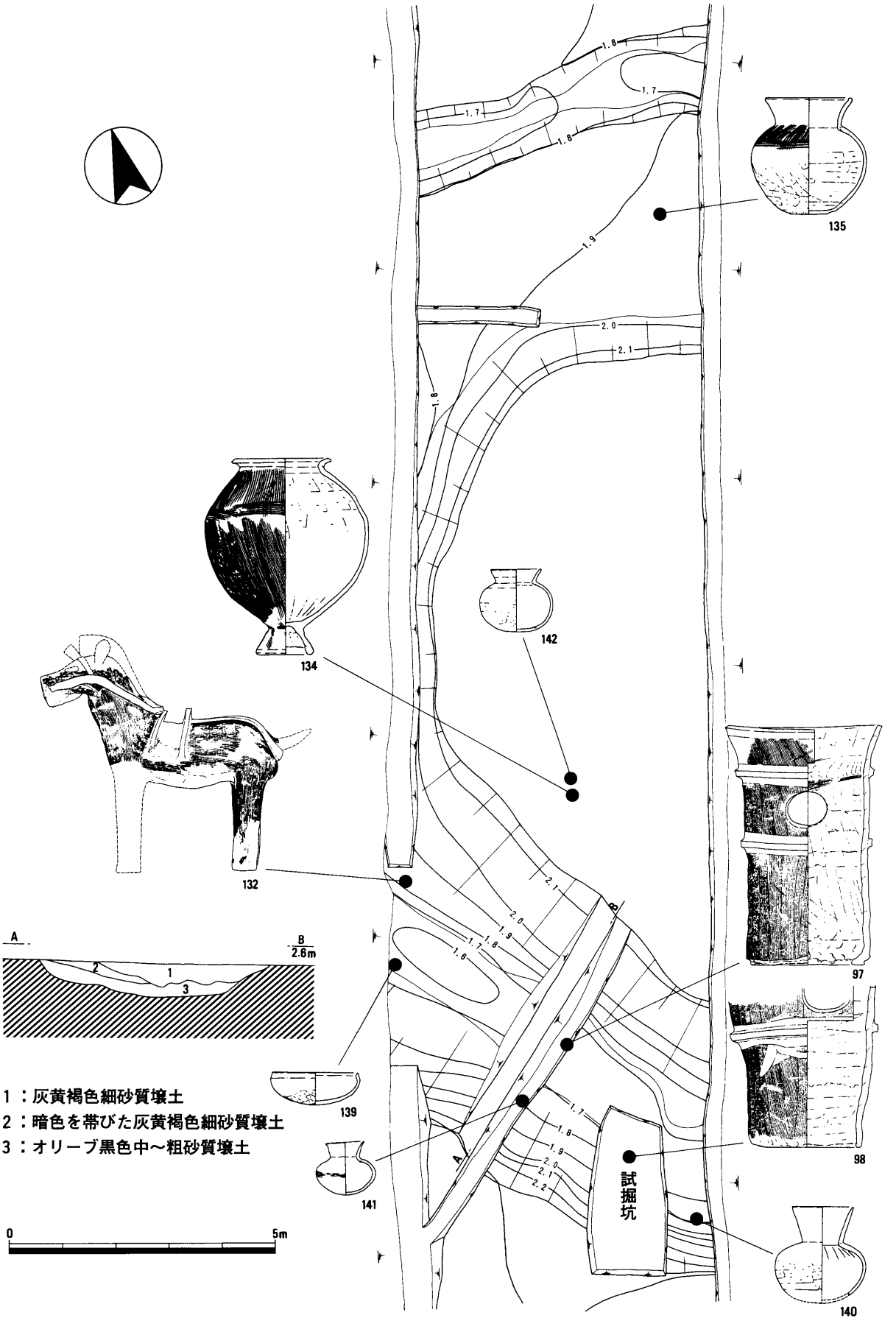
遺物は、墳丘中央部では確認の断ち割りを入れたにも関わらず出土しなかったが、検出面北西肩部で土師器広口壺（133）の破片が、南西肩部で土師器台付甕（134）・短頸壺（142）の破片がかたまって出土している。これらは原位置に近い状態を保っているものとみられる。

周溝内遺物では、周溝南肩から３ｍほどのところで土師器広口壺（135）がほぼ完形で土圧で潰れた状態で出土している。これを墳丘からの転落物とすると、１号墳の墳丘北側は古墳造営後あまり時を隔てず流出した可能性がある。

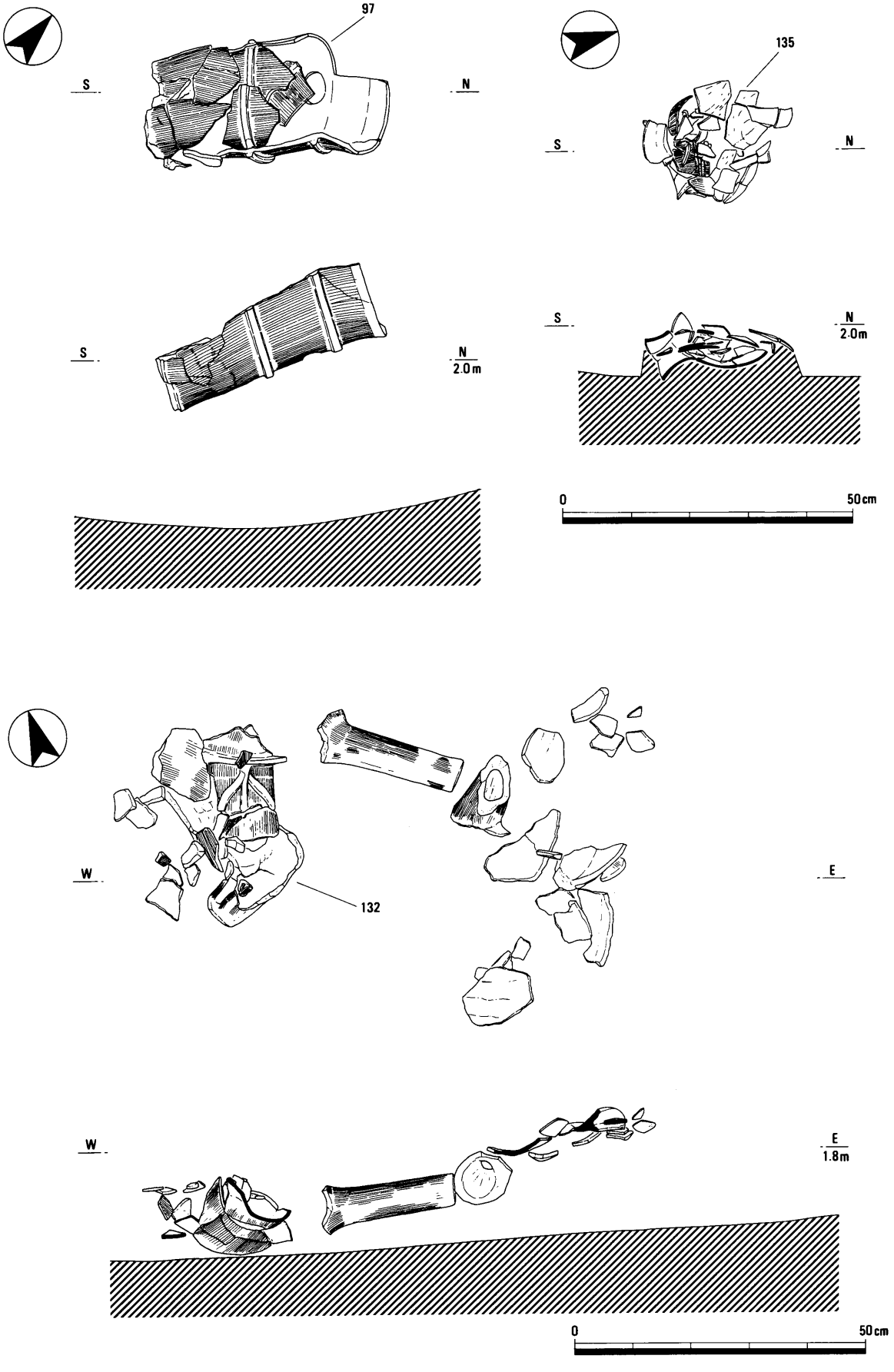
周溝南側では、セクションベルト東側で、ほぼ完形の円筒埴輪（97）が出土している。これは周溝底から約20㎝浮いた状態で、口縁部を墳丘側に向けているが、ほぼ完形の個体が土圧で潰れた状態で出土している事や、周辺で類似の埴輪片が多量に出土している事から、１号墳に樹立されていたものであろう。円筒埴輪では、（97）と試掘坑№７から出土し、１号墳のものとみられる（98）の他は小片が



第8図　A地区遺構平面図（1：250）



第９図　小野江甚目１号墳実測図（１：100）



第10図　1号墳周溝内遺物出土状況図（1：10）

多く、周溝埋土でも上半の灰黄褐色土層で出土したものが多いが、底部付近から出土する資料とは積極的に差異は見出し難い。

また、調査区西壁と接する付近では馬形埴輪片がかたまって発見し、調査区の法面を一部広げ、前足と頭部上半を欠損しているものの、ほぼ全体を検出した。鞍部片が脚部や尾部よりも墳丘上手にあり、その他の頭部・胴部などは現位置で潰れた様子が窺える。破片の分布状況に規則性が乏しい事から崩壊しながら転落し、周溝最下部に埋没したものとみられる。脚部のひとつは調査当初のサブトレンチの掘削時に出土している。

（4）第3遺構面下確認トレンチ

1号墳の調査が終了した段階で、この下層遺構の有無を確認するために幅1mほどのトレンチを南北約15mにわたって調査したが、およそ1m下部までほぼ均質な黄灰色細砂がみられるのみで、遺物は全く出土せず、標高約1.2mのレベルで激しい湧水をみたため、ここでA地区の調査を終えた。

3　B地区の調査

（1）第2遺構面の遺構

先述のとおり、第1面遺構は、出土遺物から近現代以降のものとみられ、密度も希薄であったため、第2遺構面から調査を開始している。

この遺構面でも、調査区北半では遺構はほとんど見られず、中央部の24・25列付近で小ピットが散在し、27列以南で北東方向に向かう溝が最終的に5条確認されたのみである。溝は基本的にはいずれも、南西から北東へ向かって流下するものである。

SD6　調査区南部の溝では最も新しい。幅約2.2m深さ0.2mの浅い溝で、磨滅の著しい山茶椀など中世土器の小片が多量に出土している。なお、この溝の上面には近世以降の溝SD5が重複しており、護岸用の杭列が打設されていた。なお、B地区南端では、第1遺構面までの機械掘削の際に、SD5にほぼ直交する方向の近現代の溝があった。

SD7　SD6に先行する溝で幅約1.5m、深さ約0.2mを測る。山茶椀など中世土器や円形土錘が出土している。

SD8　SD7の下部から検出された。幅約1.0m、深さ約0.2mの細長い溝である。灰釉陶器・山茶椀などが出土している。

SD9　SD6に重複される溝で、幅約1.2m、深さ約0.4mで断面U字形を呈する。土師器片・ロクロ土師器や山茶椀などの陶器類が出土する。

SD10　重複関係上、最も古い溝である。幅約1.2m、深さ約0.2mの断面略U字形の溝である。調査区の東壁に接して樹木の痕跡と見られる攪乱土坑がある。出土遺物は少なく、若干の山茶椀片等が出土したのみである。

SK3　23-c区の遺構検出中に見つかった、須恵器類の集中する、残長で約0.9mの不整形の土坑である。土器が大部分現れてからようやくサブトレンチ断面等により確認されたため、遺構の深さはおよそ10cm程度残るのみである。須恵器短頸壺（185）、杯蓋（186・187）、杯身（188）が出土した。本来古墳時代の遺構もこの面で検出されるべきで、調査方法の上で大きな課題となった部分である。

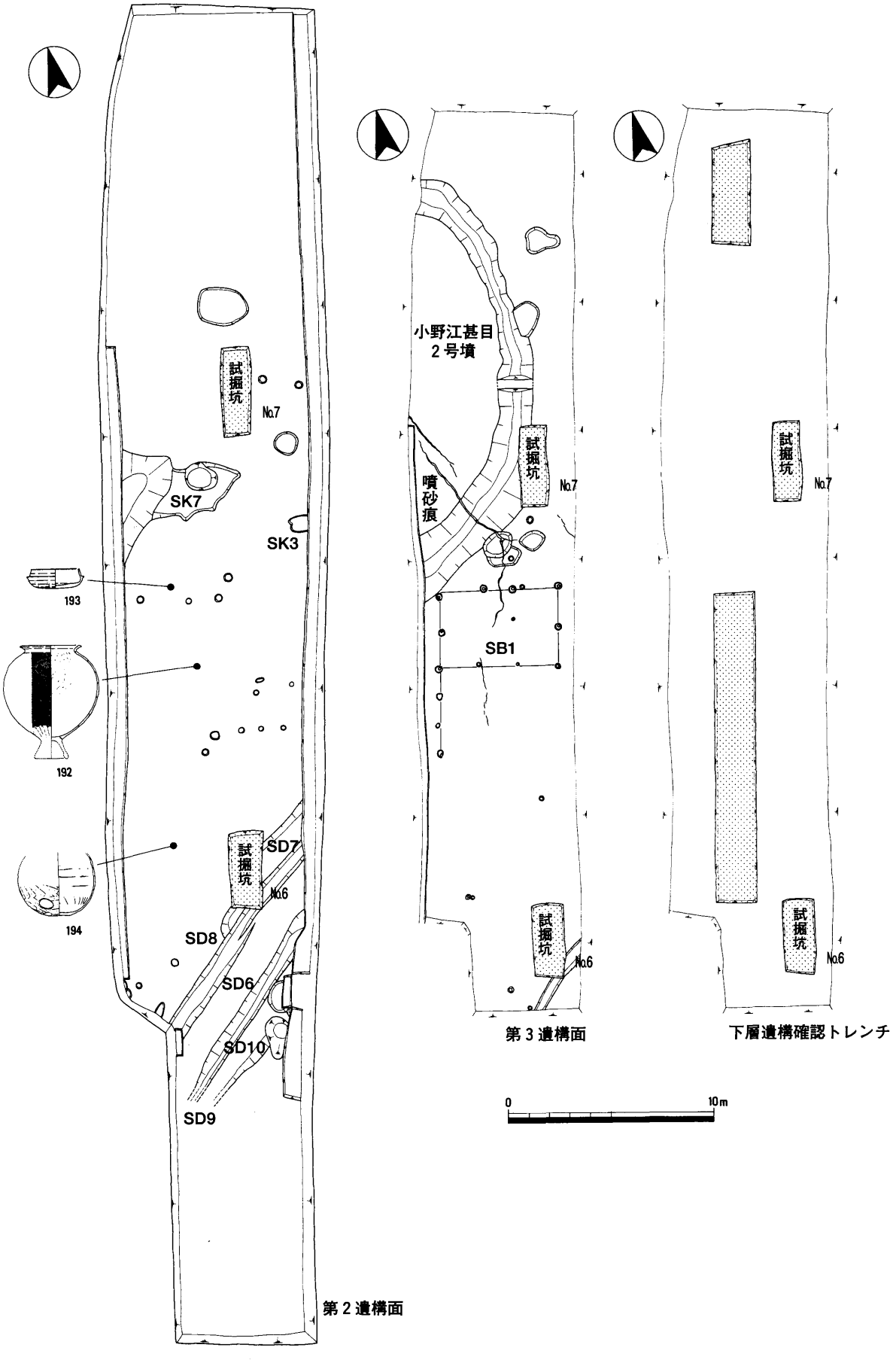
（2）第3遺構面の遺構

古墳1基、土坑1基の他、遺構面上で確認された土器集中部がある。

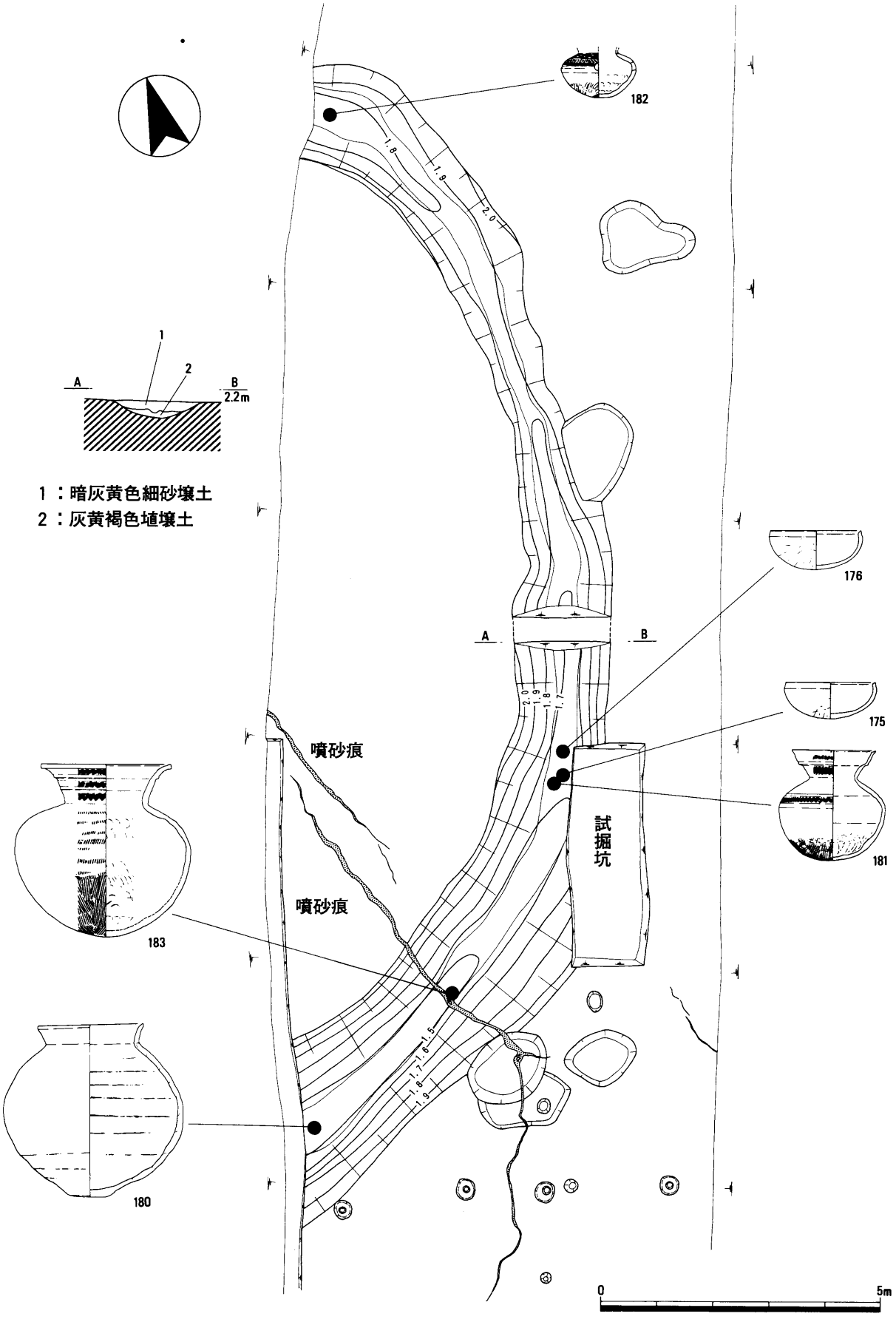
小野江甚目2号墳　調査区の北半で周溝のみを検出した。全体のおよそ3分の2は調査区外に広がっているが、検出部分だけみると、直径約16～17mの円形で、やはり円墳とみられる。主体部は確認できなかった。周溝埋土は灰黄褐色系の粘性のやや強い壌土である。

検出した周溝は、南へ行くほど幅・深さともに増し、最大値で幅約2.8m、深さ約0.5mを測る。小地区の19-b区でややくびれたようになり、遺構面から約0.3mと最も浅くなる。

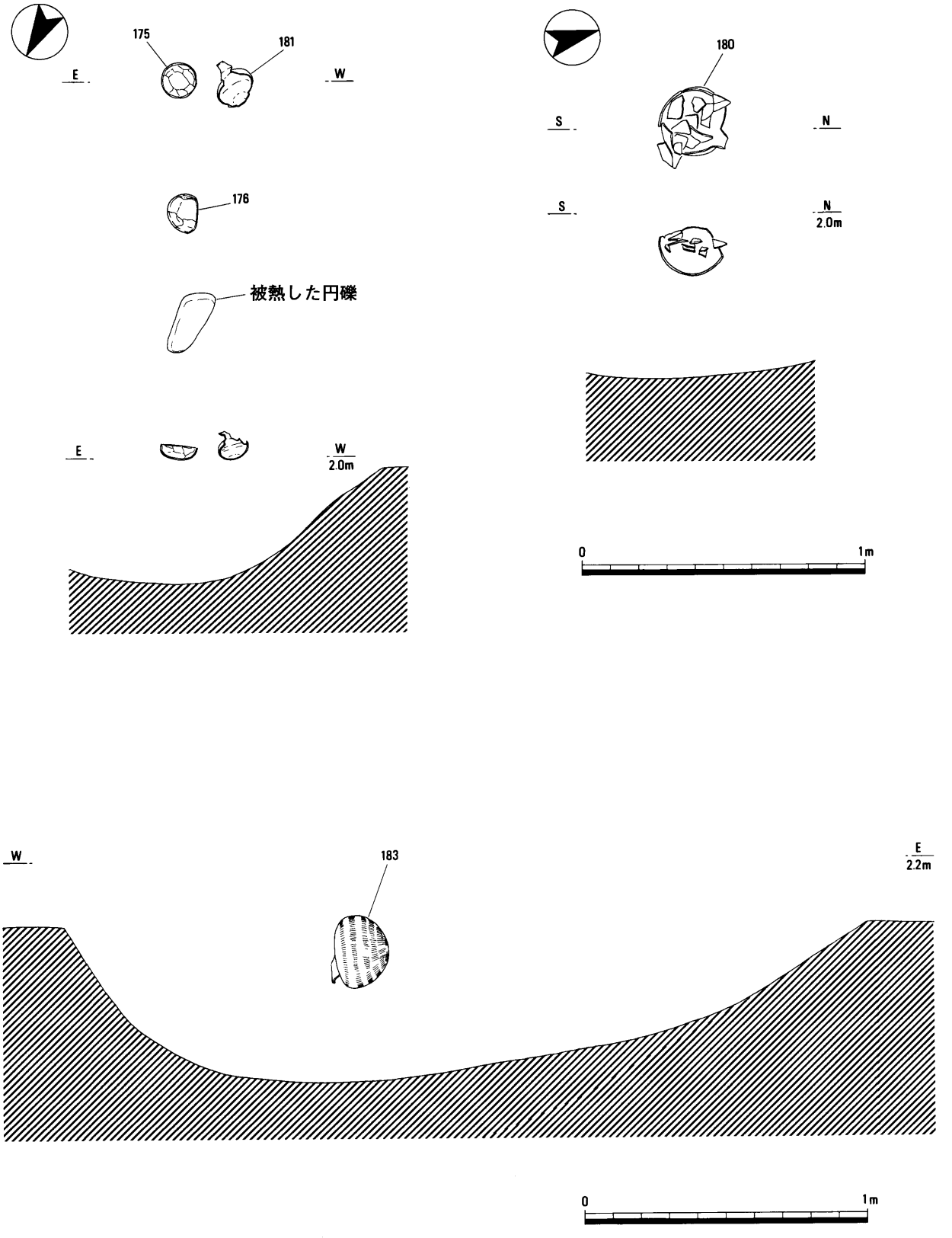
周溝からは円筒埴輪片や土師器・須恵器類が出土しているが、1号墳に比べると埴輪の出土量が少なく、土器類が目立つ。土器類は周溝の南東部分でまとまって出土しており、21-a区では土師器椀2個（175・176）と須恵器広口壺（181）が、周溝底部より約0.5m上のレベルで人頭大の被熱した花崗岩の円礫1個を伴って出土している。土師器椀は2個とも正置しており、円礫も同一レベルを保っている事から、古墳造営後の何らかの墓前祭祀に伴うものとみられる。この他、22-a区では完形に近い須恵器広口壺（183）が周溝底より約0.3m上、土師器無



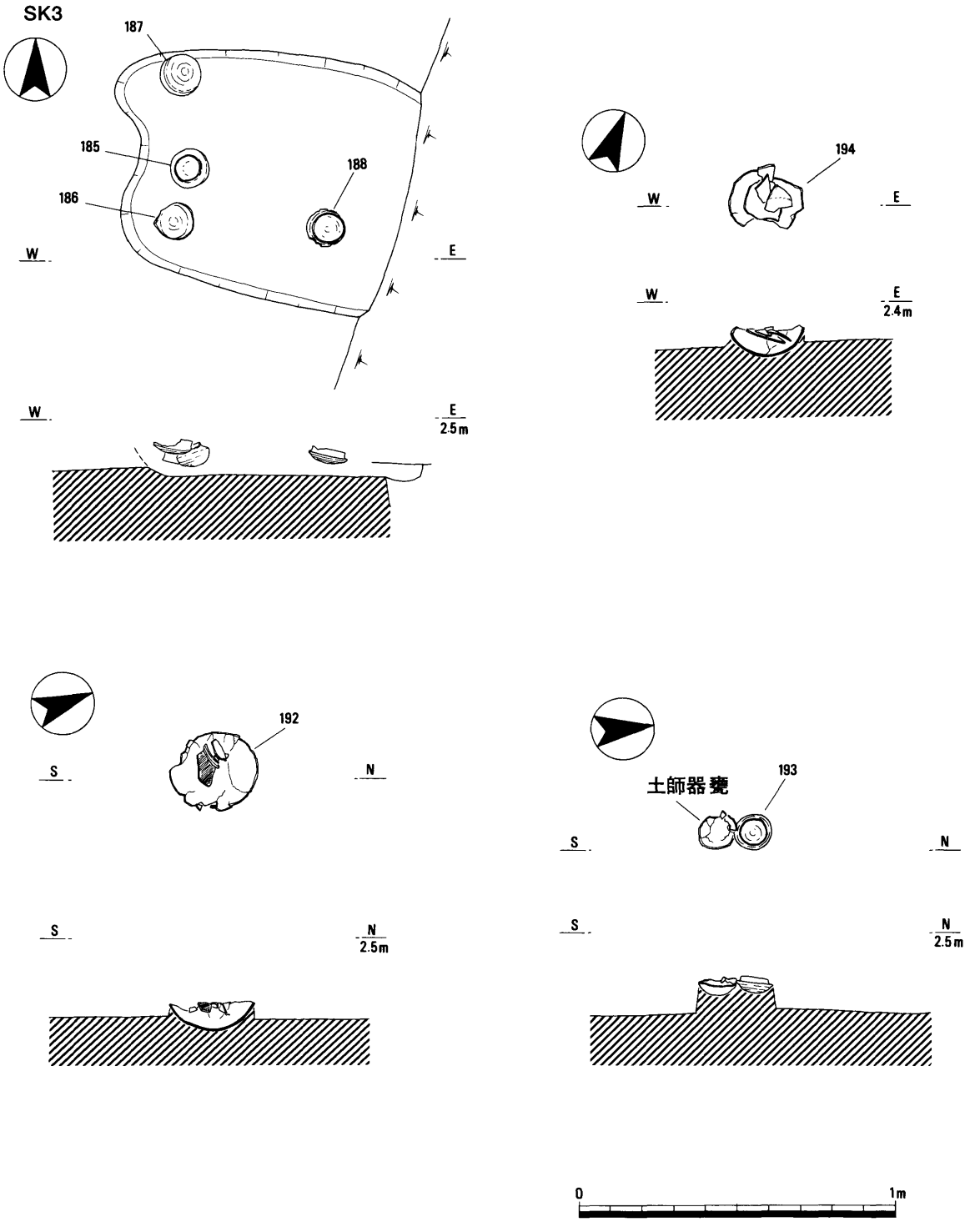
第11図　Ｂ地区遺構平面図（１：250）



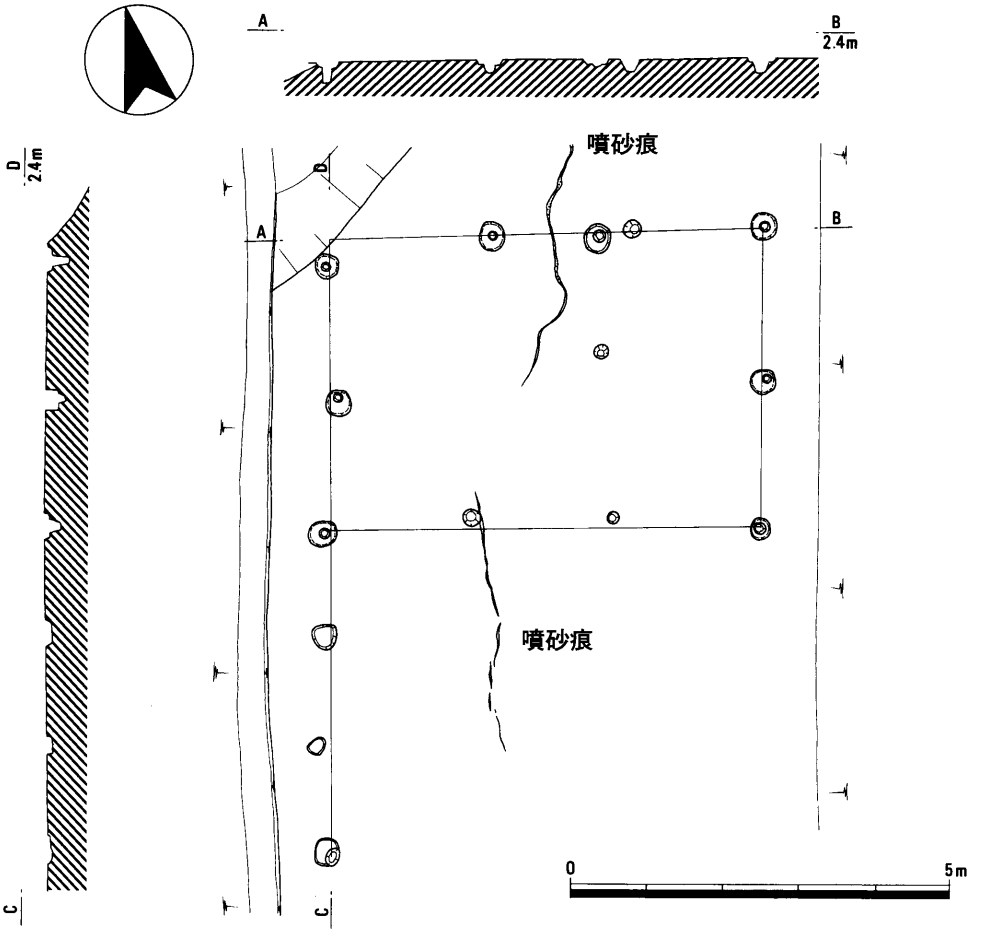
第12図　小野江甚目２号墳実測図（１：100）



第13図　2号墳周溝遺物出土状況図（1：20）



第14図　B地区遺構遺物出土状況図（1：20）



第15図　ＳＤ１遺構平面図（１：100）

頸壺（180）が約0.4m上のレベルで見つかっている。(180）は、周溝内で土圧により上半が内側に潰れた状態で出土しているが、上半の破片のみ磨耗が著しく、周溝が一定程度埋没した後、墳丘上より落ち込み、露出していた上半のみ磨耗が進んで、その後完全に埋没していったものと推定できる。

Ｂ地区では、第３面を検出中に、明確には遺構に伴わない状態で完形に近い土器類が出土している。

先のＳＫ３と同様に肉眼で識別し難い遺構が存在した可能性もある。

ＳＢ１　今回の調査で検出した唯一の掘立柱建物である。３間×２間の東西棟で、東梁行以外は柱通りは良くない。柱掘形は直径約30㎝の円形で、柱痕跡は直径約15㎝、柱間寸法は、桁間が1.9m、梁間が2.0mを測る。なお、西妻柱筋では南に柱間約1.4mの３間分の柱列が延びており、塀のように取りつくものとみられる。第３面上からみると柱痕底が浅過ぎるため、本来は第２面以上から掘り込まれた遺構と考えられる。

噴砂痕　Ｂ地区の中央付近に大地震の痕跡とみられる噴砂痕を検出した。最下層と同じ、灰黄褐色～黄灰色の粗砂の砂脈で、主たる痕跡は北西－南東方向に２条みられ、この他に細く短いものが２条見つかった。この一部分をさらに掘り下げて断面を観察したが（PL．６右下)、砂脈は下へ行くほど枝分かれしながらも広がって、下層の粗砂層に続く事が確認できた。２号墳の埋土を切って噴出しており、古墳時代以後に発生した地震に起因するものであろう。

（３）第３遺構面下確認トレンチ

Ａ地区と同様、Ｂ地区も最下層の確認の試掘溝を設けた。ここでも明確な遺構面は認められなかったが、標高1.5m前後の均質な黄灰色の中～粗砂層か

らは弥生土器・古式土師器が出土した。破断面が磨耗するものが多く、雲出川の洪水堆積により埋没したものと考えられる。やはり標高約1.2m以下で湧水をみ、このレベルで調査を終えている。

〔注〕

① 大矢雅彦「後背湿地」『地形学辞典』二宮書店　1981
所謂「ニコツチ」「ニコスナ」により自然堤防が形成される。

Ⅳ　遺　物

1　中世遺構の遺物（第16図）

（1）ＳＲ１出土遺物（１～33）

自然流路を埋積する砂層から多量の土器片が出土している。

弥生土器高杯（１）、古式土師器高杯（２）、奈良時代須恵器蓋（３）、平安時代土師器杯（４）、灰釉陶器段皿（５）が混入するが、大部分は平安時代末期～鎌倉時代の土器である。土師器類ではロクロ土師器小皿（７）の他、鍋類が出土している。鍋（９）は端部を丸く内側へ折り返す「南伊勢系」鍋の祖形となるもので、外面はナデ調整される。

陶器類では、山茶椀・山皿が主体となる。山皿はいずれも高台をもたないものである。山茶椀は、全体の形態が窺われるものは少ない。高台の形態に幅があるが、大半は低く小さな台形で、高台径は７～８cm前後が中心である。高台内側の糸切痕はそのまま残る。全体でみて藤澤良佑氏の山茶椀編年で①第７型式のものが最も新しく、他に常滑産とみられる広壺片（32）や同安窯系とみられる青磁椀片（33）が出土している。これらの遺物の状況から、ＳＲ１の埋没時期は13世紀後半頃とみられる。

（2）ＳＤ６出土遺物（34～40）

山茶椀・白磁片などが出土している。ＳＤ６は、Ｂ地区の中世溝で最も新しいものである。山茶椀の高台の形態から藤沢編年の第７型式に属するとみられ、13世紀後半頃を最新とするが、出土土器はほとんど破断面が磨滅した小片で、ＳＤ６上には近世に埋没時期が求められるＳＤ５がＳＤ６を踏襲するように掘削されており、ＳＤ６はさらに下った埋没時期が求め得る。

（3）ＳＤ７出土遺物（57）

円形土錘（57）が出土している。この他山茶椀片などが出土している。

（4）ＳＤ８出土遺物（41～43）

灰釉陶器椀（41）は東山72号窯式期のものとみられるが、供出する山茶椀片は第７型式のものである。

（5）ＳＤ９出土遺物（44～56）

出土量はＢ地区の溝では最も多く、整理箱で４箱の遺物が出土している。ロクロ土師器椀（44）は口径15.7cmの大型品で、胎土に細砂を多量に含む。

南伊勢系の土師器鍋（45）は伊藤裕偉氏の分類で第１段階ｂ形式に、② 山茶椀は藤澤氏編年の第６～７型式にあたる。（56）は常滑産の広口壺で、外面には自然釉が全面にかかる。口縁は玉縁状につくる。埋没時期は13世紀後半とみられる。

（6）中世包含層出土遺物（58～62）

第２遺構面上の包含層からの出土遺物である。

（63）は内外面ともに黒化処理する黒色土器Ｂ類の椀である。（60～62）は志摩式製塩土器である。内外面の調整は磨耗のため明らかでないが、器高は4.0cm程度で、底部からまっすぐに立ち上がる体部を持ち、黒色土器とほぼ同じく平安時代、９世紀後葉～10世紀のものとみられる。

2　古墳時代遺構の遺物（第17図～第24図）

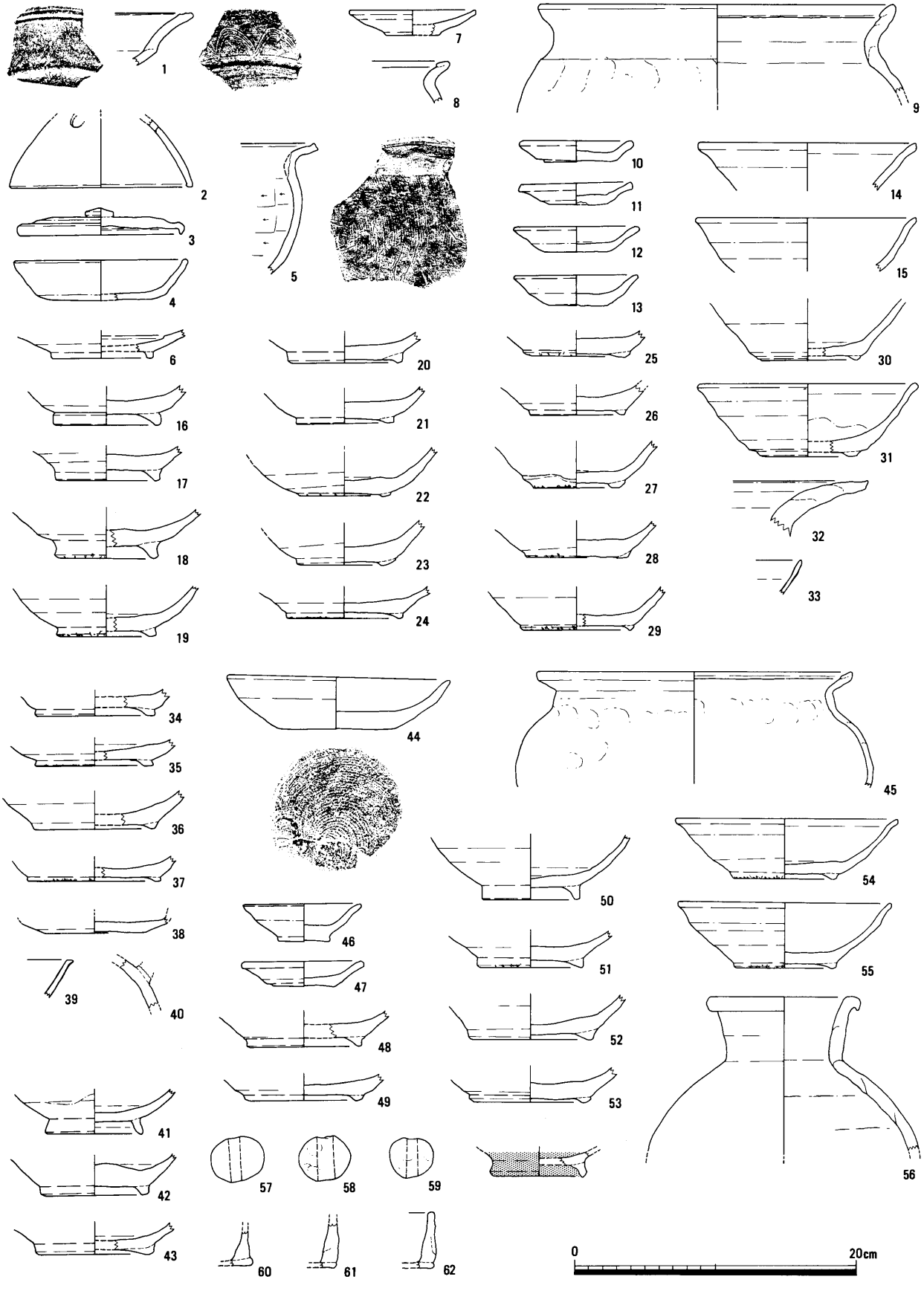
（1）円筒埴輪の分類

古墳時代の遺物は、土器類も多いが、Ａ・Ｂ両地区とおして主体となるのは円筒埴輪をはじめとする埴輪類である。特に今回出土量の多い円筒埴輪類については、外面の二次調整で施されるハケ調整の種類が川西宏之氏の学史的な研究③によって行われており、本報告でも基本的にはこの分類を踏襲し、さらに胎土や焼成の状況も含めて分類して検討した。

・Ａ類 ― 外面調整がタテハケのみのもの。

・Ｂ類 ―　〃　にヨコハケが用いられるもので、これはさらにヨコハケの種類で３分類される。分類基準は、基本的に川西氏のヨコハケの分類を規準としている。

・Ｂａ類 ― 川西氏分類のＡ種ヨコハケを施すも



第16図　出土遺物実測図１（Ａ区：ＳＲ１、Ｂ区：ＳＤ６、ＳＤ７、ＳＤ８、ＳＤ９、中世包含層１：４）

のである。A種ヨコハケはハケの幅が突帯間より狭く、断続的に施されるものである。

・Ｂｂ類 ― 川西氏分類のＢ種ヨコハケを施すものである。Ｂ種ヨコハケは器壁面に工具の静止痕が残る連続的なヨコハケである。

・Ｂｃ類 ― 川西氏分類のＣ種ヨコハケを施すものである。Ｃ種ヨコハケは、器壁上で静止せずに回転台上で一気に施すヨコハケである。

以上の外面の二次調整による分類に加えて、胎土と焼成の特徴から以下のように分類する。

・ＡⅠ類 ― Ａ類の中で、白色系の極めて細かい砂質の胎土でやや軟質の焼成のもの。

・ＡⅡ①類 ― 橙色・浅黄色系の色調で、粗砂がわずかに含まれるが、均質な胎土をもつもの。

・ＡⅡ②類 ― 胎土はＡⅡ①類に似るが、焼成が硬質で、やや還元化して灰黄色・灰褐色を呈するもの。

・ＡⅡ③類 ― 微細な砂質を多量に含む胎土で、淡黄色を呈するもの。

・ＢａⅠ類 ― 微細な砂質を含む、白色系の胎土で、やや軟調の焼成のもの。

・ＢａⅡ類 ― わずかに粗砂が入るが均質な胎土のもの。ＡⅡ①類に似る。

・ＢａⅢ類 ― 態度に粗砂の多い橙色系の胎土のもの。

・ＢｂⅠ類 ― 微細な雲母片などを含む、粗砂分の多い、やや硬質の焼成のもの。

・ＢｂⅡ類 ― 粗砂をわずかに含む均質な胎土をもち、黄橙色・橙色系のもの。

・ＢｂⅢ類 ― 粗砂が混じる橙色系のもの。

・ＢｃⅠ類 ― 粗砂をわずかに含むが均質な胎土で、淡黄・黄橙色のもの。

・ＢｃⅡ類 ― 砂粒の多い橙色のもの。

（２）小野江甚目１号墳の遺物（63～144）

周溝内埋土を中心に円筒埴輪・朝顔形埴輪・形象埴輪・土師器・須恵器・弥生土器が出土している。埴輪類は１例を除き無黒斑の土師質のものである。

遺構の項でも触れたが、１号墳の周溝は、調査区内で北と南に分断され、墳丘と周溝の残存状況も北と南で差があった。この点を踏まえて出土遺物を記述する。

①北側周溝埋土の埴輪類（63～90）

周溝内埋土上から掘削したサブトレンチから出土したものも含めている。円筒埴輪を中心に、朝顔型埴輪もある。焼成はいずれも土師質で、全体の形状・大きさを窺えるものは無い。

朝顔型埴輪は、先の円筒埴輪の分類にあてはめるとＡⅡ①類のもの（63～70）と、ＡⅠ類のもの（83･84）、とヨコハケを施すＢ類系のもの（86･87･89）がある。円筒部の大きさも、（64）でみると径18cm程度で小型品である。

ＡⅠ類系は10本／２cm程度の粗目のハケを施し、ベンガラとみられる赤彩が施されている。

円筒埴輪ではＡⅡ①類が主体で（71～81）、最も出土量が多い。突帯間の外面は10～12本／cm原体のタテハケ調整され、突帯は断面がM字形となる。

口縁部は単純口縁で、端部は面取りされる。胎土は粗砂をわずかに含むが、母材自体は均質な粒子の細かいもので、橙色・浅黄色に焼き上がるものが多い。ＡⅡ①類の中でも、底部形態にはハケ・ナデ調整され、単純におさめる（78･79）と、端部外面に段をもつ、所謂「淡輪技法」系[4]のもの（80･81）があるが、胎土・焼成・調整いずれの面でも差異は看取できない。

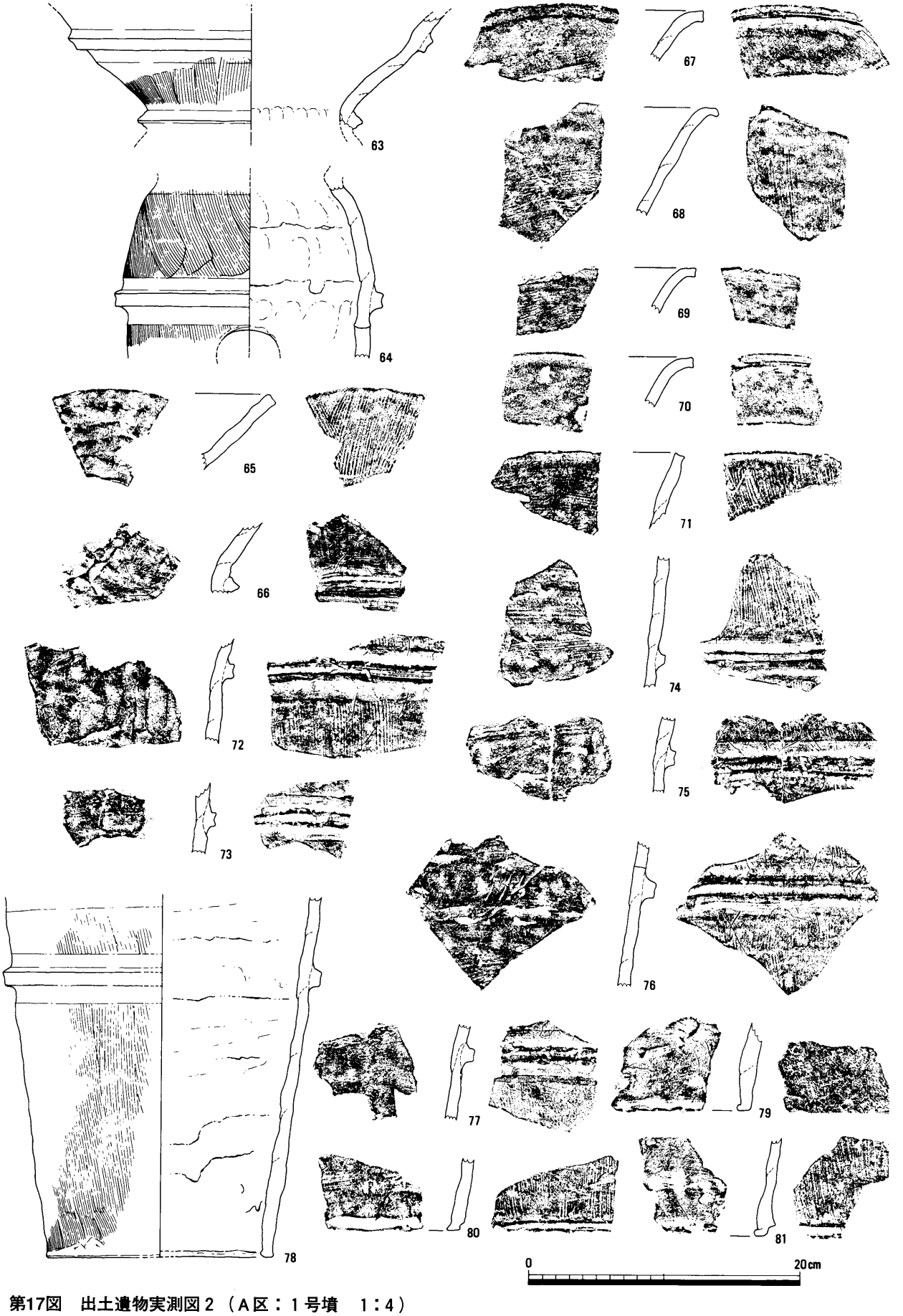
この他、ＡⅠ類系の（82）、硬質な焼成のＡⅡ②類（85･87）、外面最下段の調整がタテ板ナデ状になり、ＡⅠ類系の（90）がある。（85）は包含層出土の（124）と同一個体である。

②南側周溝埋土の円筒埴輪（91～115）

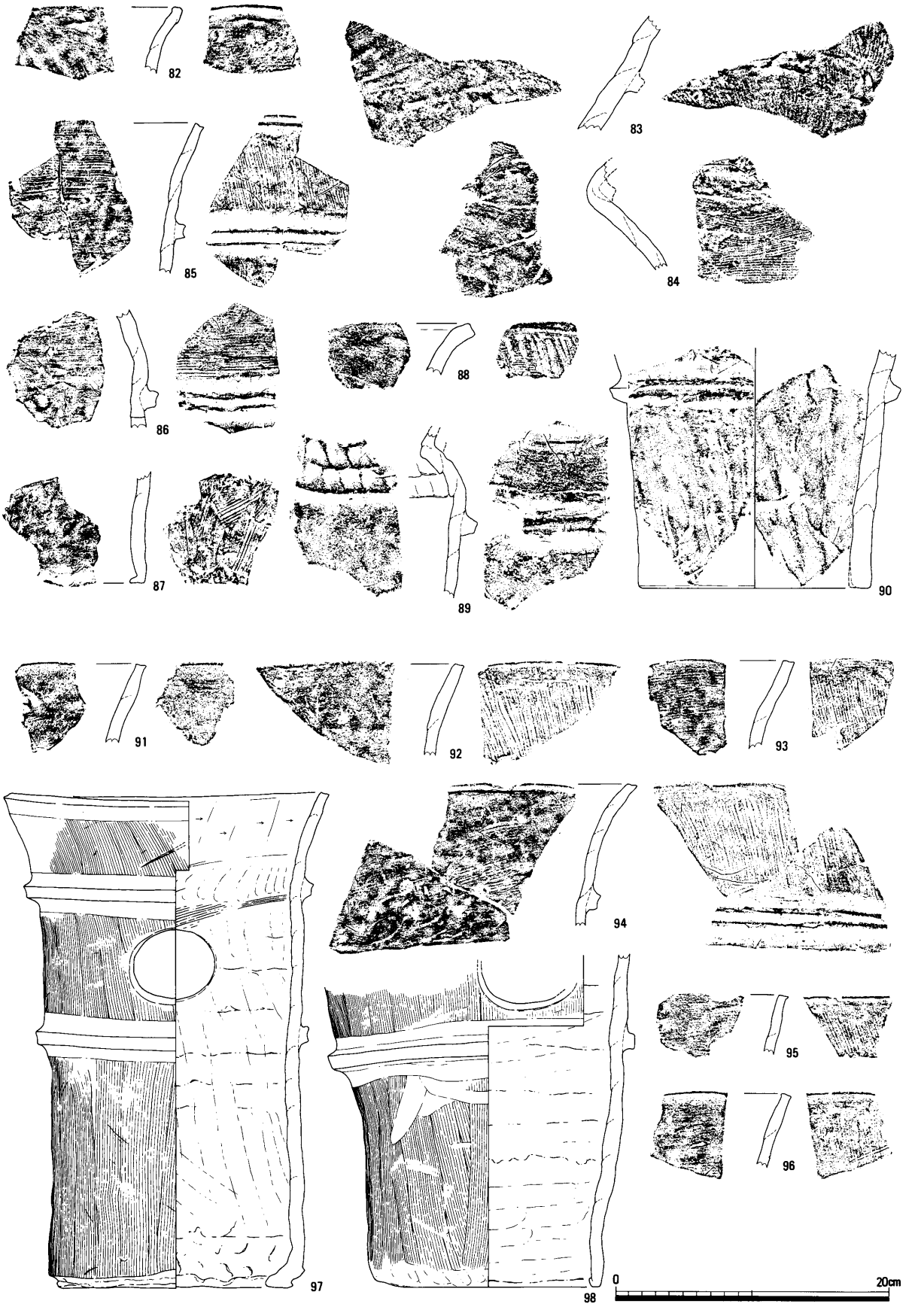
大半が土師質のものである。

円筒埴輪はＡⅡ①類が主体となる（91～110）。（97）は周溝埋土中程から出土したもので、ほぼ完形に復原できた。三段構成を取り、高さは36.5cm、口径は23.5cm、底径は17.0cmで、上に向かって大きくは開かず、土管状のプロポーションになるが、最上段が幅約６cmと短く、寸詰まりな印象を受ける。口縁部は端部をヨコナデするが面を持つ単純な形にまとめる。底部は、内側へ折り込んだような形状を呈する、所謂「淡輪技法」系のものである。透穴は２方向から５cm×６cmの円形透穴を中段に穿孔する。

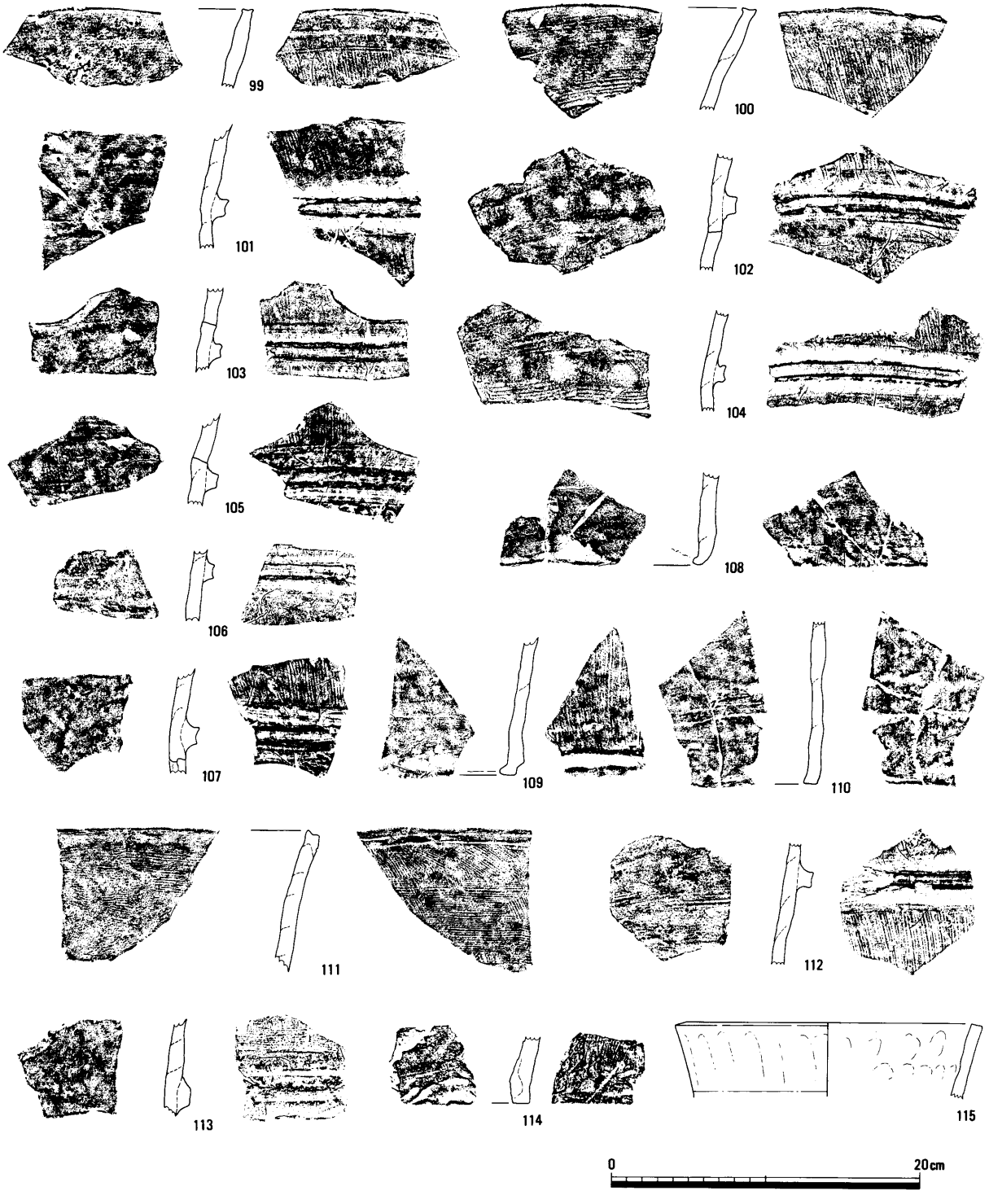
外面の突帯は断面M字状で、端面で幅１cm前後である。突帯間は12本／cm前後の原体のタテハケを



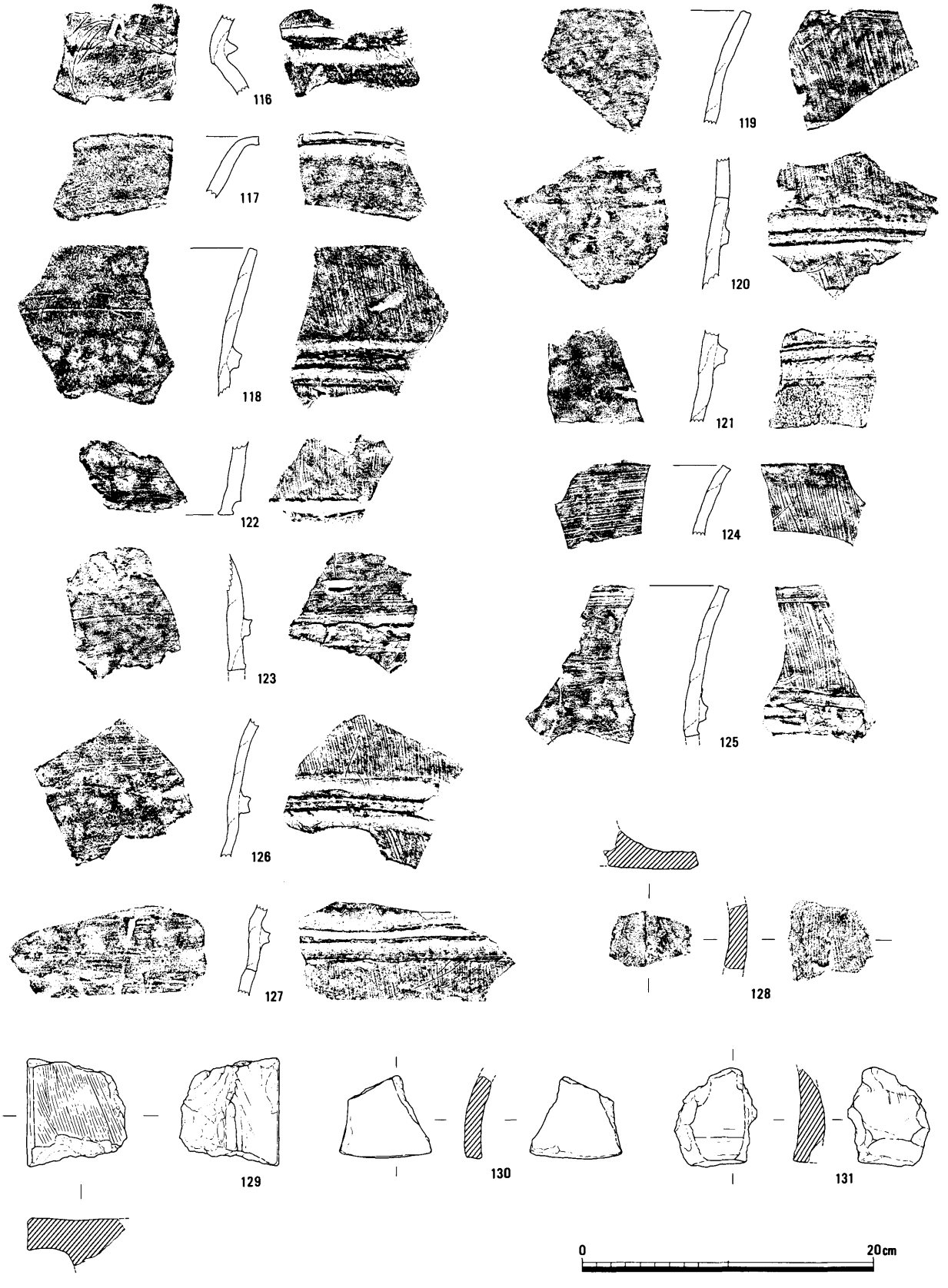
第17図　出土遺物実測図２（Ａ区：１号墳　１：４）



第18図　出土遺物実測図３（Ａ区：１号墳　１：４）



第19図　出土遺物実測図４（Ａ区：１号墳　１：４）



第20図　出土遺物実測図５（Ａ区：古墳時代包含層）

施し、最上段にはヘラ記号がみられる。

内面はタテ方向のナデが中心だが、底部付近では不定方向のナデ、口縁部ではヨコ方向の板ナデ、突帯の内側では指頭圧痕やヨコハケがみられる。

事前の試掘調査で出土した（98）もほぼ同様だが、底部が「淡輪技法」系ではなく、単純におさめるものである。同一個体も含まれるかもしれないが、大部分がＡⅡ①類で、胎土・焼成・調整は共通性が高いが、底部形態はやはり２種類ある事が分かる（108～110）。

他のタイプでは、ＡⅡ①類（112･114）、ＢａⅢ類（111）、ＢｂⅡ類（113）があるが、特殊なものに、唯一の須恵質埴輪とみられる（115）がある。内外面ナデ調整で、外面にはあるいは突帯をナデつけた痕跡とみられるヨコナデ痕がわずかに残り、口縁径約20㎝の円筒埴輪と考えられる。

③１号墳出土の形象埴輪（128～132）

南側周溝の底部近く、調査区西壁に接した所で、ほぼ完形に復原できる馬形埴輪（132）が１個体出土した。前脚と頭頂部・尾部を欠失するため大きさは確定できないが、残高47.5㎝、残長55.0㎝で、胴部の最大幅は17.7㎝である。

成形方法を観察すると、後脚は粘土紐巻き上げで形作った後、内面をタテ方向のナデ調整。腹部は粘土板で前後脚をつなぎ、水平に胴下半部を粘土紐あるいは粘土板で積み上げた後、上半部をドーム状に粘土紐で渡して全体を成形する。尾部は胴部を塞ぐ前に尻部に穿孔し、粘土棒を挿入して接合する。形状は不明だが、短くまとめた形のものであろう。頸部は粘土紐を輪積みして胸部から作り上げる。顎部で粘土板を下へ折り返して下顎をつくり、そこから粘土紐を輪状につないで顔上部から口顎部を形づくり、先端は粘土板で塞いで円筒状の顔ができる。

頸部から顎部へ粘土板をわたした顎骨の表現もなされる。頭部は欠失しているため明らかではないが、頸部から顔部ができたところで粘土紐をドーム状に渡して塞いでいるものとみられる。外面には成形時のハケ目がそのまま残る。

透穴は、欠損のため明らかではないが、胸部にはみられない事から尻部には穿孔されなかった可能性がある。腹部には幅約２㎝の透孔をスリット状に開ける。脚部の付け根には辛うじて内側に達する程度の径５㎜の棒状工具による穿孔がみられるが何ためのものかは不明である。

顔は、目が大半を欠失しているが、残存部から円頭木葉形と推定され、鼻は直径約２㎝の円孔を穿孔する。口はヘラ状工具で横一文字に刻線で表現し、内面まで貫通していない。やや右上がりに刻文されたため、わずかに微笑む様な表情になる。たてがみは下部が一部残るのみだが、単純な板状たてがみであろう。馬具の表現は簡素で、鞍は２枚の粘土板を立てて前輪・後輪を表現し、体側部に欠失しているものの障泥がついていたようである。鞍上部には右側面には棒状工具による連続刺突を３列施す。鐙も右側にのみ刻線で表現される。表面の磨耗はあるが、左側面にはこれらが省略されているようである。平たい粘土紐により手綱と尻繋を表現するが、その他の馬具は一切省略されている。脚は断面円形の円柱状だが、先端をわずかに前へ広げて蹄を表現した可能性がある。[5] 胴部から上はベンガラと思われる赤彩色が施される。

その他の形象埴輪片（128～131）は、墳丘北のＳＤ１底部や、自然流路下シルト質土層から出土している。小片のため形状は不明だが、（128･129）は平らな面取りがあり、家形埴輪の可能性がある。

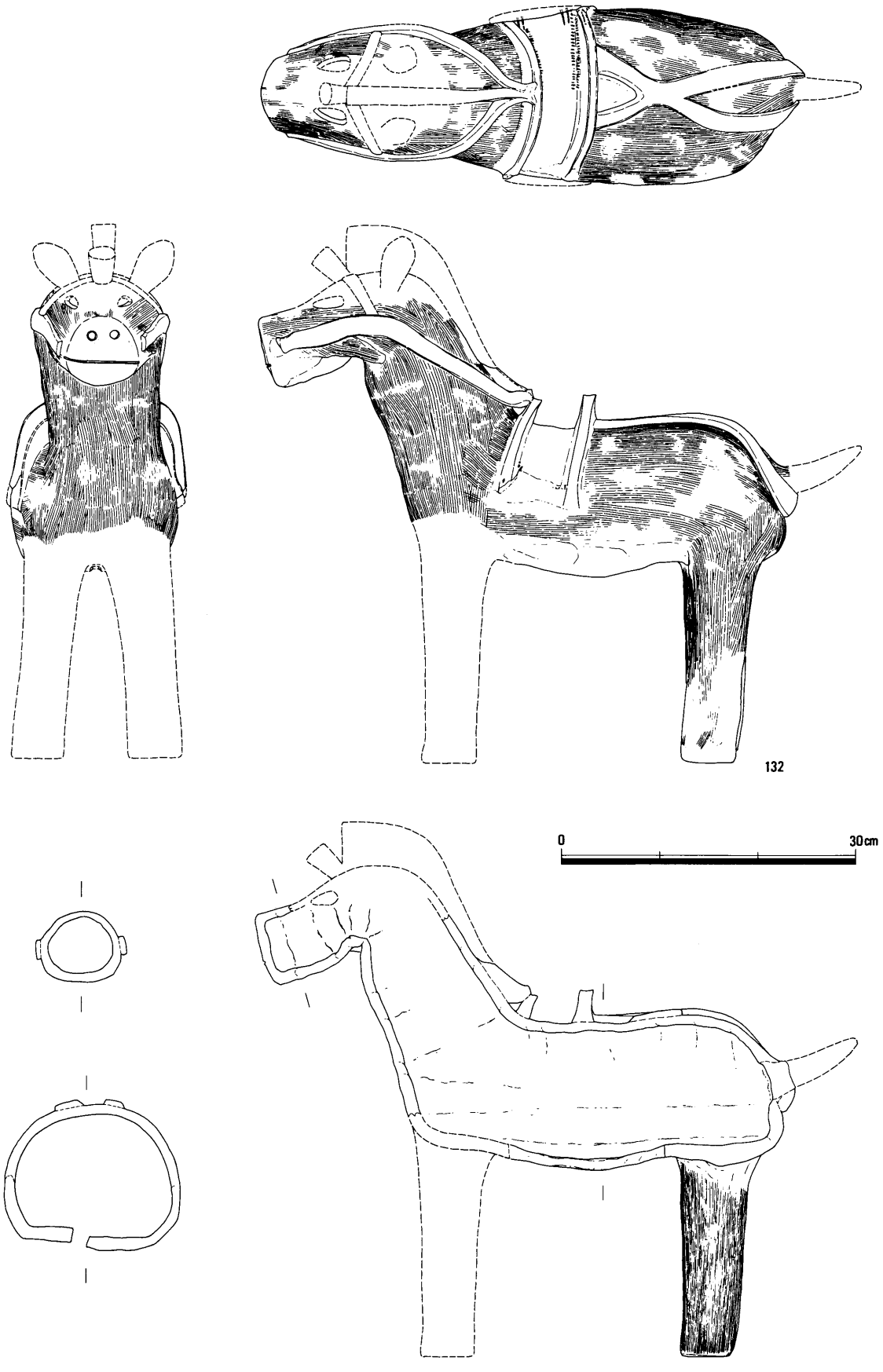
後者には外面に赤彩の痕跡が残る。

④１号墳出土の土器類（133～143）

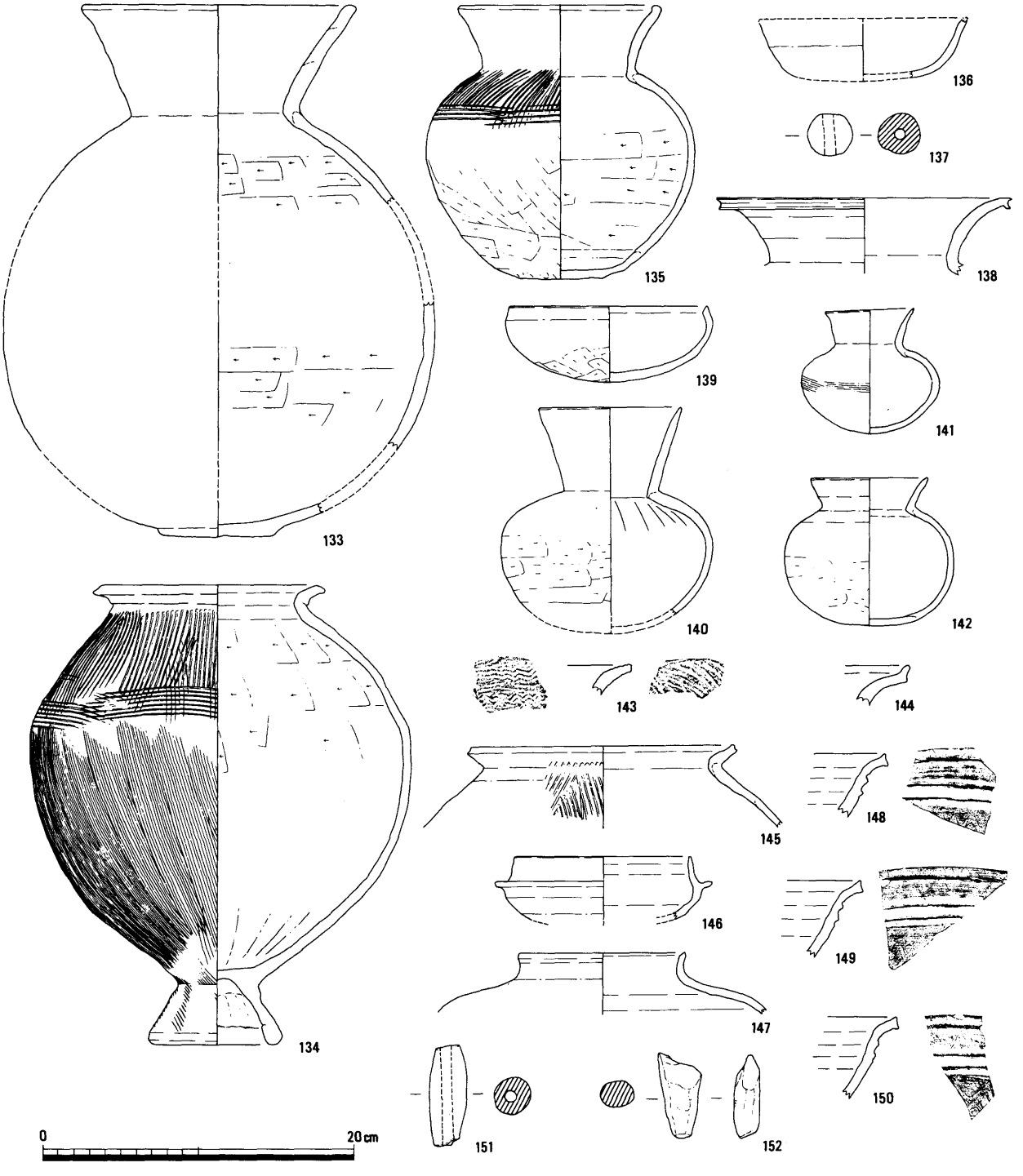
墳丘北斜面部から土師器広口壺（133）が、南斜面部では土師器台付甕（134）と短頸壺（142）がかたまって出土している。（133）は復原高で約35㎝の大型の広口壺で、直径7.3㎝の平底がつき、口縁は直線的に広がる。外面はナデ調整、内面は横方向の板ナデである。

（134）は口縁がわずかに屈曲し、端部に面をもつ台付甕で、「宇田型」と呼ばれるものである。外面は粗いタテハケが２段に施されるが、肩下部でヨコハケが追加される。（142）は内外面ナデ調整され、よわい平底がつく。

（135）も周溝北側埋土底部付近から出土しており、かつて墳丘上にあったものとみられる。口縁端部をやや内側に折り返して肥厚させ、底部には直径5.5㎝の平底がつく。体部はケズリ調整されるが、



第21図　出土遺物実測図６（Ａ区：１号墳　１：６）



第22図　出土遺物実測図７（Ａ区：１号墳、古墳時代包含層　１：４）

肩部外面に粗いハケ目が装飾的に施される。

周溝南側埋土からは、明赤褐色や橙色の精良な胎土の土師器も出土している。(139) は端部はヨコナデで細くつまみ上げるが、底部はケズリ調整、体部はナデ調整される。(140) は周溝南肩でつぶれた状態で出土、(141) は周溝中央部南肩寄りで出土している。

周溝からの須恵器類の出土は少なく、(138) などがみられるにすぎない。ただし1号墳検出中の包含層から (146) のような杯、(147) のような無頸壺、(148～150) のような器台片が出土している。時期的にみても1号墳に関連する資料であろう。

弥生土器片は周溝南側で出土している。甕形土器とみられ、外面は条痕状の粗いハケ目、内面は同様の工具で波状文を描く。中期前半のものとみられる。

(3) A地区古墳包含層出土埴輪類 (116～127)

朝顔形埴輪 (116・117・123) と円筒埴輪 (118～122・124～127) がある。

図示しなかった細片も含め、AⅡ①類のものが大半を占め (116～122)、同様の胎土で焼成が硬質になるAⅡ②類 (124～127) がそれに加わる。

(4) 小野江甚目2号墳の遺物 (153～156・175～183)

1号墳に比べ、墳丘が大きく削平されているためか出土量は少なく、周溝埋土内のもののみである。

種別をみると円筒埴輪・土師器・須恵器がある。

①周溝内出土の埴輪類 (153～156)

外面の二次調整がヨコハケの土師質のもので、BaⅢ類 (153・155・156) とBaⅠ類 (154) がある。いずれも1号墳で主体となるAⅡ①類とはクサリ礫や粗砂が多く胎土も異なる。いずれもやや角の丸い断面M字形の突帯を持つ。包含層出土のものも含め、全て無黒斑で土師質のものである。

②B地区古墳包含層出土の埴輪類 (157～174・184)

朝顔形埴輪を一部含むが (157・158)、大半は円筒埴輪で、全て土師質のものである。A地区内で主体となっていたAⅡ①類はみられず、最も多いのはA種ヨコハケを施すBaⅢ類で (159～164)、次いでB種ヨコハケを施すBbⅢ類 (165～171) が多く、2号墳周溝内遺物と一致する。一応C種ヨコハケと分類したBcⅢ類のもの (172) もある。ただし、この3類型は胎土・焼成も共通しており、破片の出土ばかりのため断定はできないが、BaⅢ類は口縁部下最上段の破片が多く、BbⅢ類は中段部分とみられる破片が多い事から、これらは同一型式の円筒埴輪の部分的な差異である可能性が高い。

この他にはBbⅠ類 (173) と、縦方向の板ナデを施すAⅠ類類似のもの (174) があるが、これらは先述の一群とは胎土・焼成のいずれも異なる。

透穴は円形のもののみで、1号墳ではなかった中段への2条の刻線によるヘラ記号がみられる。

また、1号墳では一定量みられた「淡輪技法」系の底部調整法を示すものは、全ての破片を確認しても2号墳及びB地区では認められなかった。

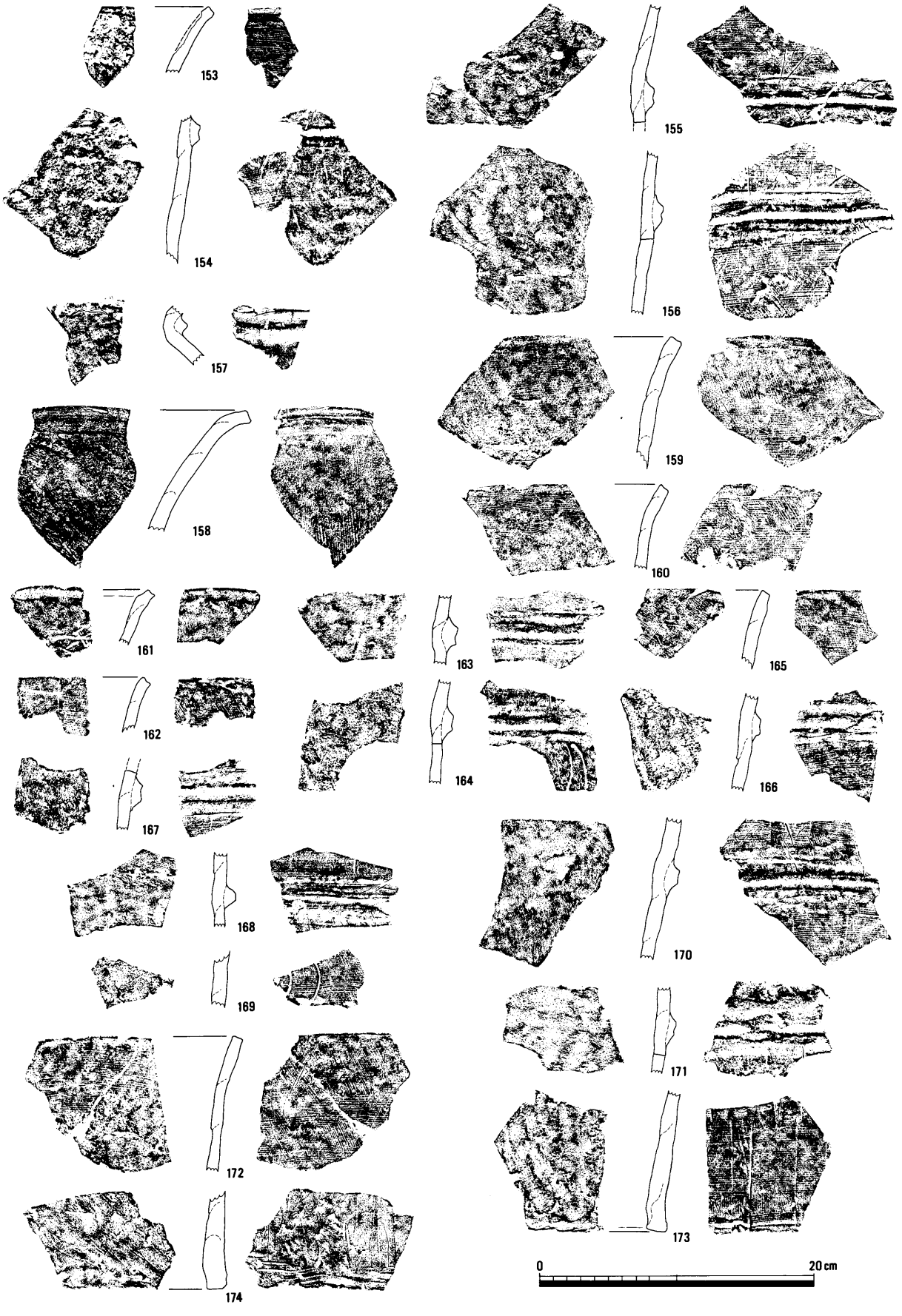
形象埴輪は1片出土しているが (184)、形状は不明である。

③2号墳出土の土器類 (175～183)

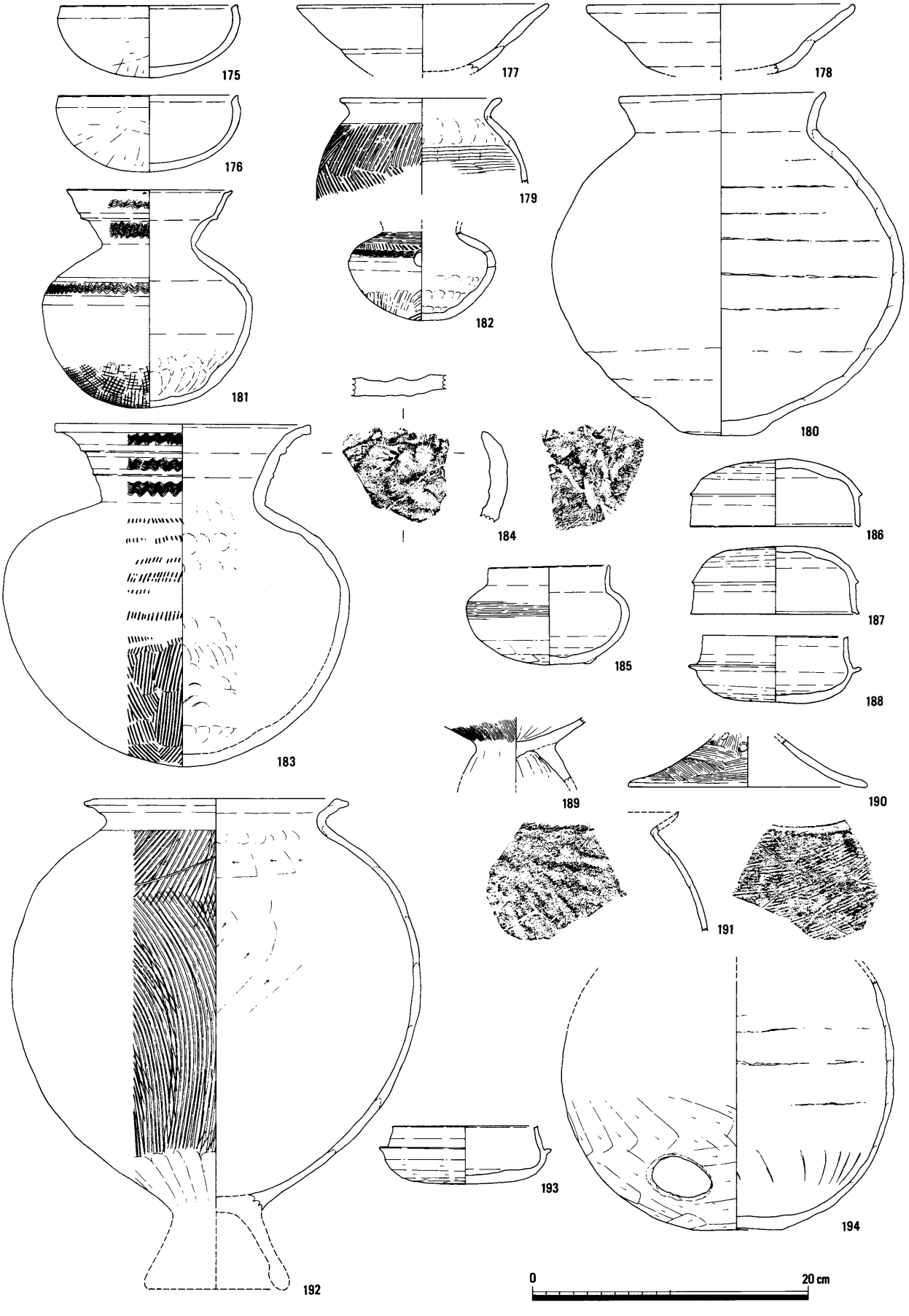
いずれも周溝底部からやや高い位置で出土している。出土状況が明確なものの中では、(180) の土師器無頸壺が墳丘から転落、埋没後上半が土圧で崩壊した状況が窺われたが、他は、周溝がかなり埋没してから意図的に置かれたとみられるものがある。

土師器椀 (175・176) と須恵器広口壺 (181) は周溝南東部でかたまって出土しており、一括性の高いものとみられる。土師器椀はいずれも口縁端部をヨコナデして面取りし、体部下半はケズリ調整される精良な胎土のものである。(181) は二重口縁をつくる広口壺で、瓶の可能性もある。口縁部・頸部・肩部に波状文を施し、底部には格子状タタキ目が残る。外面は灰白色だが、破断面は暗紫色である。大阪府陶邑窯の編年で、TK23型式に並行するものとみられる。須恵器広口壺 (182) は口縁部が一部欠損するが体部は完形で出土した。やや軟調の焼成で、口縁部に2条の断面三角形の突帯と3条の櫛描き波状文を施す。(181) とほぼ同一型式のものであろう。

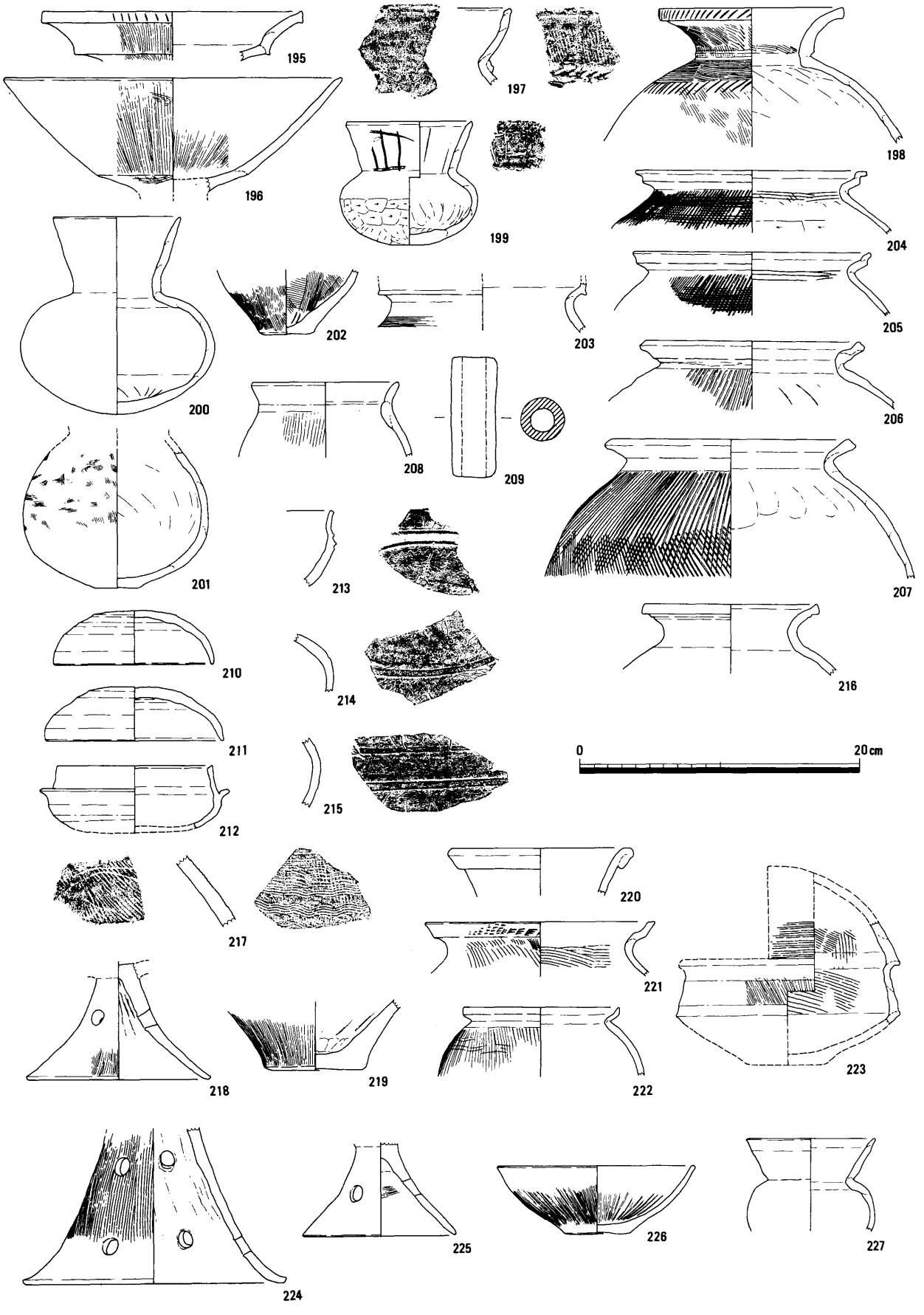
周溝埋土内からは土師器高杯 (177・178)・甕 (179)、須恵器瓶 (182) が出土している。土師器高杯は、杯部下半から口縁部にかけて外側へ屈曲し、内外面ナデ調整される。土師器甕は小型で口縁部はわずかに肥厚する。脚台がつくものであろう。須恵器瓶は口頸部を欠損するが、その頸径は太く、



第23図　出土遺物実測図８（Ｂ区：２号墳、古墳時代包含層　１：４）



第24図　出土遺物実測図９（Ｂ区：２号墳、ＳＫ３，ＳＫ７、３遺構面上面　１：４）



第25図　出土遺物実測図10（Ｂ区：古墳時代包含層、試掘調査　1：4）

（181・183）と形式的に齟齬は無い。

（5）ＳＫ７出土遺物（189～191）

第２遺構面上で確認しているが、２号墳周溝埋土の上部とみられる。土師器片が出土しているが、特に土師器甕（191）は庄内系のもので、細いタタキ目を外面に施し、内面はナデ調整される。二次焼成により赤変する。

（6）ＳＫ３出土遺物（185～188）

須恵器が４点かたまって出土している。杯蓋の稜や杯身の鍔部はまだシャープなつくりで、底部・頂部はわずかに丸みを持ちながらも平坦部をつくる傾向が窺える。やはり陶邑窯編年でＴＫ23型式頃のものであろう。

（7）第３遺構面上面の遺物（192～194）

２号墳検出の際、遺構検出面上から完形品や大型破片が出土している。未確認の遺構に伴うものかもしれない。「宇田型」の土師器台付甕（192）、底部穿孔のある土師器壺（194）、須恵器杯（193）などがある。

（8）Ｂ地区古墳包含層出土遺物（195～216）

埴輪類以外には、土師器・須恵器・弥生土器・土製品がある。注目される遺物について概述する。

土師器二重口縁壺（195）は内外面にヘラミガキを、口縁端部に連続刺突文を施す。

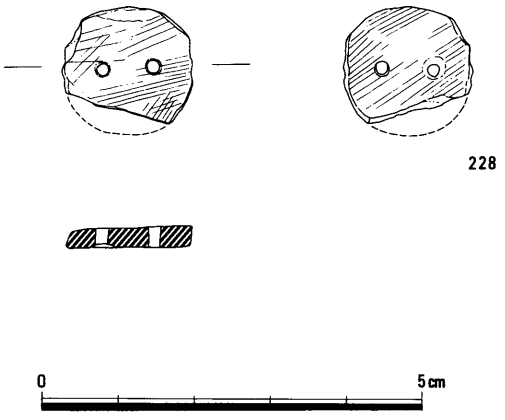
土師器直口壺（199）は、頸部に縦３条、横２状の線刻によるヘラ記号がみられる。線の重複関係をみると、縦線の左側２条－横線２条－縦線の右側１条の順が見てとれる。

土師器甕（203）は、外来系のものとみられ、体部外面にはヨコハケとみられる条線があり、受け口状に口縁部を形成するものである。にぶい黄橙色を呈し、胎土には微細な砂粒を多量に含む。山陰ないし北陸系のものとみられる。

また、石製品では直径1.6cmの緑泥片岩製有孔円盤（228）が１点出土している。

（9）最下層確認トレンチの遺物（217～223）

Ｂ地区トレンチの下部砂層から弥生土器～古式土師器が出土している。弥生土器には中期後葉のものとみられる（217・219）がある。古式土師器では土師器広口壺の（220）が南関東方面の外来系とみられ注目される。また（221）はＳ字状口縁台付甕



第26図　出土遺物実測図11（Ｂ区:古墳時代包含層１:１）

の初源形態とされ、赤塚次郎氏に形態分類で０類とされるものである。[6] 胎土は雲母片などの粗砂を多量に含む。

土師器手焙形土器（223）は低地部での出土例が少ない。小片のため全体を正確に窺い知る事はできないが、外面は疑口縁までを縦方向のヘラミガキ、覆部は横方向のハケ調整され、内面は不定方向のハケ調整される。にぶい赤褐色の焼成で、他の出土品からは異質な印象を受ける。外来要素のひとつとして捉えてよいのかもしれない。

（10）試掘坑出土の遺物（224～227）

試掘調査の際の出土遺物のうち、埴輪類以外の実測可能なものを示した。

〔注〕

① 藤澤良祐「山茶碗研究の現状と課題」『研究紀要』第四号　三重県埋蔵文化財センター　1994

② 伊藤裕偉「中世南勢伊勢系の土師器に関する一試論」『Mie history』vol. 1 三重歴史文化研究会　1990

③ 川西宏之「円筒埴輪総論」『考古学雑誌』第64巻第２号　日本考古学会　1978

④ 前掲②

⑤ 若松良一「人物・動物埴輪」『古墳時代の研究』９　雄山閣　1992

⑥ 赤塚次郎「松河戸様式の設定」『松河戸遺跡』愛知県埋蔵文化財センター　1994

⑦ 田辺昭三『須恵器大成』角川書店　1981

⑧ 赤塚次郎「廻間式土器」『廻間遺跡』愛知県埋蔵文化財センター　1990

出土遺物観察表

No	遺構・層位	器　種	計　測	値調整・技法の特徴	胎　土	焼成	色　調	残存度	備　考	登録番号
1	A地区 SR1砂層	弥生土器 高杯	(口径) － cm (器高) － cm	口縁部外面に櫛描き波状文、端部に凹線	密	良好	外：にぶい黄橙 内：黄灰	－		002-10
2	A地区 SR1砂層	土師器 高杯	(口径) － cm (器高) － cm	外面ヘラミガキか？内面ナデ、円形透穴	微細な砂粒含むが密	良好	外：にぶい黄橙 内：〃	脚部径の1/4		005-02
3	A地区 SR1砂層	須恵器 杯蓋	(口径) 11.6cm (器高) 1.9cm	体部ロクロナデ、外面ロクロケズリ	密	堅緻	外：灰 内：暗オリーブ	約40%	内面に自然釉付着	002-07
4	A地区 SR1砂層	土師器 杯	(口径) 12.2cm (器高) 2.9cm	口縁ヨコナデ、底部ナデ・オサエ、内面ナデ	緻密	良好	外：橙 内：〃	口径の1/4		015-05
5	A地区 SR1砂層	土師器 甕	(口径) － cm (器高) － cm	外面タテハケ、内面横方向板ナデ	砂粒多量に含むが密	良好	外：にぶい黄橙 内：〃	－		005-01
6	A地区 SR1砂層	灰釉陶器 段皿	(台径) 7.0cm	体部ロクロナデ、貼付高台、灰釉刷毛塗り	密	堅緻	外：灰黄 内：灰オリーブ	台径の1/6		004-09
7	A地区 SR1砂層	ロクロ土師器 小皿	(口径) 8.9cm (底径) 3.8cm (器高) 1.8cm	体部ロクロナデ、底部回転糸切り痕	密	やや軟質	外：浅黄橙 内：〃	口径の1/4		002-09
8	A地区 SR1砂層	土師器 鍋	(口径) － cm (器高) － cm	口縁部ヨコナデ、外面タテハケか体部	密	良好	外：にぶい黄橙 内：〃	－		004-10
9	A地区 SR1砂層	土師器 鍋	(口径) 25.2cm	口縁部ヨコナデ、体部ナデ・オサエ	微細な砂粒含むが密	良好	外：にぶい黄橙 内：〃	口径の1/4	外面が二次焼成により赤化	005-05
10	A地区 SR1砂層	陶器小皿 (山皿)	(口径) 7.8cm (底径) 4.9cm (器高) 1.6cm	体部ロクロナデ、底部回転糸切痕	微細な砂粒や小石含むが密	良好	外：灰白 内：〃	完存	口縁部内面に自然釉他の付着物	004-01
11	A地区 SR1砂層	陶器小皿 (山皿)	(口径) 7.9cm (底径) 3.9cm (器高) 1.6cm	体部ロクロナデ、底部回転糸切痕	砂粒多量に含むが密	良好	外：灰 内：〃	約70%	底部内面に亀裂による貫通孔あり	004-02
12	A地区 SR1砂層	陶器小皿 (山皿)	(口径) 8.4cm (底径) 4.5cm (器高) 1.8cm	体部ロクロナデ、底部回転糸切痕	微細な砂粒多量に含む	良好	外：灰白 内：〃	約40%	口縁端部内面に自然釉付着	004-05
13	A地区 SR1砂層	陶器小皿 (山皿)	(口径) 8.7cm (底径) 4.3cm (器高) 2.3cm	体部ロクロナデ、底部ヘラ切り	微細な砂粒や小石を多量に含むが密	良好	外：灰黄 内：〃	約60%	口縁端部に重ね焼きの釉着痕あり	004-03
14	A地区 SR1砂層	陶器　椀 (山茶椀)	(口径) 15.4cm	体部ロクロナデ	砂粒多いが密	良好	外：灰 内：〃	口径の1/4	内面にスス上の黒色物付着	001-02
15	A地区 SR1砂層	陶器　椀 (山茶椀)	(口径) 15.5cm	体部ロクロナデ	微細な砂粒多いが密	良好	外：灰白 内：〃	口径の1/3	表面に鉄分付着	001-04
16	A地区 SR1砂層	陶器　椀 (山茶椀)	(台径) 7.6cm	体部ロクロナデ、貼付高台、底部ナデ	微細な砂粒多いが密	良好	外：灰白 内：〃	台径の3/4		001-08
17	A地区 SR1砂層	陶器　椀 (山茶椀)	(台径) 7.4cm	体部ロクロナデ、貼付高台、底部回転糸切痕	微細な砂粒含むが密	良好	外：灰白 内：灰黄	高台のみ残存	重ね焼き痕、内面に自然釉	001-07
18	A地区 SR1砂層	陶器　椀 (山茶椀)	(台径) 7.4cm	体部ロクロナデ、貼付高台、底部回転糸切痕	微細な砂粒多いが密	良好	外：灰黄 内：〃	高台の1/2	高台に籾殻痕	004-07
19	A地区 SR1砂層	陶器　椀 (山茶椀)	(台径) 7.1cm	体部ロクロナデ、貼付高台、底部回転糸切痕	1～2㎜の小石含むが密	良好	外：灰 内：〃	台径の1/4	高台に籾殻痕、内外面にヌタリ痕顕著	004-04
20	A地区 SR1砂層	陶器　椀 (山茶椀)	(台径) 8.2cm	体部ロクロナデ、貼付高台、底部回転糸切痕	微細な砂粒多いが密	良好	外：灰白 内：〃	台径の1/2		004-05
21	A地区 SR1砂層	陶器　椀 (山茶椀)	(台形) 7.0cm	体部ロクロナデ、貼付高台、底部回転糸切痕	砂粒多いが密	良好	外：灰白 内：〃	台径の1/2		001-03
22	A地区 SR1砂層	陶器　椀 (山茶椀)	(台径) 6.5cm	体部ロクロナデ、貼付高台、底部回転糸切痕	微細な小石等含むが密	良好	外：灰 内：〃	約50%	わずかに籾殻痕残る	002-06
23	A地区 SR1砂層	陶器　椀 (山茶椀)	(台径) 7.0cm	体部ロクロナデ、貼付高台、底部回転糸切痕	微細砂粒を多量に含む	良好	外：灰白 内：〃	高台のみ残存		001-06
24	A地区 SR1砂層	陶器　椀 (山茶椀)	(台径) 8.2cm	体部ロクロナデ、貼付高台、底部回転糸切痕	密	良好	外：灰 内：〃	台径の1/3	高台に籾殻痕残る	001-09
25	A地区 SR1砂層	陶器　椀 (山茶椀)	(台径) 7.0cm	体部ロクロナデ、貼付高台、底部ナデ	微細な砂粒多いが密	良好	外：灰白 内：〃	台径の2/3	高台に籾殻痕残る	002-01
26	A地区 SR1砂層	陶器　椀 (山茶椀)	(台径) 6.6cm	体部ロクロナデ、貼付高台、底部回転糸切痕	砂粒・小石を含む	良好	外：灰白 内：〃	高台のみ残存		001-05
27	A地区 SR1砂層	陶器　椀 (山茶椀)	(台径) 6.1cm	体部ロクロナデ、貼付高台、底部回転糸切痕	微細な砂粒多量に含む	良好	外：灰白 内：〃	台径の1/2	高台に籾殻痕残る	002-02
28	A地区 SR1砂層	陶器　椀 (山茶椀)	(台径) 7.3cm	体部ロクロナデ、貼付高台、底部回転糸切痕	微細な砂粒多いが密	良好	外：灰黄 内：〃	高台のみ残存	底部内面にもわずかに籾殻根残る	004-06
29	A地区 SR1砂層	陶器　椀 (山茶椀)	(台径) 7.0cm	体部ロクロナデ、貼付高台、底部回転糸切痕	微細な砂粒多いが密	良好	外：灰黄 内：灰白	台径の1/3	高台に籾殻痕残る	002-04
30	A地区 SR1砂層	陶器　椀 (山茶椀)	(台径) 6.7cm	体部ロクロナデ、貼付高台、底部回転糸切痕	砂粒多く、やや粗	良好	外：浅黄 内：〃	台径の1/3	高台の剥離著しい	004-08
31	A地区 SR1砂層	陶器　椀 (山茶椀)	(口径) 15.4cm (底径) 7.0cm (器高) 5.2cm	体部ロクロナデ、貼付高台、底部回転糸切痕	砂粒多いが密	良好	外：灰白 内：〃	約30%	内面に重ね焼き痕と自然釉かかる	001-01
32	A地区 SR1砂層	陶器 広口壺	(口径) － cm (器高) － cm	口縁端部ヨコナデ、体部ロクロナデ	密	堅緻	外：オリーブ黒 内：灰	－	外面に自然釉付着	002-08
33	A地区 SR1砂層	青磁 椀	(口径) － cm (器高) － cm	体部外面ケズリ、内面ナデのち全面施釉	緻密	堅緻	外：灰オリーブ	－	同安窯系か	002-03
34	B地区 SD6	陶器　椀 (山茶椀)	(台径) 8.3cm	体部ロクロナデ、貼付高台、底部回転糸切痕	微細な砂粒多いが密	良好	外：灰白 内：〃	台径の1/4		028-06
35	B地区 SD6	陶器　椀 (山茶椀)	(台径) 8.3cm	体部ロクロナデ、貼付高台、底部回転糸切痕	微細な砂粒多量に含む	良好	外：灰白 内：〃	台径の1/4	内面に自然釉 高台に籾殻根残る	028-04
36	B地区 SD6	陶器　椀 (山茶椀)	(台径) 8.4cm	体部ロクロナデ、貼付高台、底部回転糸切痕	微細な砂粒多いが密	良好	外：灰白 内：〃	台径の1/4		028-03
37	B地区 SD6	陶器　椀 (山茶椀)	(台径) 9.4cm	体部ロクロナデ、貼付高台、底部ケズリ	微細な砂粒多いが密	良好	外：灰白 内：〃	台径の1/4	高台に籾殻根残る	028-05
38	B地区 SD6	陶器　盤？	(底径) 7.0cm	体部ロクロナデ、底部回転糸切痕	密	良好	外：灰 内：〃	底径の1/4		028-07
39	B地区 SD6	白磁　椀	(口径) － cm (器高) － cm	ロクロナデのち全面施釉	緻密だが微細な気孔有	堅緻	外：灰黄 内：〃	－		028-08
40	B地区 SD6	須恵器　壺	(口径) － cm (器高) － cm	体部ロクロナデ	密	良好	外：灰 内：〃	－	貼付の把手とみられるものが付く	028-09
41	B地区 SD8	灰釉陶器 椀	(台径) 6.7cm	体部ロクロナデ、貼付高台、底部ロクロケズリ、灰釉漬け掛け	密	堅緻	外：灰白 内：〃	台径の1/3	内面に重ね焼き痕と自然降灰釉	029-02
42	B地区 SD8	陶器　椀 (山茶椀)	(台径) 7.7cm	体部ロクロナデ、貼付高台、底部糸切後ナデ	微細な白色粒含むが密	良好	外：灰白 内：〃	台径の1/3	底部内面に焼きぶくれ	029-03

No	遺構・層位	器　種	計　測	値調整・技法の特徴	胎土	焼成	色　調	残存度	備　　考	登録番号
43	B地区 SD9	陶器　椀 (山茶椀)	(台径)　8.0cm	体部ロクロナデ、貼付高台、底部回転糸切痕	微細な砂粒多いが密	良好	外：にぶい黄橙 内：〃	台径の1/3		029-04
44	B地区 SD9	ロクロ土師器杯	(口径)　15.7cm (底経)　8.4cm (器高)　3.8cm	体部ロクロナデ、底部回転糸切痕	極微細な砂粒を多量に含む	良好	外：にぶい黄橙 内：〃	約60%		029-05
45	B地区 SD9	土師器鍋	(口径)　22.4cm	口縁部ヨコナデ、体部ナデ・オサエ	微細な砂粒多いが密	良好	外：浅黄 内：黒	口径の1/8	器表面の磨耗著しい	031-03
46	B地区 SD9	陶器　小皿 (山皿)	(口径)　8.3cm (底経)　3.5cm (器高)　2.7cm	体部ロクロナデ、底部回転糸切痕	密	良好	外：灰白 内：〃	約60%		028-01
47	B地区 SD9	陶器　小皿 (山皿)	(口径)　8.7cm (底経)　4.4cm (器高)　1.9cm	体部ロクロナデ、底部回転糸切痕	微細な砂粒多いが密	良好	外：灰白 内：〃	約60%	焼成時のゆがみ大	031-07
48	B地区 SD9	陶器椀 (山茶椀)	(台径)　8.2cm	体部ロクロナデ、貼付高台、底部糸切りか	微細な砂粒多いが密	良好	外：灰 内：〃	台径の1/4		029-07
49	B地区 SD9	陶器椀 (山茶椀)	(台径)　8.4cm	体部ロクロナデ、貼付高台、底部ナデ	微細な砂粒多いが密	良好	外：灰白 内：〃	台径の1/4		031-06
50	B地区 SD9	陶器椀 (山茶椀)	(台径)　6.9cm	体部ロクロナデ、貼付高台、底部回転糸切痕	密	良好	外：灰白 内：〃	約60%	体部外面下半にヌタリ痕強く残る	030-07
51	B地区 SD9	陶器椀 (山茶椀)	(台径)　7.3cm	体部ロクロナデ、貼付高台、底部回転糸切痕	微細な砂粒多いが密	良好	外：灰白 内：〃	高台のみ残存	高台に籾殻根残る	031-05
52	B地区 SD9	陶器椀 (山茶椀)	(台径)　8.8cm	体部ロクロナデ、貼付高台、底部糸切後ナデ	微細な砂粒多量に含む	良好	外：灰白 内：〃	高台のみ残存		029-06
53	B地区 SD9	陶器椀 (山茶椀)	(台径)　8.7cm	体部ロクロナデ、貼付高台、底部回転糸切痕	微細な砂粒多いが密	良好	外：灰白 内：〃	高台のみ残存		031-04
54	B地区 SD9	陶器椀 (山茶椀)	(口径)　15.0cm (底経)　6.8cm (器高)　4.7cm	体部ロクロナデ、貼付高台、底部回転糸切痕	微細な砂粒多いが密	良好	外：灰白 内：〃	約70%	内面の半分に自然釉 高台に籾殻根残る	030-01
55	B地区 SD9	陶器椀 (山茶椀)	(口径)　15.8cm (底経)　7.2cm (器高)　4.4cm	体部ロクロナデ、貼付高台、底部回転糸切後ナデ	微細な砂粒多いが密	良好	外：灰白 内：〃	約40%	底部外面に擦痕、転用硯の可能性。高台に籾殻根残る	030-04
56	B地区 SD9	陶器 広口壺	(口径)　10.0cm	体部・口縁部ロクロナデ、内面ナデ・オサエ	微細な白色粒含みやや粗	良好	外：赤黒 内：灰オリーブ 内：黄灰	上半のみ残存	外面に緑灰色の自然釉かかる、常滑産か	030-02
57	B地区 SD7	土製品 土錘	(長径)　3.8cm (孔径)　0.8cm (残重)　39.1g	外面ナデ	微細な砂粒多いが密	良好	外：浅黄橙	完存	土師質	029-01
58	B地区 中世包含層	土製品 土錘	(長径)　3.8cm (孔径)　1.2cm (残重)　31.9g	外面ナデ	微細な砂粒を多量に含む	良好	外：黒褐	ほぼ完存	土師質	045-01
59	B地区 中世包含層	土製品 土錘	(長径)　3.1cm (孔径)　4.0cm (残重)　24.4g	外面ナデ	砂粒を多量に含む	良好	外：黒	完存	土師質 外面の磨耗著しい	041-03
60	B地区 中世包含層	志摩式製塩土器	(長径)　－ cm (器高)　－ cm	内外面ナデ・オサエ	微細な砂粒多量に含む	良好	外：褐 内：橙	－	外面が二次焼成による赤変。底部籾殻根	041-01
61	B地区 中世包含層	志摩式製塩土器	(口径)　－ cm (器高)　－ cm	内外面ナデ・オサエ	微細な砂粒多量に含む	良好	外：明赤褐 内：〃	－	外面が二次焼成による赤変	045-06
62	B地区 中世包含層	志摩式製塩土器	(口径)　－ cm (器高)　4.0cm	内外面ナデ・オサエ	砂粒・小石多量に含む	良好	外：にぶい赤褐 内：橙	－	外面が二次焼成による赤変	041-06
63	A地区1号墳 周溝（北側）	朝顔形埴輪	(口径)　－ cm (器高)　－ cm	外面タテハケ、内面横ナデ、頸部縦ナデ	細長石粒含むが密	やや軟質	外：橙 内：〃	－	土師質、AⅡ①類 64と同一個体か	014-02
64	A地区1号墳 周溝（北側）	朝顔形埴輪	(口径)　－ cm (器高)　－ cm	外面タテハケ、内面ナデ・オサエ、円形透穴	細長石粒含むが密	良好	外：橙 内：〃	－	土師質、AⅡ①類 63と同一個体か	014-01
65	A地区1号墳 周溝（北側）	朝顔形埴輪	(口径)　－ cm (器高)　－ cm	外面上あがりタテハケ内面ナデ・オサエ	密	良好	外：橙～赤褐 内：橙	－	土師質、AⅡ①類	052-04
66	A地区1号墳 周溝（北側）	朝顔形埴輪	(口径)　－ cm (器高)　－ cm	外面タテハケ、内面ナデ	密	良好	外：橙 内：〃	－	土師質、AⅡ①類	012-03
67	A地区1号墳 周溝（北側）	円筒埴輪	(口径)　－ cm (器高)　－ cm	外面タテハケ、内面ヨコハケのちナデ	砂粒・小石含むが密	良好	外：にぶい橙 内：〃	－	土師質、AⅡ①類	022-01
68	A地区1号墳 周溝（北側）	円筒埴輪	(口径)　－ cm (器高)　－ cm	外面タテハケ、内面ヨコハケ	微細な白色粒含むが密	やや軟質	外：浅黄橙 内：橙	－	土師質、AⅡ①類	014-03
69	A地区1号墳 周溝（北側）	円筒埴輪	(口径)　－ cm (器高)　－ cm	外面タテハケ、内面ヨコハケ	砂粒わずかに含むが密	良好	外：浅黄橙 内：〃	－	土師質、AⅡ①類	014-04
70	A地区1号墳 周溝（北側）	円筒埴輪	(口径)　－ cm (器高)　－ cm	外面タテハケ、内面ナデ	砂粒・小石か含むが密	良好	外：橙 内：にぶい橙	－	土師質、AⅡ①類	022-02
71	A地区1号墳 周溝（北側）	円筒埴輪	(口径)　－ cm (器高)　－ cm	外面タテハケ、内面ヨコハケ	微細な砂粒含むが密	やや軟質	外：淡黄 内：〃	－	土師質、AⅡ①類	020-01
72	A地区1号墳 周溝（北側）	円筒埴輪	(口径)　－ cm (器高)　－ cm	外面タテハケ、内面縦方向ナデ	微細な砂粒含むが密	良好	外：にぶい黄橙 内：〃	－	土師質、AⅡ①類	019-03
73	A地区1号墳 周溝（北側）	円筒埴輪	(口径)　－ cm (器高)　－ cm	外面タテハケか？内面粗いヨコハケ後ナデ	1mm程の砂粒含むが密	良好	外：にぶい黄橙 内：浅黄橙	－	土師質、AⅡ①類	052-02
74	A地区1号墳 周溝（北側）	円筒埴輪	(口径)　－ cm (器高)　－ cm	外面タテハケ、内面ナデと粗いヨコハケ	微細な砂粒多いが密	堅緻	外：浅黄橙 内：淡黄	－	土師質、AⅡ①類	024-04
75	A地区1号墳 周溝（北側）	円筒埴輪	(口径)　－ cm (器高)　－ cm	外面タテハケ、内面ナデと粗いヨコハケ	密	やや軟質	外：浅黄橙 内：橙	－	土師質、AⅡ①類 118と同一個体か	025-02
76	A地区1号墳 周溝（北側）	円筒埴輪	(口径)　－ cm (器高)　－ cm	外面タテハケ、内面ナデ・ヨコハケ、透穴	微細な砂粒含むが密	良好	外：橙 内：〃	－	土師質、AⅡ①類	019-01
77	A地区1号墳 周溝（北側）	円筒埴輪	(口径)　－ cm (器高)　－ cm	外面タテハケ、内面ナデ	微細な砂粒含むが密	良好	外：にぶい黄橙 内：〃	－	土師質、AⅡ①類	024-01
78	A地区1号墳 周溝（北側）	円筒埴輪	(口径)　16.8cm (器高)　－ cm	外面タテハケ、底部付近ケズリ、内面ナデ、	微細な白色粒含むが密	良好	外：橙 内：〃	突帯部径の1/5	土師質、AⅡ①類	017-01
79	A地区1号墳 周溝（北側）	円筒埴輪	(口径)　－ cm (器高)　－ cm	外面タテハケ？内面横方向ナデ、底部未調整	微細な砂粒多いが密	良好	外：橙 内：〃	－	土師質、AⅡ①類	018-01
80	A地区1号墳 周溝（北側）	円筒埴輪	(口径)　－ cm (器高)　－ cm	外面タテハケ、内面横方向板ナデ、底部へラ起こし	微細な砂粒多いが密	堅緻	外：浅黄橙 内：にぶい橙	－	土師質、AⅡ①類 淡輪系技法	020-05
81	A地区1号墳 周溝（北側）	円筒埴輪	(口径)　－ cm (器高)　－ cm	外面タテハケ、内面横方向ナデ・おさえ、底部へラ起こし	微細な砂粒多いが密	良好	外：にぶい橙 内：〃	－	土師質、AⅡ①類 淡輪系技法	018-02
82	A地区1号墳 周溝（北側）	円筒埴輪	(口径)　－ cm (器高)　－ cm	外面タテハケ、内面ナナメハケ	微細な砂粒多いが密	やや軟質	外：灰白 内：〃	－	土師質、AⅠ類	052-03
83	A地区1号墳 周溝（北側）	朝顔形埴輪	(口径)　－ cm (器高)　－ cm	外面タテハケ、内面ヨコハケののちナデ、外面全面に赤彩	極微細な砂粒多量に含	やや軟質	外：浅黄橙 内：淡黄	－	土師質、AⅠ類 84と同一個体か	026-02
84	A地区1号墳 周溝（北側）	朝顔形埴輪	(口径)　－ cm (器高)　－ cm	外面A種ヨコハケ、内面ナデ、外面赤彩	極微細な砂多量に含	やや軟質	外：灰白 内：〃	－	土師質、BaⅠ類 83と同一個体か	026-01
85	A地区1号墳 周溝（北側）	円筒埴輪	(口径)　－ cm (器高)　－ cm	外面タテハケ、内面ヨコハケ	長石粒等含むが密	堅緻	外：にぶい黄橙 内：橙	－	土師質、AⅡ②類 124と同一個体	013-01a 024-03
86	A地区1号墳 周溝（北側）	朝顔形埴輪	(口径)　－ cm (器高)　－ cm	外面A種ヨコハケ、内面ナデ、円形透穴	小石等含むが密	良好	外：橙 内：にぶい黄橙	－	土師質BaⅡ類	008-06

No.	遺構・層位	器　種	計　測	値調整・技法の特徴	胎土	焼成	色　調	残存度	備　　考	登録番号
87	A地区1号墳 周溝（北側）	円筒埴輪	（口径）　－ cm （器高）　－ cm	外面不定方向タテハケ、内面横方向ナデ・オサエ、底部未調整	小石等含む	良好	外：にぶい黄 内：暗灰黄	－	土師質、AⅡ②類	052-01
88	A地区1号墳 周溝（北側）	円筒埴輪	（口径）　－ cm （器高）　－ cm	外面A種ヨコハケ後ヘラ状工具のナデ、内面ナデ	密	良好	外：にぶい黄橙 内：〃	－	土師質、BaⅠ類	005-03
89	A地区1号墳 周溝（北側）	朝顔形埴輪	（口径）　－ cm （器高）　－ cm	外面A種ヨコハケ、内面ナデ・つよいオサエ	微細な砂粒多いが密	良好	外：浅黄橙 内：淡黄	－	土師質、BaⅠ類	005-04
90	A地区1号墳 周溝（北側）	円筒埴輪	（底径）　17.2cm （器高）　－ cm	外面下向きの板ナデ、内面下向きのナデ	微細砂質多いが密	良好	外：灰白 内：〃	－	土師質、AⅠ類、破断面灰色	003-01
91	A地区1号墳 周溝（南側）	円筒埴輪	（口径）　－ cm （器高）　－ cm	外面タテハケ、内面横方向ナデ、外面赤彩？	密	良好	外：にぶい黄橙 内：橙	－	土師質、AⅡ①類	024-05
92	A地区1号墳 周溝（南側）	円筒埴輪	（口径）　－ cm （器高）　－ cm	外面タテハケ、内面ナデ	微細な砂粒含むが密	良好	外：橙 内：浅黄橙	－	土師質、AⅡ①類	023-01
93	A地区1号墳 周溝（南側）	円筒埴輪	（口径）　－ cm （器高）　－ cm	外面タテハケ、内面ヨコハケのちナデ	密	良好	外：にぶい橙 内：にぶい黄橙	－	土師質、AⅡ①類	021-02
94	A地区1号墳 周溝（南側）	円筒埴輪	（口径）　－ cm （器高）　－ cm	外面タテハケ、内面ヨコハケ	密	良好	外：橙 内：浅黄橙	－	土師質、AⅡ①類、外面にヘラ記号	009-01
95	A地区1号墳 周溝（南側）	円筒埴輪	（口径）　－ cm （器高）　－ cm	外面タテハケ、内面ヨコハケ	微細な砂粒含むが密	良好	外：橙 内：にぶい橙	－	土師質、AⅡ①類	024-06
96	A地区1号墳 周溝（南側）	円筒埴輪	（口径）　－ cm （器高）　－ cm	外面タテハケ、内面ナデ	密	良好	外：にぶい橙 内：にぶい黄橙	－	土師質、AⅡ①類、外面にヘラ記号	021-04
97	A地区1号墳 周溝（南側）	円筒埴輪	（口径）　23.5cm （底径）　17.0cm （器高）　36.5cm	外面タテハケ、内面縦方向ナデ・板ナデ・ヨコハケ、底部乱ナデ、ヘラ起こし	砂粒わずかに含むが密	良好	外：にぶい黄橙 内：にぶい橙	約80％	土師質、AⅡ①類、外面にヘラ記号、淡輪系技法	016-01
98	A地区1号墳 周溝（南側）	円筒埴輪	（底径）　16.7cm （器高）　－ cm	外面タテハケ、ナデ、内面横方向ナデ	微細な砂粒多いが密	良好	外：にぶい黄橙 内：〃		土師質、AⅡ①類、試掘坑No.5出土	021-01
99	A地区1号墳 周溝（南側）	円筒埴輪	（口径）　－ cm （器高）　－ cm	外面タテハケ、内面ヨコハケ	密	良好	外：にぶい橙 内：橙	－	土師質、AⅡ①類	023-03
100	A地区1号墳 周溝（南側）	円筒埴輪	（口径）　－ cm （器高）　－ cm	外面タテハケ、内面ヨコハケ・ナデ	密	良好	外：にぶい褐 内：にぶい黄橙	－	土師質、AⅡ①類	023-02
101	A地区1号墳 周溝（南側）	円筒埴輪	（口径）　－ cm （器高）　－ cm	外面タテハケ、内面ナデ	緻密	良好	外：橙 内：〃	－	土師質、AⅡ①類、試掘坑No.7出土	057-02
102	A地区1号墳 周溝（南側）	円筒埴輪	（口径）　－ cm （器高）　－ cm	外面タテハケ、内面横方向のナデ、円形透穴	密	良好	外：にぶい黄橙 内：〃	－	土師質、AⅡ①類 103と同一個体	022-03
103	A地区1号墳 周溝（南側）	円筒埴輪	（口径）　－ cm （器高）　－ cm	外面タテハケ、内面ナデ、円形透穴	密	良好	外：にぶい黄橙 内：〃	－	土師質、AⅡ①類 102と同一個体	022-04
104	A地区1号墳 周溝（南側）	円筒埴輪	（口径）　－ cm （器高）　－ cm	外面タテハケ、内面ヨコハケ後ナデ・オサエ	微細な砂粒含むが密	良好	外：にぶい橙 内：橙	－	土師質、AⅡ①類	019-02
105	A地区1号墳 周溝（南側）	円筒埴輪	（口径）　－ cm （器高）　－ cm	外面タテハケ、内面ヨコハケ後ナデ・オサエ、円形透穴	緻密	良好	外：橙 内：〃	－	土師質、AⅡ①類、試掘坑No.7出土	057-04
106	A地区1号墳 周溝（南側）	円筒埴輪	（口径）　－ cm （器高）　－ cm	外面タテハケ、内面横方向ナデ	密	良好	外：にぶい黄橙 内：〃	－	土師質、AⅡ①類	018-03
107	A地区1号墳 周溝（南側）	円筒埴輪	（口径）　－ cm （器高）　－ cm	外面タテハケ、内面ヨコハケ後ナデ・オサエ、円形透穴	緻密	良好	外：橙 内：〃	－	土師質、AⅡ①類、試掘坑No.7出土	057-03
108	A地区1号墳 周溝（南側）	円筒埴輪	（口径）　－ cm （器高）　－ cm	外面縦方向主体のナデ、内面横方向ケズリ	微細な砂粒含むが密	やや軟質	外：浅黄橙 内：〃	－	土師質、AⅡ①類 110と同一個体	058-02
109	A地区1号墳 周溝（南側）	円筒埴輪	（口径）　－ cm （器高）　－ cm	外面タテハケ、内面横方向ナデ淡輪系技法	密	良好	外：浅黄橙 内：〃	－	土師質、AⅡ①類	017-03
110	A地区1号墳 周溝（南側）	円筒埴輪	（口径）　－ cm （器高）　－ cm	外面タテハケ、内面ナデ・横方向ケズリ	微細な砂粒含むが密	やや軟質	外：灰白 内：〃	－	土師質、AⅡ①類 108と同一個体	058-01
111	A地区1号墳 周溝（南側）	円筒埴輪	（口径）　－ cm （器高）　－ cm	外面ナナメハケのちA種ヨコハケ、内面ヨコハケ	微細な砂粒多いが密	良好	外：にぶい橙 内：〃	－	土師質、BaⅢ類	009-02
112	A地区1号墳 周溝（南側）	円筒埴輪	（口径）　－ cm （器高）　－ cm	外面タテハケ、内面ナデ・ヨコハケ	微細な砂粒多いが密	堅緻	外：浅黄橙 内：にぶい黄橙	－	土師質、AⅡ②類	020-04
113	A地区1号墳 周溝（南側）	円筒埴輪	（口径）　－ cm （器高）　－ cm	外面タテハケ後B種ヨコハケ、内面ナデ	微細な砂粒多いが密	良好	外：にぶい黄橙 内：〃	－	土師質、BbⅡ類	010-01
114	A地区1号墳 周溝（南側）	円筒埴輪	（口径）　－ cm （器高）　－ cm	外面タテハケ、内面ナデ	微細な砂粒・小礫含むが密	堅緻	外：にぶい黄 内：〃	－	土師質、AⅡ②類	020-06
115	A地区1号墳 周溝（南側）	円筒埴輪	（口径）　20.8cm （器高）　－ cm	内外面ナデ・オサエ	密	良好	外：灰 内：〃	－	須恵質	024-02
116	A地区古墳時代 包含層	朝顔形埴輪	（口径）　－ cm （器高）　－ cm	外面タテハケ、内面ナデ	微細な砂粒多いが密	良好	外：橙 内：〃	－	土師質、AⅡ①類	012-02
117	A地区古墳時代 包含層	円筒埴輪	（口径）　－ cm （器高）　－ cm	外面タテハケ、内面ヨコハケ	微細な砂粒多いが密	良好	外：橙 内：浅黄橙	－	土師質、AⅡ①類	021-03
118	A地区古墳時代 包含層	円筒埴輪	（口径）　－ cm （器高）　－ cm	外面タテハケ、内面ヨコハケ、ナデ・オサエ	密	良好	外：浅黄橙 内：〃	－	土師質、AⅡ①類	025-01
119	A地区古墳時代 包含層	円筒埴輪	（口径）　－ cm （器高）　－ cm	外面タテハケ、内面ヨコハケ	微細な砂粒含むが密	良好	外：橙 内：浅黄橙	－	土師質、AⅡ①類	012-01
120	A地区古墳時代 包含層	円筒埴輪	（口径）　－ cm （器高）　－ cm	外面タテハケ、内面横方向ナデ、円形透穴	微細な砂粒やや多い	良好	外：橙 内：〃	－	土師質、AⅡ①類	018-04
121	A地区古墳時代 包含層	円筒埴輪	（口径）　－ cm （器高）　－ cm	外面タテハケ、内面ヨコハケ後ナデ	微細な砂粒多いが密	良好	外：にぶい橙 内：〃	－	土師質、AⅡ①類	010-06
122	A地区古墳時代 包含層	円筒埴輪	（口径）　－ cm （器高）　－ cm	外面タテハケ、内面横方向ナデ	1㎜程の砂粒含むが密	良好	外：にぶい黄橙 内：〃	－	土師質、AⅡ①類、淡輪系技法	017-02
123	A地区古墳時代 包含層	朝顔形埴輪	（口径）　－ cm （器高）　－ cm	外面A種ヨコハケ、内面板ナデ、円形透穴	1㎜程の砂粒含むが密	良好	外：にぶい黄橙 内：〃	－	土師質、AⅡ①類	012-04
124	A地区古墳時代 包含層	円筒埴輪	（口径）　－ cm （器高）　－ cm	外面タテハケ、内面ヨコハケ	1㎜程の砂粒含むが密	堅緻	外：橙 内：〃	－	土師質、AⅡ②類 85と同一個体	013-01 b
125	A地区古墳時代 包含層	円筒埴輪	（口径）　－ cm （器高）　－ cm	外面タテハケ、内面ヨコハケ・ナデ・オサエ	密	堅緻	外：にぶい黄橙 内：にぶい橙	－	土師質、AⅡ②類	013-02
126	A地区古墳時代 包含層	円筒埴輪	（口径）　－ cm （器高）　－ cm	外面タテハケ、内面ナデ・ヨコハケ	微細な砂粒含むが密	堅緻	外：にぶい黄橙 内：淡黄	－	土師質、AⅡ②類 127と同一個体か	020-02
127	A地区古墳時代 包含層	円筒埴輪	（口径）　－ cm （器高）　－ cm	外面タテハケ、内面ナデ・ヨコハケ	微細な砂粒含むが密	堅緻	外： 内：	－	土師質、AⅡ②類 126と同一個体か	020-03
128	A地区古墳時代 包含層	形象埴輪 家形埴輪？	（口径）　－ cm （器高）　－ cm	外面タテハケ、内面縦方向のナデ	密	良好	外：にぶい黄橙 内：浅黄橙	－	土師質自然流路下シルト層出土	003-02
129	A地区古墳時代 包含層	形象埴輪 家形埴輪？	（口径）　－ cm （器高）　－ cm	外面ハケメ、内面ナデ外面赤彩	極微細な砂粒含み密	良好	外：淡黄 内：〃	－	土師質 SD1底部出土	027-01
130	A地区古墳時代 包含層	形象埴輪	（口径）　－ cm （器高）　－ cm	表面ナデ調整	微細な砂粒多いが密	良好	外：灰白 内：〃	－	土師質 SD1底部出土	027-03

No	遺構・層位	器　種	計　測	値調整・技法の特徴	胎土	焼成	色　調	残存度	備　　考	登録番号
131	A地区古墳時代 包含層	形象埴輪	(口径)　－ cm (器高)　－ cm	表面ナデ調整	密	良好	外：浅黄橙 内：〃	－	土師質 ＳＤ１出土	027-02
132	A地区１号墳 周溝（南側）	形象埴輪 馬形埴輪	(残長)　55.0cm (残高)　47.5cm (幅)　17.7cm	全面ハケ調整、粘土紐・板の貼付と刺突文で馬具の表現、体部外面上半赤彩	微細な砂粒多量に含むが密	良好	外：にぶい橙～橙 内：浅黄橙	約70％	頭上部・前脚・尾部欠損、腹部に幅２cm前後のスリット、脚付根に径５mmの穿孔	059-01
133	A地区 １号墳南肩部	土師器 広口壺	(口径)　17.2cm (底経)　7.2cm (器高)　34.5cm	体部外面ナデ、内面板ナデ、口縁部ヨコナデ	微細な砂粒多いが密	良好	外：にぶい黄橙～〃 内：〃～オリーブ黒	約30％	体部外面下半に黒斑	007-01
134	A地区１号墳 周溝（北側）	土師器 台付甕	(口径)　13.7cm (底経)　8.6cm (器高)　30.2cm	口縁部ヨコナデ、体部外面タテハケ、肩部にヨコハケ、内面板ナデ	多量の砂粒を含むが密	良好	外：にぶい黄橙 内：〃	約90％	体部外面下半にスス付着	011-01
135	A地区１号墳 周溝（北側）	土師器 広口壺	(口径)　12.6cm (底経)　5.5cm (器高)　17.7cm	口縁部ヨコナデ、体部外面ケズリ、粗いタテヨコハケ、内面板ナデ	微細な砂粒多量に含む	良好	外：浅黄橙 内：〃	ほぼ 完存		006-01
136	A地区１号墳 周溝（北側）	土師器 椀	(口径)　13.2cm	口縁部ヨコナデ、体部ナデ	微細砂粒クサリ礫含む	良好	外：にぶい橙 内：〃	約50％		015-04
137	A地区１号墳 周溝（北側）	土製品 土錘	(長径)　3.0cm (孔経)　0.7cm (残重)　18.9ｇ	全面ナデ	細砂粒多いが密	良好	外：にぶい黄	完存	土師質	010-02
138	A地区１号墳 周溝（北側）	須恵器 広口壺	(口径)　19.2cm	口頸部ロクロナデ	密	良好	外：灰 内：〃	口径の 1/6		008-02
139	A地区１号墳 周溝（南側）	土師器 椀	(口径)　12.8cm (器高)　5.0cm	口縁部ヨコナデ、外面下半ケズリ、内面ナデ	１mm程の砂粒含む	良好	外：橙 内：〃	約90％		008-04
140	A地区１号墳 周溝（南側）	土師器 長頸壺	(口径)　9.1cm	口頸部ヨコナデ、体部外面ナデ・ケズリ、内面ナデ・板ナデ	密	良好	外：明赤褐 内：〃	約70％		006-03
141	A地区１号墳 周溝（南側）	土師器 直口壺	(口径)　5.7cm (器高)　8.1cm	口頸部ヨコナデ、体部ヨコハケ後ナデ、内面ナデ	緻密	良好	外：明赤褐 内：〃	ほぼ 完存		015-03
142	A地区１号墳 周溝（南肩）	土師器 短頸壺	(口径)　7.5cm (器高)　9.6cm	口頸部ヨコナデ、体部外面上半ナデ、下半ケズリ、内面ナデ	緻密	堅緻	外：にぶい黄橙 内：黒～灰白	ほぼ 完存	よわい平底がつく	015-01
143	A地区古墳時代 包含層	弥生土器 甕	(口径)　－ cm (器高)　－ cm	外面条痕状の粗いハケ、内面櫛状工具の波状文	微細な砂粒含むが密	良好	外：灰褐 内：橙	－		008-05
144	A地区古墳時代 包含層	弥生土器 広口壺	(口径)　－ cm (器高)　－ cm	端部櫛状工具の刺突、内外面赤彩	密	良好	外：赤 内：〃	－		010-04
145	A地区古墳時代 包含層	土師器 台付甕	(口径)　17.0cm	口縁部ヨコナデ、外面タテハケ、内面ナデ	微細な砂粒を多量に含	良好	外：にぶい褐 内：にぶい黄橙	口径の 1/4		008-01
146	A地区古墳時代 包含層	須恵器 杯	(口径)　11.3cm	体部ロクロナデ、底部ロクロケズリ	密	良好	外：灰 内：〃	口径の 1/4		008-03
147	A地区古墳時代 包含層	須恵器 無頸壺	(口径)　10.7cm	口縁部ヨコナデ、体部ロクロナデ	密	良好	外：黄灰 内：灰	口径の 1/4	外面肩部に火がかり痕	006-02
148	A地区古墳時代 包含層	須恵器 器台	(口径)　－ cm (器高)　－ cm	ロクロナデ、断面三角突帯、櫛描き波状文	緻密	堅緻	外：灰 内：〃	－	149・150と同一個体	010-05a
149	A地区古墳時代 包含層	須恵器 器台	(口径)　－ cm (器高)　－ cm	ロクロナデ、断面三角突帯、櫛描き波状文	緻密	堅緻	外：灰 内：〃	－	148・150と同一個体	010-05b
150	A地区古墳時代 包含層	須恵器 器台	(口径)　－ cm (器高)　－ cm	ロクロナデ、断面三角突帯、櫛描き波状文	緻密	堅緻	外：灰 内：〃	－	148・149と同一個体	010-05c
151	A地区古墳時代 包含層	土製品 土錘	(長径)　6.5cm (孔経)　0.7cm (残重)　34.5ｇ	全面ナデ	密	良好	外：黒	完存	土師質	010-03
152	A地区古墳時代 包含層	不明土製品	(残長)　5.5cm	全面ナデ	微細な砂粒多いが密	良好	外：橙	－	土師質	015-02
153	B地区 ２号墳周溝	円筒埴輪	(口径)　－ cm (器高)　－ cm	外面A種ヨコハケ、内面ナナメハケ	微細な砂粒等含むが密	良好	外：にぶい橙 内：〃	－	土師質、ＢａⅢ類	035-03
154	B地区 ２号墳周溝	円筒埴輪	(口径)　－ cm (器高)　－ cm	外面A種ヨコハケ、内面不明	微細な砂粒等含むが密	やや 軟質	外：浅黄橙 内：〃	－	土師質　ＢａⅠ類	036-01
155	B地区 ２号墳周溝	円筒埴輪	(口径)　－ cm (器高)　－ cm	外面A種ヨコハケ、内面ナデ、円形透穴	微細な砂粒等含むが密	良好	外：浅黄橙 内：〃	－	土師質、ＢａⅢ類 156と同一個体か	035-02
156	B地区 ２号墳周溝	円筒埴輪	(口径)　－ cm (器高)　－ cm	外面A種ヨコハケ、内面ナデ、円形透穴	微細な砂粒等含むが密	良好	外：橙 内：〃	－	土師質、ＢａⅢ類 155と同一個体か	035-01
157	B地区古墳時代 包含層	朝顔形埴輪	(口径)　－ cm (器高)　－ cm	外面ナナメハケ、内面ナデ	微細な砂粒等含む	良好	外：浅黄橙 内：〃	－	土師質、ＡⅡ①類	045-02
158	B地区古墳時代 包含層	円筒埴輪	(口径)　－ cm (器高)　－ cm	外面タテハケ、内面斜め方向ナデ	微細な砂粒多量に含む	良好	外：淡黄 内：〃	－	土師質、ＡⅡ③類	047-02
159	B地区古墳時代 包含層	円筒埴輪	(口径)　－ cm (器高)　－ cm	外面ナナメハケ後C種ヨコハケ、内面ヨコハケ、ナデ、外面赤彩？	１mm程の砂粒含むが密	良好	外：浅黄橙 内：にぶい橙	－	土師質、ＢａⅢ類 172と同一個体か？	048-01b
160	B地区古墳時代 包含層	円筒埴輪	(口径)　－ cm (器高)　－ cm	外面ナナメハケ後C種ヨコハケ、内面横ナデ	１mm程の砂粒含むが密	良好	外：にぶい橙 内：〃	－	土師質、ＢａⅢ類	049-01
161	B地区古墳時代 包含層	円筒埴輪	(口径)　－ cm (器高)　－ cm	外面タテハケ後ヨコハケ、内面ナデ	微細な砂粒多いが密	良好	外：浅黄橙 内：〃	－	土師質、ＢａⅢ類	050-05
162	B地区古墳時代 包含層	円筒埴輪	(口径)　－ cm (器高)　－ cm	外面ナナメハケ後C種ヨコハケ、内面ヨコハケ	微細な砂粒多いが密	良好	外：橙 内：にぶい橙	－	土師質、ＢａⅢ類	050-04
163	B地区古墳時代 包含層	円筒埴輪	(口径)　－ cm (器高)　－ cm	外面ヨコハケ、内面ナデ	微細な砂粒多いが密	良好	外：浅黄橙 内：〃	－	土師質、ＢａⅢ類	049-03
164	B地区古墳時代 包含層	円筒埴輪	(口径)　－ cm (器高)　－ cm	外面ヨコハケ、ヘラ記号、内面ナデ、円形透穴	微細な砂粒多いが密	良好	外：浅黄橙 内：〃	－	土師質、ＢａⅢ類	041-05
165	B地区古墳時代 包含層	円筒埴輪	(口径)　－ cm (器高)　－ cm	外面B種ヨコハケ、内面ナナメハケ	微細な砂粒含むが密	良好	外：浅黄橙 内：にぶい黄橙	－	土師質、ＢｂⅢ類	050-03
166	B地区古墳時代 包含層	円筒埴輪	(口径)　－ cm (器高)　－ cm	外面B種ヨコハケ、内面ナデ	微細な砂粒多いが密	良好	外：橙 内：〃	－	土師質、ＢｂⅢ類	051-01
167	B地区古墳時代 包含層	円筒埴輪	(口径)　－ cm (器高)　－ cm	外面B種ヨコハケ、内面ナデ、円形透穴	微細な砂粒多いが密	良好	外：にぶい橙 内：浅黄橙	－	土師質、ＢｂⅢ類	051-03
168	B地区古墳時代 包含層	円筒埴輪	(口径)　－ cm (器高)　－ cm	外面B種ヨコハケ、内面ナデ	微細な砂粒多いが密	良好	外：橙 内：にぶい橙	－	土師質、ＢｂⅢ類	050-02
169	B地区古墳時代 包含層	円筒埴輪	(口径)　－ cm (器高)　－ cm	外面B種ヨコハケ、ヘラ記号、内面ナデ	微細な砂粒多いが密	良好	外：にぶい橙 内：〃	－	土師質、ＢｂⅢ類か	051-04
170	B地区古墳時代 包含層	円筒埴輪	(口径)　－ cm (器高)　－ cm	外面B種ヨコハケ、内面ナデ、外面赤彩？	１mm程の砂多いが密	良好	外：浅黄橙 内：にぶい橙	－	土師質、ＢｂⅢ類	049-02
171	B地区古墳時代 包含層	円筒埴輪	(口径)　－ cm (器高)　－ cm	外面ヨコハケか？内面ナデ、円形透穴	微細な砂粒等含むが密	良好	外：にぶい橙 内：浅黄橙	－	土師質、ＢｂⅢ類か	051-02
172	B地区古墳時代 包含層	円筒埴輪	(口径)　－ cm (器高)　－ cm	外面ナナメハケ後C種ヨコハケ、内面ナデ、ヨコハケ、外面赤彩？	１mm前後の砂粒等含むが密	良好	外：浅黄橙 内：にぶい橙	－	土師質、ＢｃⅡ類 159と同一個体か	048-01a
173	B地区古墳時代 包含層	円筒埴輪	(口径)　－ cm (器高)　－ cm	外面B種ヨコハケ、内面縦方向ナデ	白色粒等多量に含む	堅緻	外：灰黄 内：にぶい黄橙	－	土師質、ＢｂⅠ類 ＳＤ10出土	031-02
174	B地区古墳時代 包含層	円筒埴輪	(口径)　－ cm (器高)　－ cm	外面縦方向主体の板ナデ、内面斜め方向ナデ	微細な砂粒多いが密	やや 軟調	外：にぶい橙 内：橙	－	土師質、ＡⅠ類系？	050-01

No	遺構・層位	器　種	計　測	値調整・技法の特徴	胎土	焼成	色　調	残存度	備考	登録番号
175	B地区 2号墳周溝	土師器 椀	(口径) 12.8cm (器高) 5.6cm	口縁部ヨコナデ、体部外面ケズリ、内面ナデ	微細な砂粒多量に含む	やや軟質	外：明赤褐 内：〃	ほぼ完存		033-03
176	B地区 2号墳周溝	土師器 椀	(口径) 12.9cm (器高) 5.6cm	縁部ヨコナデ、体部外面ケズリ、内面ナデ	微細な砂粒多量に含む	良好	外：橙 内：明赤褐	約60%	外面に径5cm程の黒斑がみられる	033-02
177	B地区 2号墳周溝	土師器 高杯	(口径) 18.0cm	内外面ナデ	細砂粒含むが密	良好	外：にぶい黄褐 内：〃	口径の1/4		034-03
178	B地区 2号墳周溝	土師器 高杯	(口径) 19.6cm	内外面ナデ	1mm程の砂粒多いが密	良好	外：にぶい赤褐 内：明赤褐	口径の1/6	内面に黒斑みられる	034-04
179	B地区 2号墳周溝	土師器 甕	(口径) 11.7cm	口縁部ヨコナデ、外面タテハケ、内面ナデ・ヨコハケ	微細な砂粒多いが密	良好	外：にぶい黄橙 内：〃	約40%		034-02
180	B地区 2号墳周溝	土師器 無頸壺	(口径) 15.0cm (底径) 5.3cm (器高) 24.9cm	口縁部ヨコナデ、体部外面ナデ、内面板ナデ?	微細な砂粒クサリ礫含む	良好	外：橙 内：〃	約70%	器表面の磨耗著しい	042-01
181	B地区 2号墳周溝	須恵器 広口壺	(口径) 11.9cm (器高) 15.8cm	体部ロクロナデ、底部格子タタキ目、内面ナデ、口縁部・頸部・肩部に沈線と波状文	1mm前後の白色粒含むが密	良好	外：灰 内：〃	約50%	器表面に微小な気孔がみられる	033-01
182	B地区 2号墳周溝	須恵器 甕	(口径) ― cm (器高) ― cm	体部ロクロナデ、底部並行タタキ目、内面ナデ、肩部に櫛描横線文・刺突文・波状文	微細な砂粒含むが密	良好	外：灰 内：〃	体部のみ残存	肩部に自然釉付着	034-01
183	B地区 2号墳周溝	須恵器 広口壺	(口径) 18.4cm (器高) 24.7cm	口頸部に突帯2条・波状文3条、体部並行タタキ目・ナデ、内面ナデ・オサエ	小石や白色粒多量に含むが密	やや軟質	外：灰 内：〃	約70%		032-01
184	B地区 2号墳周溝	形象埴輪	(口径) ― cm (器高) ― cm	内外面不定方向のナデ	微細な砂粒多量に含む	良好	外：にぶい黄橙 内：灰黄褐	―	土師質	045-03
185	B地区 SK3	須恵器 短頸壺	(口径) 8.8cm (器高) 7.1cm	体部ロクロナデ、カキ目残る、底部ケズリ、内面ナデ	密	良好	外：淡黄～灰 内：黄灰	約70%	上面に灰被り痕、体部に重ね焼き痕	037-01
186	B地区 SK3	須恵器 杯蓋	(口径) 12.3cm (器高) 4.9cm	体部ロクロナデ、天井部ロクロケズリ	長石粒等含むが密	良好	外：灰白 内：〃	約70%		037-04
187	B地区 SK3	須恵器 杯蓋	(口径) 12.2cm (器高) 5.0cm	体部ロクロナデ、天井部ロクロケズリ	長石粒等含むが密	良好	外：灰白 内：〃	完存		037-02
188	B地区 SK3	須恵器 杯	(口径) 10.4cm (器高) 4.9cm	体部ロクロナデ、底部ロクロケズリ	密	やや軟質	外：灰白 内：〃	約90%		037-03
189	B地区 SK7	土師器 台付甕	(口径) ― cm (器高) ― cm	体部外面タテハケ、内面ケズリ、脚部ナデ	微細な砂粒多いが密	良好	外：灰黄 内：黒褐	―		036-02
190	B地区 SK7	土師器 高杯	(脚径) 17.5cm	外面ヘラミガキ、内面ナデ、円形透穴	緻密	良好	外：にぶい赤褐 内：褐	脚部径の1/2	脚部内面に黒色物付着	036-03
191	B地区 SK7	土師器 甕	(口径) ― cm (器高) ― cm	外面細かい並行タタキ目とハケ、内面ナデ	微細な白色粒多量に含む	良好	外：にぶい橙 内：〃	―	外面二次焼成による赤化、庄内系か	044-02
192	B地区古墳時代 遺構面上	土師器 台付甕	(口径) 17.4cm	外面タテハケ、下部ナデ、内面ナデ・板ナデ	微細な砂粒を多量に含む	良好	外：暗灰黄 内：〃	約30%	体部外面下半が二次焼成による赤化	038-01
193	B地区古墳時代 遺構面上	須恵器 杯	(口径) 10.5cm (器高) 4.3cm	体部ロクロナデ、底部ロクロケズリ	微細な白色粒含むが密	良好	外：灰 内：〃	完存		040-01
194	B地区古墳時代 遺構面上	土師器 広口壺?	(底径) 6.5cm	外面上半ナデ・下半ケズリ、内面ナデ・板ナデ、径5cm程の穿孔	微細な砂粒多量に含むが密	良好	外：にぶい橙 内：オリーブ黒	体部の1/2	穿孔径4.8cm×5.1cm	039-01
195	B地区古墳時代 包含層	土師器 二重口縁広口壺	(口径) 9.3cm	外面ヘラミガキ、内面ナデ、端部櫛状工具の連続刺突文	1mm程の砂粒含むが密	良好	外：明赤褐 内：明褐	口径の1/4		045-04
196	B地区古墳時代 包含層	土師器 高杯	(口径) 24.3cm	外面ハケのちヘラミガキ、内面ヘラミガキ	微細な砂粒多いが密	良好	外：橙 内：にぶい橙	杯部径の1/2		047-01
197	B地区古墳時代 包含層	土師器 直口壺	(口径) ― cm (器高) ― cm	外面タテハケ、貼付突帯に連続刺突文、内面ナデ	微細な砂粒多量に含む	良好	外：浅黄橙 内：にぶい黄橙	―		043-03
198	B地区古墳時代 包含層	土師器 広口壺	(口径) 13.1cm	外面ハケ目、口縁端部連続刺突文、肩部櫛描横線文・刺突文、内面ナデ、ハケ目調整	極微細な砂粒を多量に含む	良好	外：明赤褐 内：〃	約30%		040-04
199	B地区古墳時代 包含層	土師器 直口壺	(口径) 9.0cm (器高) 8.8cm	口頸部ヨコナデ、体部下半ヘラケズリ、内面ナデ、頸部外面にヘラ記号	1mm前後の白色粒や砂粒多量に含む	良好	外：にぶい黄褐 内：にぶい褐	約40%	体部外面下半に黒斑あり	043-02
200	B地区古墳時代 包含層	土師器 直口壺	(口径) 9.0cm (器高) 14.1cm	口頸部ヨコナデ、体部ナデ、底部内面ケズリ	1mm前後の白色粒や砂粒多量に含	やや軟質	外：橙 内：橙	約50%		043-01
201	B地区古墳時代 包含層	土師器 直口壺	(底径) 3.3cm	体部細かいハケ後ナデ、内面ケズリ後ナデ	微細な砂粒多量に含む	良好	外：にぶい黄橙 内：〃	体部の約50%	体部下半にスス付着	043-04
202	B地区古墳時代 包含層	土師器 直口壺?	(底径) 3.9cm	外面タテハケ、内面ハケ目調整	密	良好	外：にぶい黄 内：にぶい橙	底部のみ残存	体部外面に黒斑あり	045-05
203	B地区古墳時代 包含層	土師器 甕	(口径) 3.9cm (器高) ― cm	口頸部ヨコナデ、肩部外面ヨコハケ、内面ナデ	微細な砂粒多量に含むが密	良好	外：にぶい黄橙 内：にぶい橙	―	北陸・山陰系か?	053-02
204	B地区古墳時代 包含層	土師器 台付甕	(口径) 16.4cm	体部外面タテハケ後ヨコハケ、内面板ナデとヨコハケ	微細な砂粒含むが密	良好	外：にぶい黄 内：灰黄	口径の1/4		046-02
205	B地区古墳時代 包含層	土師器 台付甕	(口径) 17.0cm	体部外面タテハケ後ヨコハケ、内面ナデとヨコハケ	微細な砂粒含むが密	良好	外：淡黄 内：〃	口径の1/4		046-03
206	B地区古墳時代 包含層	土師器 台付甕	(口径) 15.3cm	体部外面タテハケ、内面板ナデ	1mm程の砂粒含むが密	良好	外：にぶい橙 内：橙	口径の1/4		054-03
207	B地区古墳時代 包含層	土師器 台付甕	(口径) 16.8cm	口頸部ヨコナデ、体部タテハケ、内面ナデ	小石や砂粒を多量に含むが密	良好	外：にぶい黄橙 内：〃	口径の1/2		046-01
208	B地区古墳時代 包含層	土師器 甕	(口径) 10.4cm	口縁ヨコナデ、体部外面タテハケ、内面ナデ	微細な砂粒多いが密	良好	外：灰黄褐 内：黒褐	口径の1/4		040-05
209	B地区古墳時代 包含層	土製品 土錘	(全長) 8.6cm (孔径) 1.9cm (残量) 89.8g	全面ナデ	密	良好	外：にぶい黄橙	完存		044-04
210	B地区古墳時代 包含層	須恵器 杯蓋	(口径) 11.2cm (器高) 3.9cm	体部ロクロナデ、天井部ロクロケズリ	微細な白・黒色粒含む	やや軟質	外：灰 内：〃	口径の1/4		028-02
211	B地区古墳時代 包含層	須恵器 杯蓋	(口径) 12.6cm (器高) 3.9cm	体部ロクロナデ、天井部ロクロケズリ	微細な砂粒等含むが密	やや軟質	外：灰 内：〃	口径の2/3		031-01
212	B地区古墳時代 包含層	須恵器 杯	(口径) 11.2cm	体部ロクロナデ、底部ロクロケズリ	密	良好	外：灰 内：〃	口径の1/4		040-02
213	B地区古墳時代 包含層	須恵器 高杯	(口径) ― cm (器高) ― cm	杯部ロクロナデ、突帯2条、波状文	密	良好	外：灰 内：〃	―		041-04
214	B地区古墳時代 包含層	須恵器 甕?	(口径) ― cm (器高) ― cm	ロクロナデ、疑突帯1条、波状文	微細な砂粒を多量に含む	良好	外：灰白 内：灰	―	215と同一個体	044-03a
215	B地区古墳時代 包含層	須恵器 甕?	(口径) ― cm (器高) ― cm	ロクロナデ、疑突帯2条、波状文	微細な砂粒を多量に含む	良好	外：灰白 内：灰	―	214と同一個体	044-03b
216	B地区古墳時代 包含層	須恵器 広口壺	(口径) 12.4cm	体部ロクロナデ、頸部に突帯1条	密	良好	外：暗灰 内：〃	口径の1/4	上半に自然降灰釉	040-03

No	遺構・層位	器　種	計　測	値調整・技法の特徴	胎土	焼成	色　調	残存度	備考	登録番号
217	B地区	弥生土器 最下層壺	(口径)　－ cm (器高)　－ cm	外面櫛描横線文と波状文、内面ハケ目	微細な砂粒含む	良好	外：にぶい黄橙 内：にぶい橙	－		054-02
218	B地区 最下層	土師器 高杯	(脚径)　13.2cm	外面ヘラミガキ、内面シボリ、円形透穴	緻密	堅緻	外：浅黄橙 内：〃	脚部の約40%		054-05
219	B地区 最下層	弥生土器 壺	(口径)　7.3cm	外面タテハケ後ヘラミガキ、内面ナデ	1㎜程度砂粒含む	良好	外：にぶい黄橙 内：淡黄	底部のみ残存		054-04
220	B地区 最下層	土師器 広口壺	(口径)　13.4cm	口頸部ヨコナデか	1㎜弱の砂粒多量に含	やや軟質	外：橙 内：明赤褐	口径の1/3	南関東系か？	053-01
221	B地区 最下層	土師器 台付甕	(口径)　16.5cm	外面タテハケ、内面ヨコハケ、口縁に刺突文	微細な砂粒多量に含む	良好	外：にぶい黄橙 内：にぶい黄	口径の1/4		054-01
222	B地区 最下層	土師器 台付甕	(口径)　11.2cm	外面タテハケ後ヨコハケ、内面ケズリ	微細な砂粒か多量に含む	良好	外：淡黄 内：〃	口径の1/6		055-01
223	B地区 最下層	土師器 手焙形土器	(口径)　－ cm (器高)　－ cm	外面下半ヘラミガキ、上半ヨコハケ、内面ハケ	微細な砂粒多量に含む	良好	外：にぶい赤褐 内：灰黄褐	－		059-01
224	B地区 試掘坑	土師器 高杯	(脚径)　18.6cm	外面タテハケ、内面ナデ、円形透穴4個以上	微細な砂粒多量に含む	良好	外：明赤褐 内：明黄褐	脚部の約60%	試掘坑No10出土	058-03
225	B地区 試掘坑	土師器 高杯	(脚径)　10.8cm	内面ハケ、外面ヘラミガキか？	微細な砂粒多いが密	良好	外：橙 内：〃	脚部のみ残存	試掘坑No4出土	056-02
226	B地区 試掘坑	土師器 鉢	(口径)　14.0cm (底径)　4.8cm (器高)　4.9cm	内外面ヘラミガキ、底部ナデ	微細な砂粒含むが密	良好	外：にぶい橙 内：〃	約40%	試掘坑No10出土	056-03
227	B地区 試掘坑	土師器 小型丸底壺	(口径)　9.2cm	口縁部ヨコナデ、体部ナデ	微細な砂粒多量に含む	良好	外：明赤褐 内：〃	口径の1/3	試掘坑No2出土	056-01

V　結　語

1　小野江甚目1号墳・2号墳

今回の発掘調査では、従来考古学的知見の乏しかった雲出川下流域の低地において2基の古墳や中世の溝、各種の災害痕跡を発見し、大きな成果を上げる事ができた。これらについて整理しておきたい。

まず2基の古墳について出土埴輪類を中心に比較してみたい。まず円筒埴輪だが、1号墳の中において、基本的にはタテハケ調整を外面の二次調整とするAⅡ①類としたものが多数を占め、完形に近い状態や大型の破片として出土した個体からも、これが1号墳の主体となっている事が裏づけられる。しかし、周溝の北側と南側では差異もみられ、北側では粗いタテハケと軟調の焼成、厚手の器壁をもつAⅠ類が少量含まれる。1号墳は墳丘北側が雲出川の洪水の際には、その攻撃面にあたり、いち早く墳丘が削られた痕跡がある。AⅠ類はその点、周辺の未発見の古墳からの混入資料とみることもできるだろう。[1]

それに対して2号墳は、ヨコハケを外面の二次調整とし、胎土もAⅡ①類と似るものの、やや粗砂が多い。ヨコハケ系のものが主体となる事はB地区全体でも窺える。また、底部調整技法でみると、所謂「淡輪技法」系[2]のものが1号墳にのみ認められる。1号墳と2号墳はいずれも直径約19mと約17mと推定され、ほぼ同規模といえ、両者の間はおよそ25mほど離れており、あるいはまだ未確認の古墳が周囲にある可能性も高いが、円筒埴輪でみる限り、1号墳と2号墳は異なった組成をもっていた事は明らかである。

形象埴輪については、調査区の制限もあり、確断はできないが、2号墳には乏しい印象を受ける。1号墳では、ほぼ全体が復原できる馬形埴輪（132）をはじめ、細片とはいえ、家形埴輪とみられる破片（128・129）や、図示していないが人物埴輪の可能性のある破片も出土している。2号墳では、包含層から形態不明の破片（184）が1点出土しているのみである。

出土土器で両古墳をみてみると、直接比較できるものは乏しい。ただ精製の土師器椀をみると、1号墳出土のもの（139）は口径12.8cm、深さ5.0cmで底部下半のみヘラケズリするのに対して、2号墳のもの（175・176）は、口径はほぼ同じだが、器高がそれぞれ5.3cm、5.6cmで体部も丸くつくる。また底部全体をヘラケズリし、型式上2号墳のものがやや古相を示すと考えられる。

出土須恵器は、1号墳では良好な出土資料が無いが、2号墳では周溝埋土内から（181～183）を得ている。（181）は広く外へシャープに広がる二重口縁をもつが、頸部が太くなる傾向が窺え、大阪府陶邑窯編年[3]のTK23型式に並行するものと考えられる。瓿（182）も同様の傾向を示す。

このようにみてくると、1号墳と2号墳では、かなり近接した時期が想定できるものの、2号墳がや

や先行するものと捉える事ができよう。2号墳は出土須恵器からみて若干の時間幅が想定できるものの、5世紀後葉に築造時期が求められ、1号墳はわずかに遅れて5世紀末～6世紀前葉の築造と考えたい。

2　円筒埴輪と馬形埴輪

次に出土埴輪類についてもう少し詳細にみてみたい。円筒埴輪については、2号墳および周辺出土のヨコハケを二次調整の主体とした一群をもつが、前章でもふれたとおり同一の型式の中で各種の調整法が混在する可能性がある。ヨコハケの分類についても、川西氏の分類[4]を基本としてＡＢＣの3種を設定したが、Ａ種としたものでも低速で断続的ながらも回転台を使用した可能性が考えられ、Ｃ種としたものとの技術的相違はあまりないように思われる。同様にＢ種とされる断続ヨコハケについても、今回の調査地内では異質な印象を受ける（173）を除けば各静止間の単位幅は一定しない様にみえる。こうしたバリエーションと地域色については竹内英昭氏によって既に指摘されており、[5] 本古墳群においても同様の傾向が窺われる結果となった。

1号墳では、唯一全体の器形がわかる（97）が出土しており、胎土・焼成の共通性から3段2突帯構成のものが主体になるとみられる。[6] いずれも最上段はやや外反して広がるが、短く、全体に寸胴な感じのものである。外面はタテハケ調整で、「淡輪技法」系の底部調整技法がみられる。同様な埴輪は比較的近接地である三雲町中ノ庄古墳[7]や雲出川流域の嬉野町でも今のところみられない。唯一類似する例は、松阪市常光坊谷4号墳[8]に求められる。

常光坊谷4号墳は、阪内川中流域の丘陵上に位置する直径約17ｍの円墳で、5世紀末に比定されている。円筒埴輪は「淡輪技法」系のもののみで構成され、馬形埴輪をはじめ、人物・家形・鶏形など多彩な形象埴輪群を伴っている。円筒埴輪は一部ヨコハケも用いられるが、一部の調整に止まっており、基本的にはタテハケ系のものといえる。規格・胎土・焼成ともに小野江甚目1号墳のＡⅡ①類の一群と良く似ており、最上段に施されるヘラ記号にも類似性を感じる。常光坊谷4号墳では須恵質として報告されているものが多いが、胎土は土師質のものと変わらず、同一個体でも土師質から灰白色へ変移するものもあり、明確に須恵質といえるものはない。この点も小野江甚目1号墳のＡⅡ①類とＡⅡ②類との関係とも共通する。

馬形埴輪についても、その製作技法や大きさだけでなく、刺突文による鞍褥、線刻による鐙の表現なども類似する。筒状の顔部や太く短い脚部寸胴な体部等外観の印象も似る。ただし雲珠や面繋・鏡板などの馬具の表現は、小野江例では一切省略されている。馬具の、特に鞍部の刺突文による表現の伊勢地方での共通性については穂積裕昌氏により指摘されているが、[9] この2古墳ほど埴輪の親近性を示す例はこれまでにみられない。常光坊谷4号墳も、周辺の調査によって狼谷古墳[10]・八重田7号墳[11]など前後する時期の古墳が調査されているが、これらは細身の形状でヨコナデ調整を基本とするグループであり、常光坊谷4号墳とはかなり懸隔がある。また、同じ古墳群内でも埴輪群を伴うのは4号墳のみである。

「淡輪技法」系の円筒埴輪にしても、常光坊谷4号墳は現在伊勢地方では分布域の最も南に位置し、一志郡内においても小野江甚目1号墳が現在唯一の出土例となる。こうした技法の伝播は、一志郡内でも中村川流域や雲出川中流域でなく、伊勢平野低地部を媒介とした紐帯も想定できる。ただし、小野江甚目1号墳では「淡輪技法」系のものだけでなく、通常形態の円筒埴輪と混在した状況であり、この点についての検討は、低地部の古墳調査例の増加を待つ必要があると思われる。しかし、今回調査したような5世紀末～6世紀前葉の埴輪を伴う低地部のグループと6世紀以降横穴式石室を導入していく一志郡内でも丘陵部のグループは、それぞれ異なった基盤によって立つものとして検討していく必要があるだろう。

3　中世の溝について

Ｂ地区南端で繰り返し掘削された溝を発見した。初源は12世紀代までは遡り得る。また、最上層でこれにおおむね沿う近世の溝ＳＤ5も確認している。これらは現在の圃場整備を経た水田面上では全く確認できず、戦後米軍が撮影した航空写真等でも見られない。検出した溝は若干の振れはあるものの、およそＮ40°Ｅ前後の向きで、これらは航空写真や地図類、地名で推定される、古代～中世における一

志郡内の条里制地割りが仲見秀雄氏の復原案[12]でおよそN10°E。とされるものと異なる。Ⅱ章でもふれたとおり、周辺の舞出・肥留には「一の坪」の字名が残り、仲見氏の復原案でも東小野江には遺構が想定されている。今回の調査地周辺はかつては条理地割りが連続していたものが、氾濫によって消失したものとみられる。B地区の溝は地割りが消失した時期を示すものとして貴重な例となるものであろう。

4　自然災害の痕跡について

A地区において大規模な洪水によるとみられる砂層を、B地区では大地震によるとみられる噴砂[13]の痕跡を確認した。特に噴砂痕は近年三重県下でも確認例が増加しており、山口格氏による集成[14]も行なわれており、平成9年度には、嬉野町天花寺北瀬古遺跡でも噴砂痕が確認されている。[15] 小野江甚目遺跡の例は、2号墳周溝埋土を断ち切っており、調査区壁面の土層を観察すると、第2遺構面にまでわずかに達している。この地震は6世紀以降、中世までに発生したものとみられるが、あるいは繁栄を誇った安濃津を壊滅させた明応7（1498）年の地震痕跡の可能性も考えられよう。[16]

今回の調査は、道路建設による細長い調査区で制約も多かったが、当地の文化を構成する多彩な要素を窺い知る事ができた。沖積平野上の低地ゆえの埋蔵文化財の範囲確認や調査技術上の課題も多い。しかし、従来乏しかった三雲町内での考古学的知見の蓄積は、伊勢平野の文化風土全体の解明のためにも必要不可欠な事は今回の調査においても証明されたといえるだろう。

〔注〕

① 平成10年度の試掘調査で雲出川右岸上流の舞出北遺跡でも埴輪片が出土している。『一般国道23号中勢道路埋蔵文化財発掘調査概報XI』三重県埋蔵文化財センター　1999

② 川西宏之「円筒埴輪総論」『考古学雑誌』第64巻第2号　日本考古学会　1978

③ 田辺昭三『須恵器大成』角川書店　1981

④ 前掲②

⑤ 竹内英昭「伊勢地方の埴輪事情」『「一之郡」の考古学』一志町・嬉野町遺跡調査会　1991

⑥ 赤塚次郎「円筒埴輪－東海」『古墳時代の研究』9　雄山閣　1992

⑦ 谷本鋭次『中ノ庄遺跡』三重県教育委員会　1972

⑧ 西田尚史「常光坊谷古墳群」『中部平成台団地埋蔵文化財発掘調査報告書』松阪市教育委員会　1990

⑨ 穂積裕昌『三重の埴輪』三重県埋蔵文化財センター　1998

⑩ 下村登良男「狼谷古墳」『中部平成台団地埋蔵文化財発掘調査報告書』松阪市教育委員会　1990

⑪ 下村登良男『八重田古墳群発掘調査報告書』松阪市教育委員会　1981

⑫ 仲見秀雄「一志郡の条里制」『伊勢湾岸地域の古代条里制』東京堂出版　1979

⑬ 寒川　旭「地震考古学」『考古学による日本歴史16』雄山閣　1996

⑭ 山口　格「地震と遺跡」『古代学研究』141 古代學研究會　1998

⑮ 三重県埋蔵文化財センター『天華寺北瀬古遺跡現地説明会資料』　1997

⑯ 伊藤裕偉『安濃津』三重県埋蔵文化財センター　1997

遺跡周辺航空写真（北東から）

調査前風景（南から）

ＳＤ１・ＳＥ１（東から）

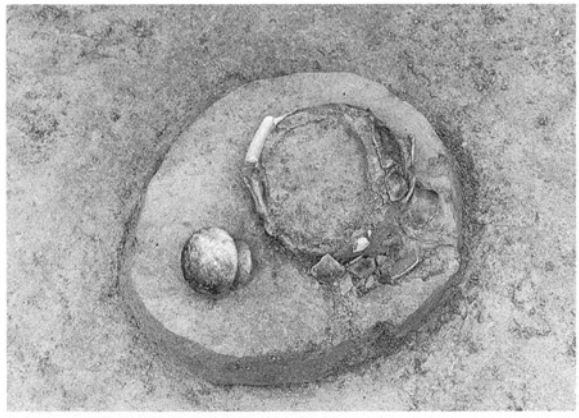
１号墳南側周溝埋土（南東から）

１号墳北側周溝（南西から）

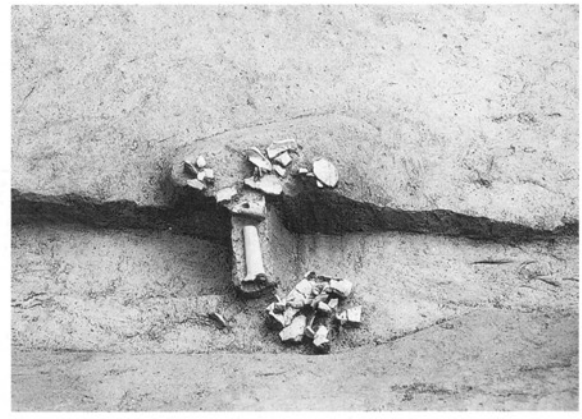
1号墳全景（北から）

1号墳全景（南から）

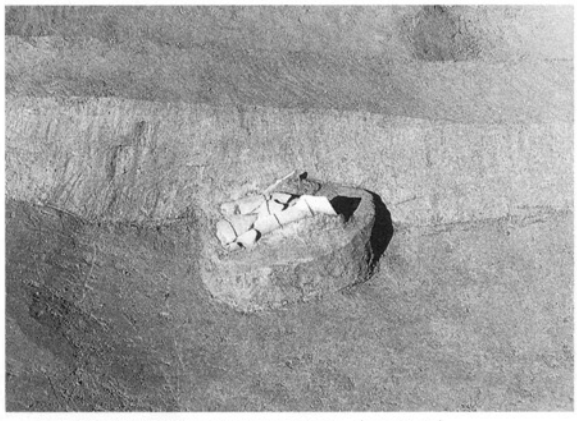
1号墳馬形埴輪出土状況（南から）



1号墳墳丘肩部遺物出土状況（南から）



1号墳馬形埴輪出土状況（西から）



1号墳周溝円筒埴輪出土状況（東から）

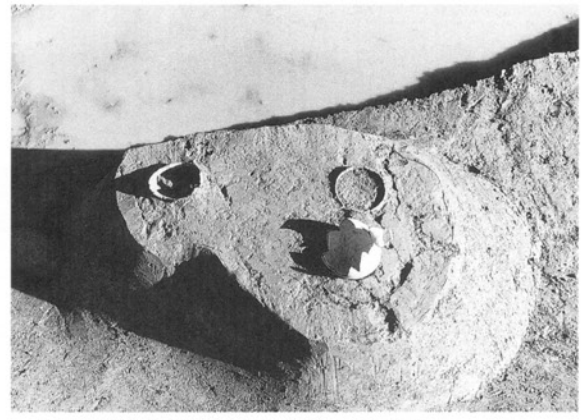
1号墳周溝円筒埴輪出土状況（西から）

2号墳全景（北から）

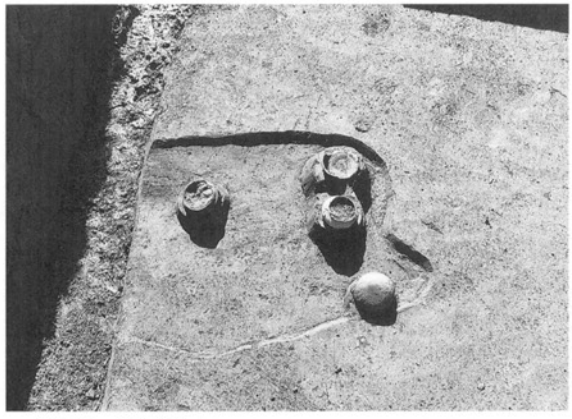
2号墳全景（南東から）

２号墳周溝南半（北東から）

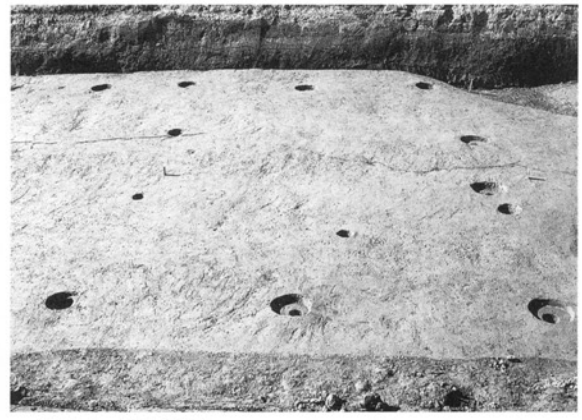
２号墳周溝内遺物出土状況（北西から）



２号墳周溝内遺物出土状況（西から）

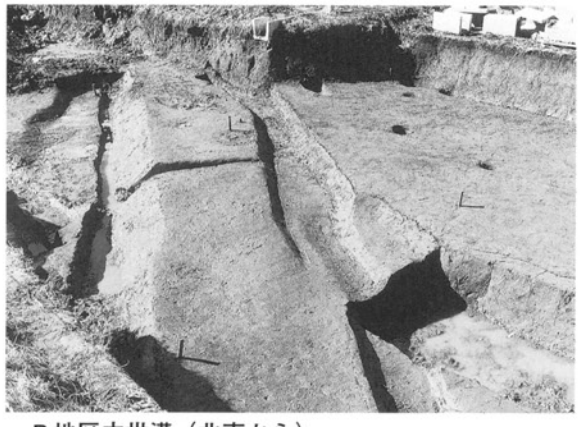


ＳＫ３（北から）



ＳＢ１（西から）

ＳＢ１（北から）

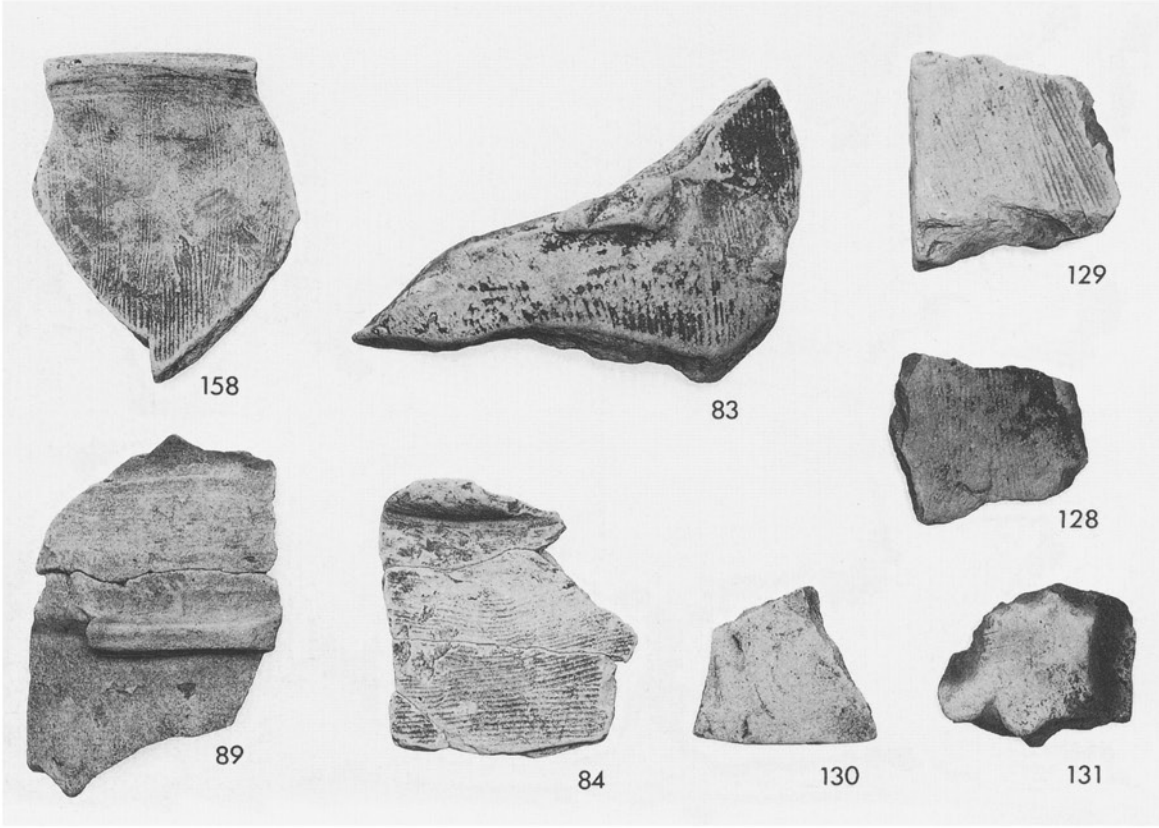


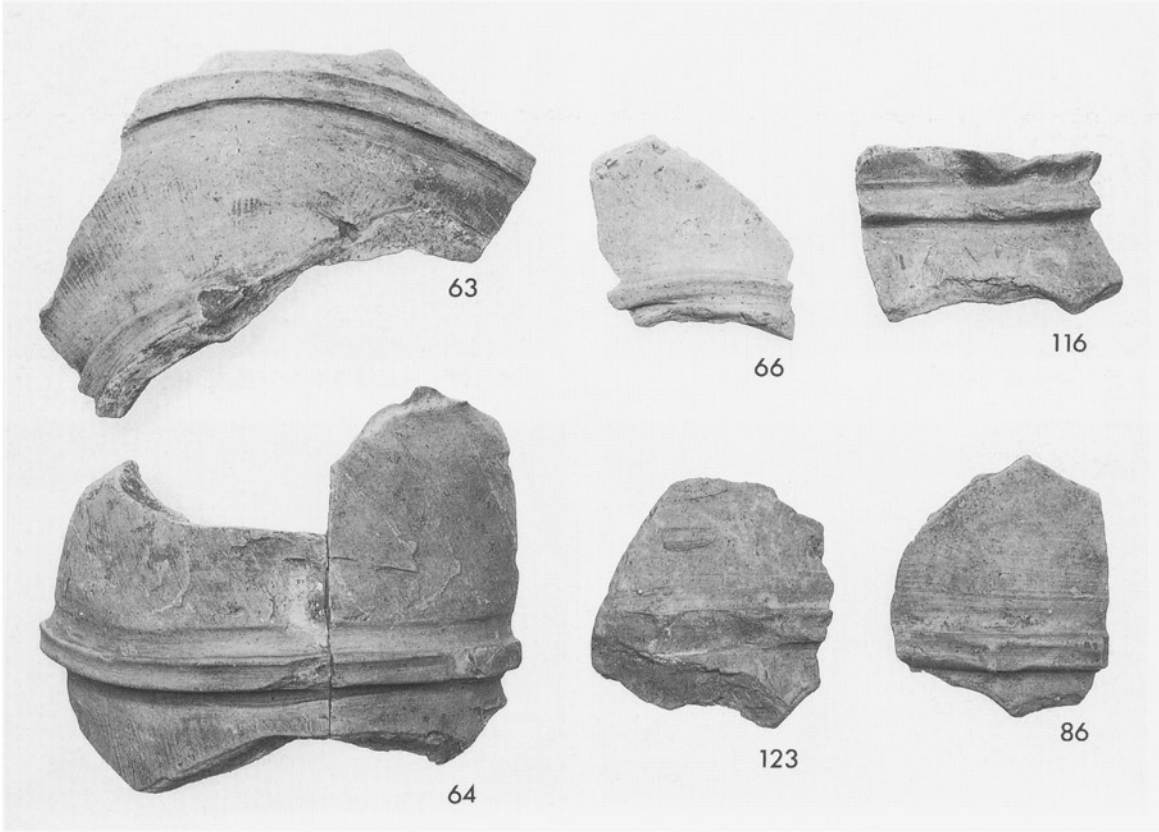
Ｂ地区中世溝（北東から）

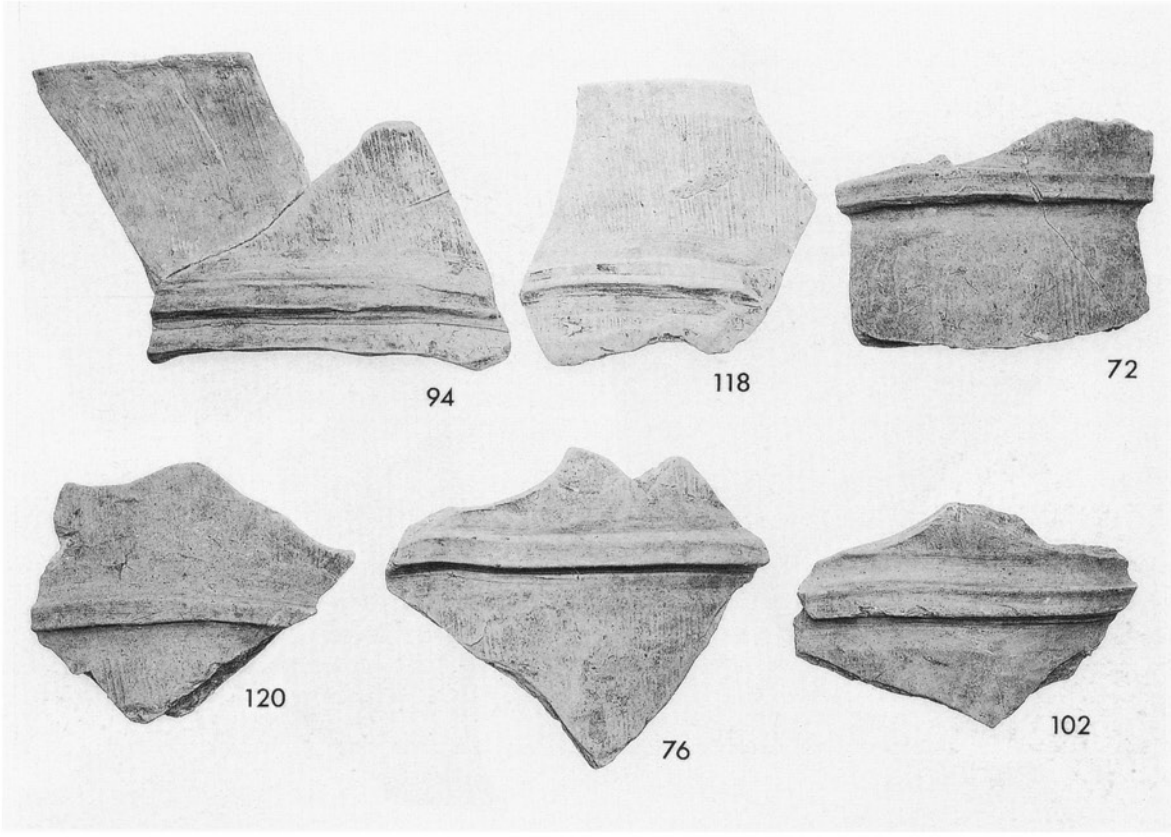
Ｂ地区最下層確認トレンチ断面（西から）

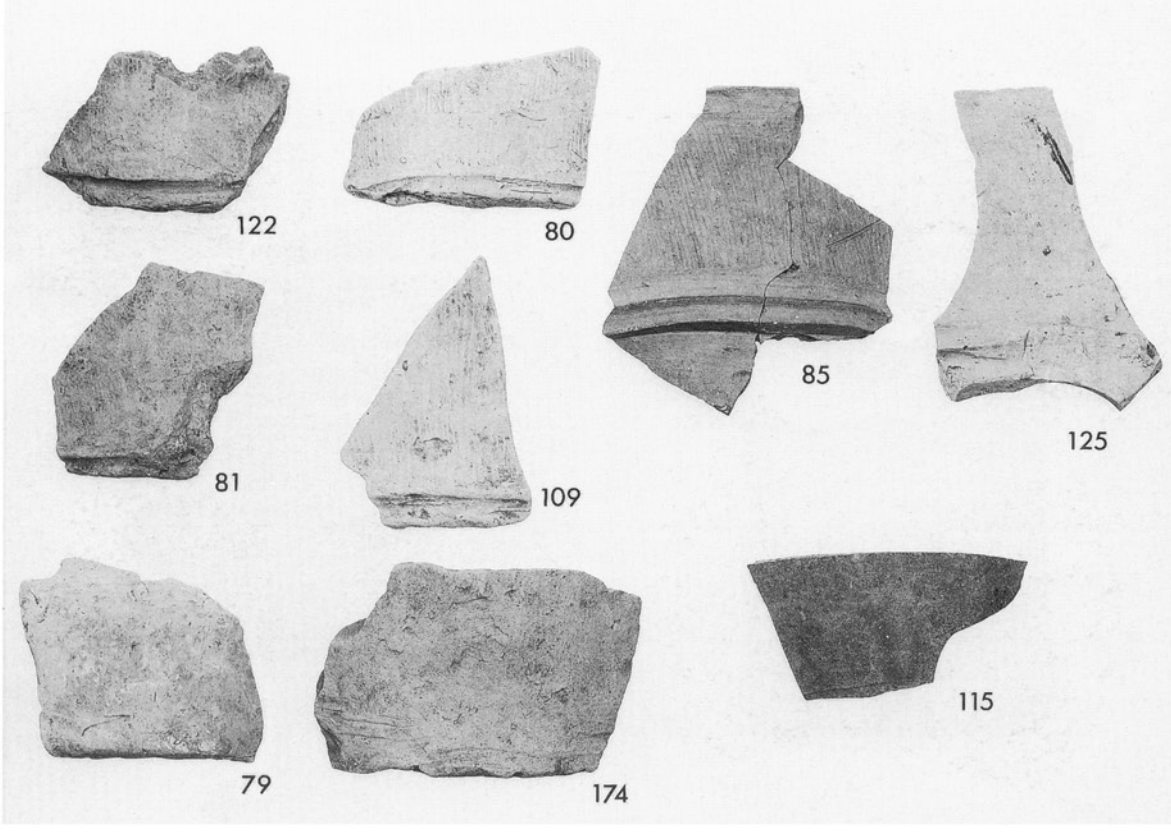
Ｂ地区噴砂検出状況（南東から）

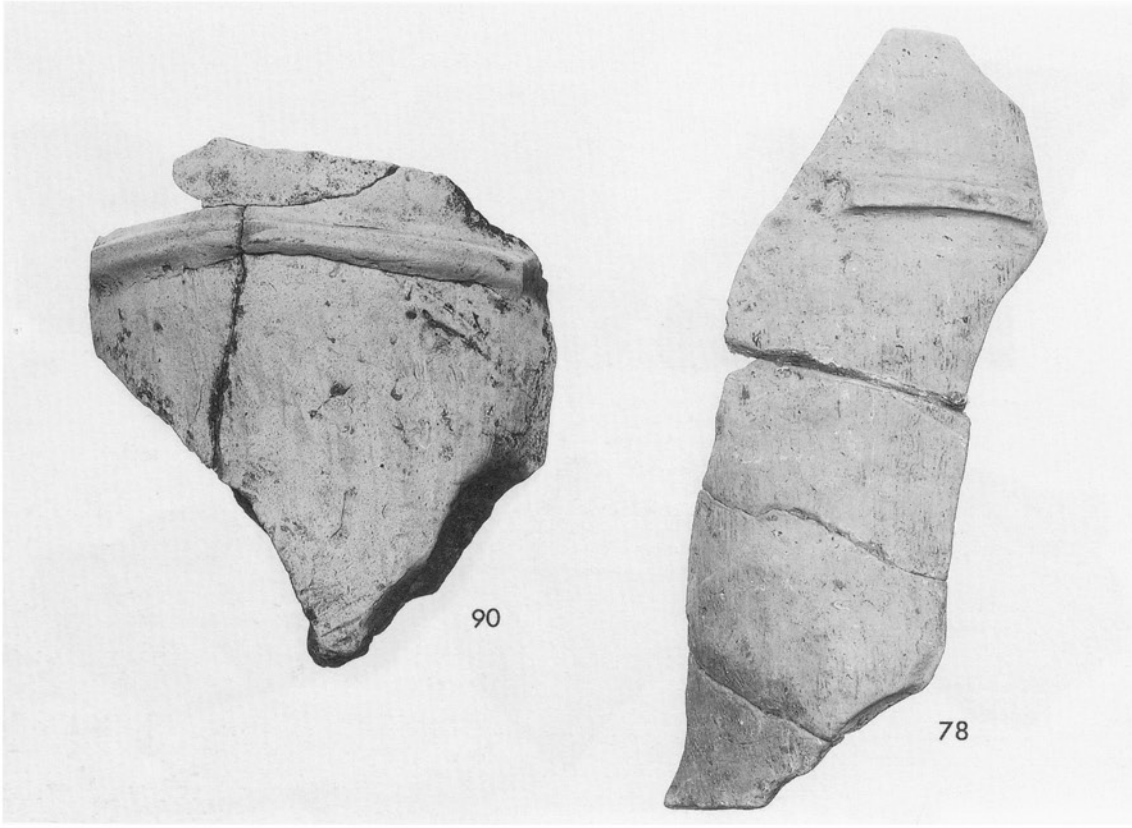
Ｂ地区噴砂断ち割状況（南から）


158
83
129
128
89
84
130
131


63
66
116
64
123
86


94
118
72
120
76
102

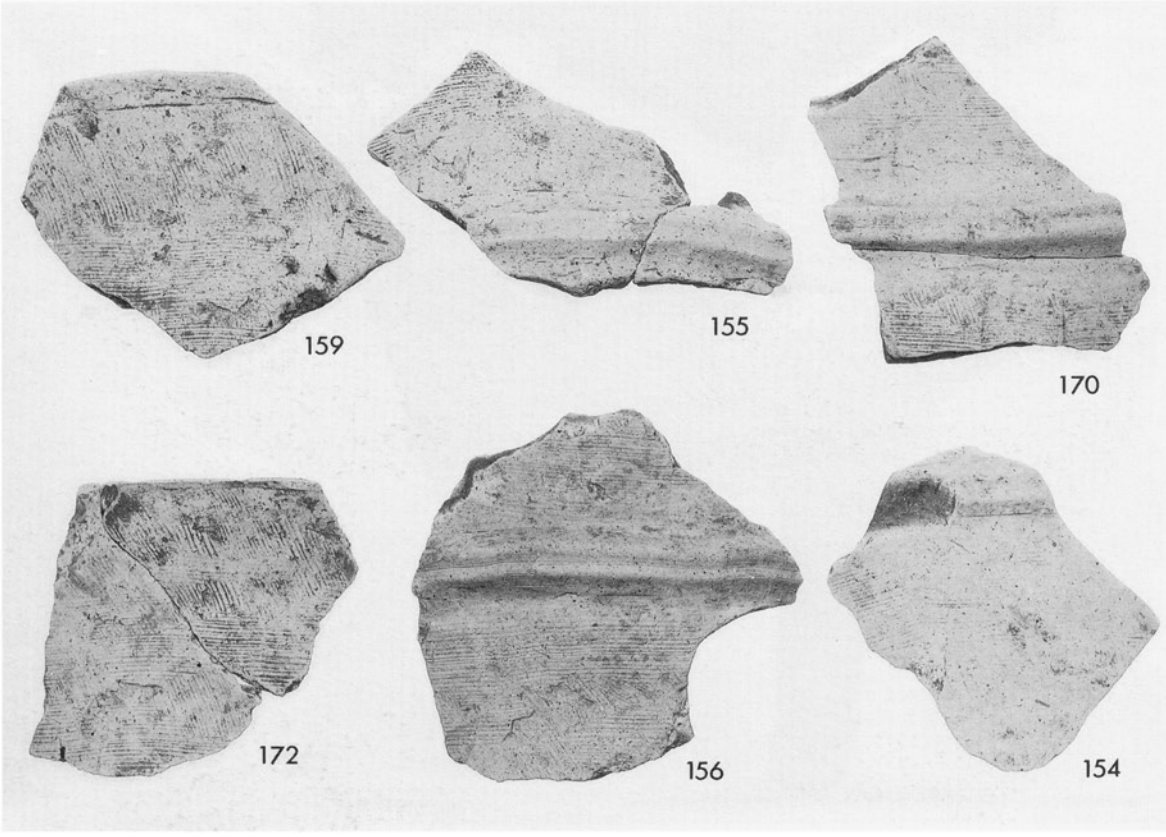

122
80
85
125
81
109
115
79
174

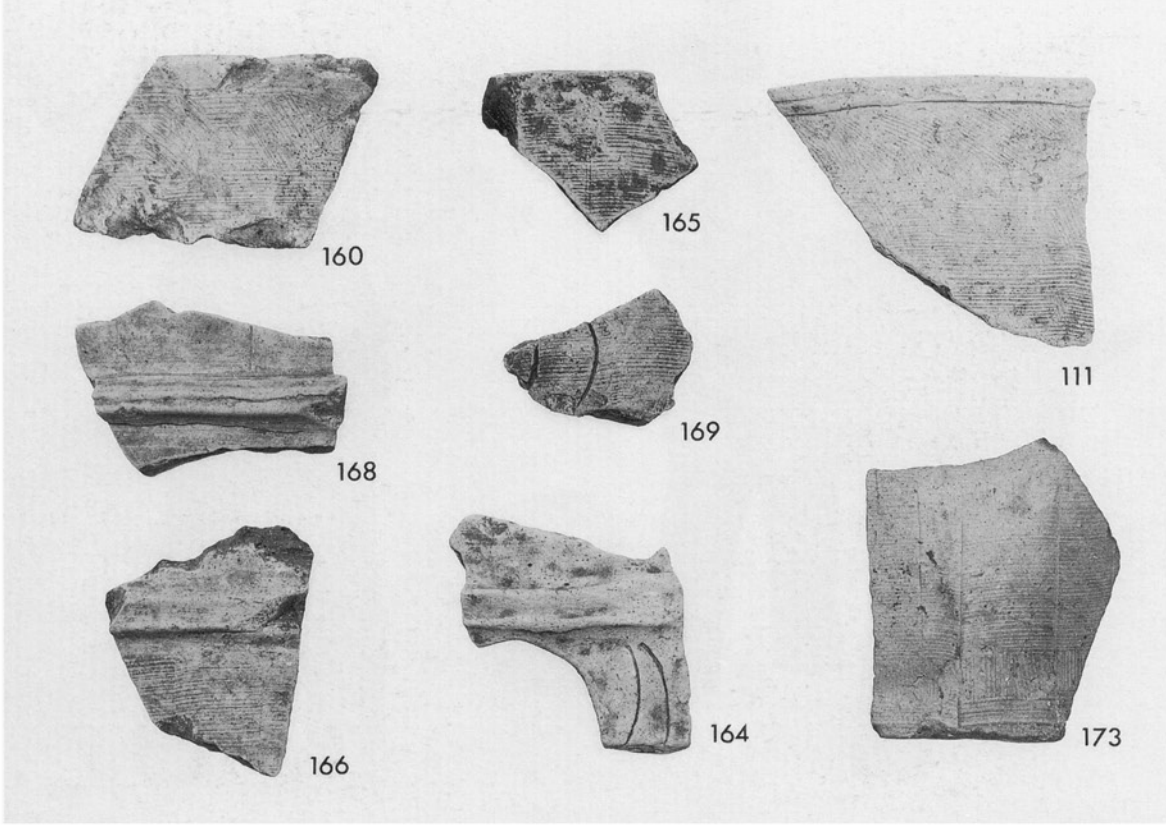

90
78

97

98

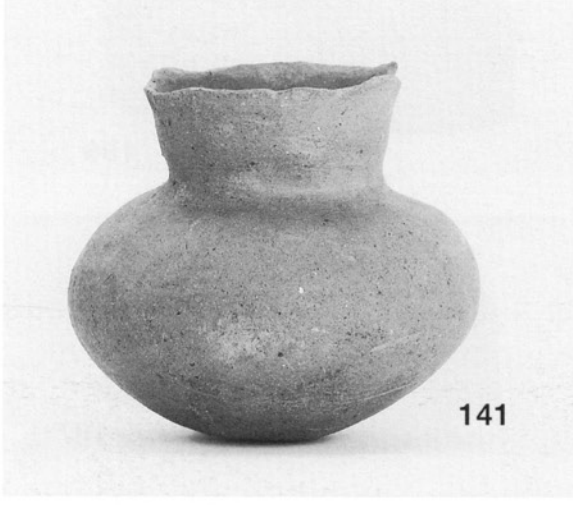
132


159
155
170
172
156
154


160
165
111
168
169
166
164
173

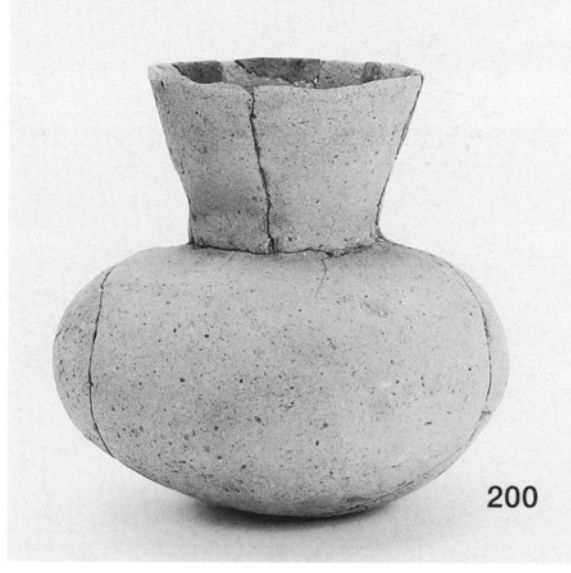
133

134


141

135

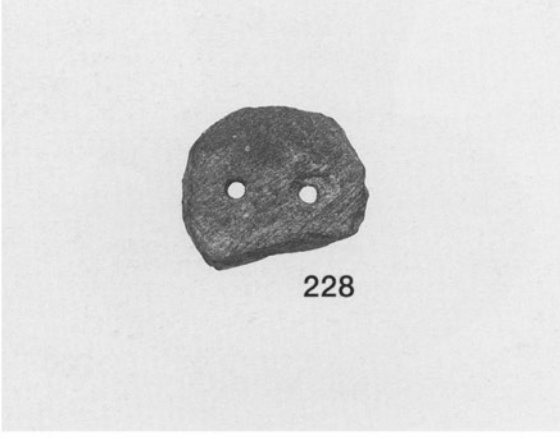
140


200

175

176

180


228

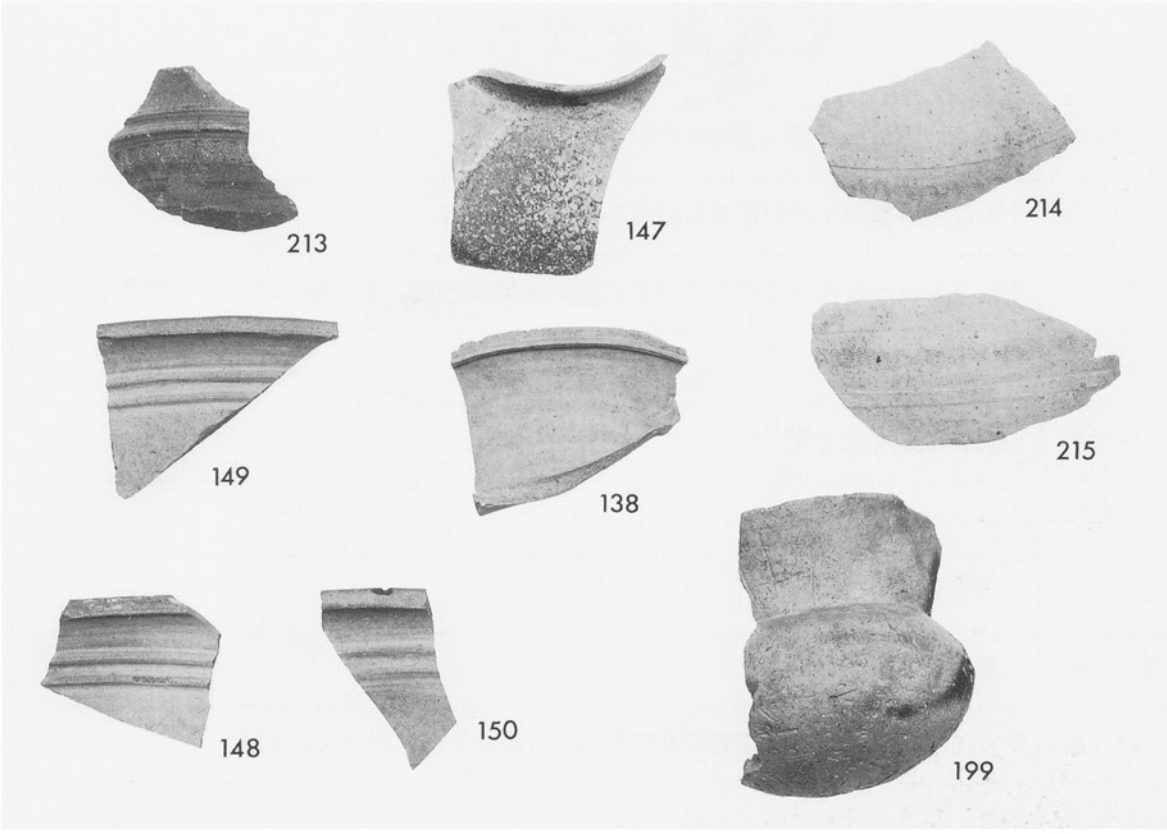
183

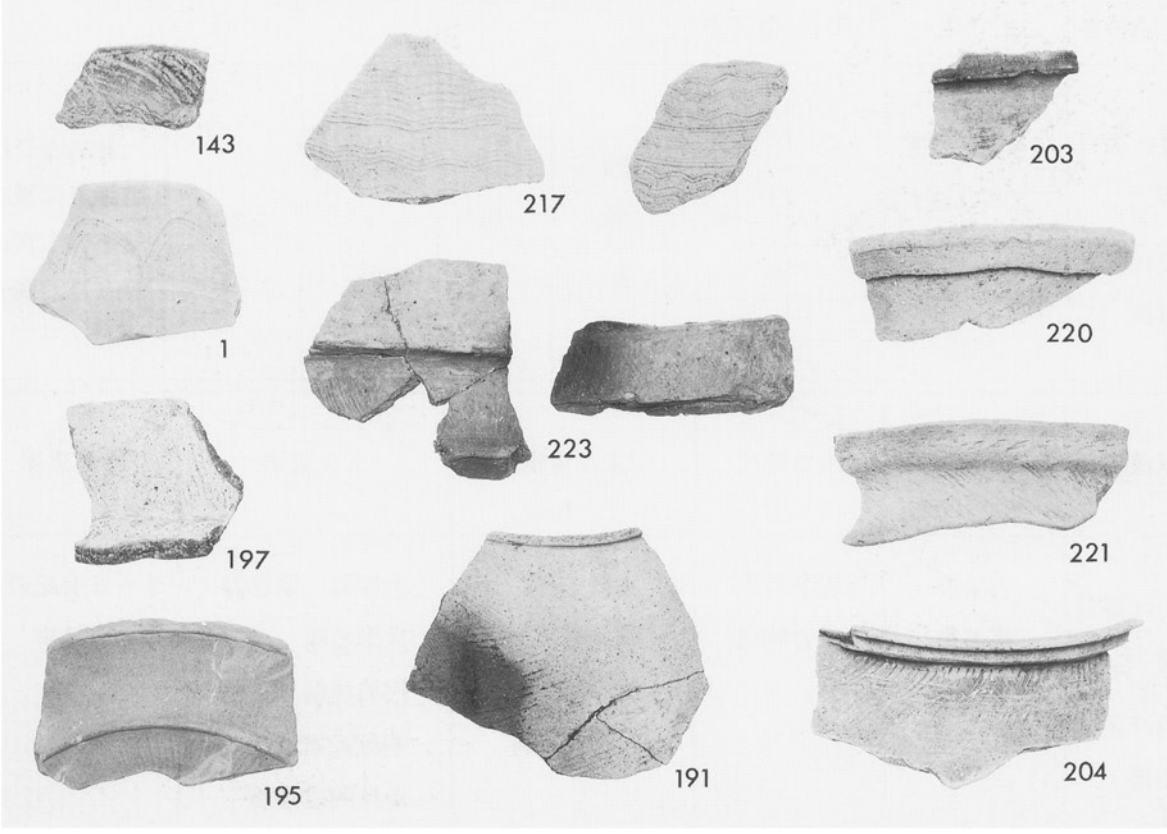
186

187

188

185


213
147
214
149
138
215
148
150
199


143
217
203
1
220
223
197
221
195
191
204

発掘調査報告書抄

ふりがな	おのえはだめいせき・おのえはだめこふんぐん
書　　名	小野江甚目遺跡・小野江甚目古墳群発掘調査報告
副 書 名	平成９年度一般地方道嬉野津線雲出橋国補橋梁整備工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告
巻　　次	な　し
シリーズ名	三重県埋蔵文化財調査報告
シリーズ番号	１７６
編著者名	大川勝宏
編集機関	三重県埋蔵文化財センター
所 在 地	〒515-0325 三重県多気郡明和町竹川503番地　☎　0595-52-1732
発行年月日	西暦　１９９９年３月２６日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 (m²)	調査原因
		市町村	遺跡番号					
小野江甚目遺跡 小野江甚目古墳群	三重県一志郡三雲町小野江・甚目字南浦他	24407	3	34°38′24″	136°30′47″	19971104 ～ 19980212	1,800	一般地方道嬉野津線国補橋梁整備工事に伴う事前調査

所収遺跡名	種　別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
小野江甚目遺跡 小野江甚目古墳群	古墳群 集落跡	古墳時代 鎌倉時代	古墳 掘立柱建物 溝・土坑 自然流路跡	土師器・須恵器 馬形埴輪 円筒埴輪 朝顔形埴輪 中世陶磁器類	５～６世紀の低地の古墳群

平成 11(1999) 年 3 月に刊行されたものをもとに
平成 19(2007) 年 8 月にデジタル化しました。

三重県埋蔵文化財調査報告１７６
平成９年度一般地方道嬉野津線国補橋梁整備工事にかかる

小野江甚目遺跡・小野江甚目古墳群発掘調査報告書

１９９９年３月

編集
発行　三重県埋蔵文化財センター
印刷　文化印刷有限会社